

沖田さんと行く！人理修復の旅

青い灰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レイシフト最後の、49番目のAチームの適正者。

彼は偶然生き残り、立香とマシユ、そして——彼女と人理修復へ挑むのだった。

UA60000達成!!

お読み下さりありがとうございます!!

目次

イベント

ぐだぐだファイナル本能寺	序章	1
ぐだぐだファイナル本能寺	その1	6
ぐだぐだファイナル本能寺	その2	10
ぐだぐだファイナル本能寺	その3	16
ぐだぐだファイナル本能寺	その4	21
ぐだぐだファイナル本能寺	その5	25
ぐだぐだファイナル本能寺	その6	30

番外編

番外編	あつたかもしれない世界	愛欲の獣編	35
番外編	甘過ぎて、暖か過ぎて		49
番外編	沖田さんの思い出話		57
番外編	カルデアゲーム大会!		65
番外編	あつたかもしれない世界	愛玩の獣編	76
番外編	獣の予兆		81
後日談	エリセのカルデア案内		88
特別編	沖田さんのマスター		93

プロローグ

「始まり」		102
-------	--	-----

特異点F 炎上汚染都市 冬木

第1話 「燃える街」		113
第2話 「霊脈地へ」		117
第3話 「英霊召喚」		121
第4話 「セイバー、沖田総司」		124

第5話「影のサーヴァント」

第6話「キャスター」

第7話「影の弓兵」

第8話「影アーチャー戦」

第9話「悪辣なる笑み」

第10話「帰還」

第11話「グランドオーダー」

特異点F終了後 幕間の物語

幕間「橘 真機という男」

幕間「設定」

第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン

第1話「第一の特異点」

第2話「百年戦争の地」

第3話「竜殺し」

第4話「オペラ座の怪人」

第5話「合流して、また分断」

第6話「黒ノ聖女」

第7話「聖女マルタ」

第8話「やつと再開」

第9話「vs 処刑人」

第10話「揃い踏み」

第11話「決戦前の夜」

第12話「オルレアン進撃」

第13話「黒ノ聖女」

第14話「決着」

129

134

137

142

147

153

157

163

170

176

180

185

189

194

198

203

207

210

216

220

224

228

232

第15話「泡沫の夢」

236

第16話「本当の終わり」

240

17話「オルレアン、終息」

245

第一特異点終了後 幕間の物語

幕間「縁」

250

幕間「ある日の図書室」

256

第二特異点 永続狂気帝国 セプテム

第1話「第二の特異点」

262

第2話「夢幻」

266

第3話「風薫る丘」

270

第4話「赤の少女」

274

第5話「vsカリギュラ」

278

第6話「すべての道はローマに通ず」

282

第7話「帝国連合」

286

第8話「首都ローマ防衛戦 東門」

290

第9話「シールダー」

297

第10話「ガリアへ」

300

第11話「2人のサーヴァント」

304

第12話「ガリア奪還作戦」

308

第13話「vsレオニダス」

313

第14話「帰還」

320

第15話「歌」

323

第16話「決戦へ」

328

第17話「ネロの覚悟、再びの悪辣」

332

第18話「魔神」

337

第19話「vs魔神フラウロス 1」	340
第20話「vs魔神フラウロス 2」	345
第21話「光穿つ閃光」	352
第22話「セプテム、終幕」	359
第二特異点終了後 幕間の物語	
幕間「橘 真機の悪い癖」	364
第三特異点 封鎖終局四海 オケアノス	
第1話「第三の特異点」	368
第2話「大海、海賊船の上で」	373

イベント ぐだぐだファイナル本能寺 序章

彷徨海で異聞帯を旅するのも一段落。

俺と沖田は茶室という元ボイラー室で

立香、マシユ、ノツブ……信長、李書文(老)、

沖田オルタ、土方と共に茶菓子を堪能していた。

沖田オルタが俺の腕に

抱きついているのはいつものこと。

話をしていると、

茶々が倉庫から見つけてきた

という箱形の何かを持ってくる。

「変な箱じゃなー、

ところでどうやって開けんじやコレ」

「さあな、壊してみればどうだ？」

まじんさんは変な箱、としか分からんし」

「いつまでマスターに抱きついてんですか！

いい加減にさっさと離れろ私オルタ!!」

沖田オルタと沖田の俺の腕を巡った小競り合いが始まるが、いつものことなので放置。

信長が銃口を箱へ向け、発砲。

しかし……………

「ノツブ、部屋で銃を撃つのやめようね!」

「そう言うな立香、しかし、

変じゃな、アニメとかだとこれで開くんじやが」

「どれ、ふむ……………」

李書文先生が箱を見る。

そして――

「――破ッ!!」

箱に拳を撃ち込む。

しかし、それでも箱は傷一つない。
ならば、刃はどうだろうか。

先生から箱を受けとる。

「ありがとうございます……………んー」

「どうじゃ? 開きそうか?」

「一応、撃ち込んでみるわ」

ナイフを抜き、魔術強化を施す。

そして更に霊器強化。

箱を宙に軽く投げ、

そして全力でナイフを撃ち込む。

ガギーン! という金属的な音が響く。

弾かれた――それと同時に、

魔法陣がほんの一瞬だけ見えた。魔術防護か?

「んんー、ますます分からんな」

「――ハッ!」

あまりの蛮行度バンデットにフリーズしてしまいました」

「みんなやりすぎでしょ……………」

「先輩の言う通りです!」

開けるにしてもやり方を考えて――」

マシユがそう言いかけた瞬間。
箱が凄まじい輝きを放つ。

「何じゃこりや!？」

「ぐだぐだしてくる予感……!？」

立香がボケを発動させているが
同じような感覚がしていた。

「ぐだぐだの予感がする——!？」

「言ってる場合ですか!？」

というより、爆発とかしなないですよねコレ!？」

「茶々知ってる。これアニメとかで

よくある爆発オチってやつでしょ?？」

「うはははは!わしらの彷徨海生活、完!？」

「で、たくあんは入ってたのか?？」

「ダメだこの人どうにかしてる暇もない!？」

「先輩、急いでこちらに!？」

「マスターは私が守る——!？」

沖田オルタが俺の前に立ち塞がるが、

光は輝きをどんどん増していき——

「ぎゃ—————!!?」

「のぶああああああ!!?」

「く……………!？」

光に、全員が吞まれて——消えた。

夢を、見る。

悪夢………ではないようだ、が。

これは――

「無念なり。

だがこの巡り合わせに感謝しよう。

――若く、猛く、そして、強き者」

この声は――

重厚感すら感じる重々しい声。

それは、何かを嬉しがっているようで。

――俺に、呼び掛けたのか。

「如何にも。彼奴が現れたならば、

我もその反動としてこの現し世に現れようぞ」

――彼奴？

「上杉 謙信――いや、長尾 景虎。

我が生涯最大の好敵手にして、

我が死を惜しむ原因となった者よ」

長尾 景虎――!?

だとしたら、この声の主は、まさか!?

「我と契約をせよ………

いや、契約を、してくれないか」

——あんたの、望みを聞かせてくれ。

「我が望み、

それは頂上にて行う彼奴との一騎討ちよ」

——頂上………天下統一をしてから、か？

「如何にも。

この世界のみ、我と融合して頂きたい」

おそらく、特異点へ送られたのか。

なんちゆう箱だよありやあ。

しかし、融合、天下統一からの一騎討ち、か。

俺、死ぬのでは？

「安心するがいい、頂上に至ることが

出来ればそれで良い。家臣として、でもな。

頂上に至った時、融合を解除しよう」

——分かった。受諾する。

「は、はははは！

融合している間は我は死ぬようにしよう。

それまで、勝ち続けること、頼んだぞ」

——任せてくれ。

声が、遠くなり、夢の中での意識が薄れる。

天下統一、か。面白い。

やってやろう。

戦国を、俺の手中に納めるために。

ぐだぐだファイナル本能寺 その1

そして目が覚めるとそこは。

「……………どっかの木造建築の天井、ってか」

知らん天井。

夢から覚めたら常識化してきたこれである。

「おはよう、マスター」

「なんで沖田オルタなのか気になる。」

マスター契約俺じゃなくて立香だよな?」

「今はちゃんとした契約としてやっているぞ。」

やはりイベントは素晴らしいな、マスター」

メタイからやめようね魔神さん。

起き上がろうとすると、

妙に身体感覚が違うことに気づく。

うん、待って?」

「目が覚めたらサーヴァントになってた件」

疑似サーヴァント……………ああ、夢のあいつか。

赤い鎧兜を身に付けている状態で

寝かせられていたようだ。

脱がせよ。

「脱がして良かったのか?」

「やっぱ止めてくれ。」

貞操の危機を感じる」

沖田オルタが手をわきわきさせているのが
ひどく恐ろしく感じる。本気だろお前。
すると、奥の襖が開き、人が出てくる。

出てきたのは、6人。大人3人、童女3人。

「目覚めたか」

「何とかな、助けてくれたのか？」

「そうだ。助けたのはアイリの方だが」

「元気になったかしら？」

話かけてきたのは大人組。

うん、見覚えしかないよな。

「何をしてるんだエミヤ家揃って」

「エミヤ家ではなくここでは真田家だ。

そして私は衛み……真田エミ村」

「僕は真田エミ幸だ」

「私はエミ幸の妻のアイリの方。

よろしくお願いするわ。

そしてこちらが長女の……」

「真田イリ之……って私長女だったの!？」

「私が猿飛クロ助で」

「私が霧隠ミユ蔵よ」

もうわけワカメなのだが。

つーか代行者^{エミヤ}、本名言おうとしたら今。

………まあいい、時代とか云々は置いておこう。

どうぞせぐだぐだ世界だろうし。

「そして私が忍衆の統率、千代にござりまする」

「うおっ!？」

突然天井裏から参上したパライソに驚いてしまう。
……………あー、そう言えば戦国だもんな。うん。
歩き巫女、という忍がいたと聞いたことがある。
っーかパライソそのままじゃねえか!?
すげえな何か!運命!?

「その甲冑……………やはり、武田か」

「……………えーと、エミヤ？」

状況とかの説明を簡潔に頼んでいいか？」

「任せ……………私はエミ村だ。間違えるな。」

こほん……………取り敢えず了解した」

おかしなマスクをつけたエミ村に説明を聞く。

やはりここは戦国の世。

そしてこの地は飛驒。

やはり戦国の世で、周囲の武將は、

「甲斐のうつけ、織田吉法師。

帝都を築いた、カイザー・ノブナガ。

海道の歌取り、水着信長。

そして尾張の、本物信長、だ」

「へえ……………って!!」

信長しかいねえじゃねえかアアア!!!」

全部ノツブじゃねえかよ!!

本物のノツブしかいねえよ!!

っーか武田家俺だけじゃねえかアアア!!!

はあ、はあ、ヤバイ。

ぐだぐだ世界について行つてはダメだ。

考えるんじゃない、感じるんだ。

「更に越後には謎のちびノブ一揆衆、

その頭、ビッグノツブ!!」

「結局ノツブじゃねえかよ!!!」

簡潔に言うのと、信長ばっかで真田家がヤバイ。
だから武田家にすがりに来た、と。

「私が人質として戦場に赴こう。

そして衛み……真田家を匿ってほしい」

「……………わかんねえけど分かった。

真田家の未来を預けられるなら守り通す」

「では私が家老、魔神沖田ということにするか」

「沖田いねえしそれでいいよもう。

取り敢えずどこかへ攻める、軍備の強化だ」

そうして俺は、武田家の將軍、

武田信玄、もとい、武田真機家を名乗ることに。

さて、この意味の分からん乱世を統一しよう。

早くカルデアに帰りたい（本音）。

ぐだぐだファイナル本能寺 その2

取り敢えず俺たちは、軍備の強化をすることに。
まずは兵士たちだ。結構な数がいるが……

まずは仕事場からだな。

ここはブラックではなく、ホワイトな軍にする。
武田家、真田家合わせてかなりの貯蓄があるし。
まずは給料制に。

それは戦場で果てる可能性もあるため
家族側へ戦前に先払い。

そして戦場での働きによって変動あり。

戦地での食糧もある。

戦地での食事も三食完備にする。

だが裏切りも避けたい。

敵対勢力への投降は軍兵から殺害対象へ変更。
命乞いは禁ずる。降伏も同義、と。

軍の心構え、風潮としてはこんなものか。

これをパライソ……もとい、千代に頼んで
忍に軍の兵士たちへ配らせる。

そして次は……そうさな。

軍の武器、兵器か。

話に聞くとところによると、カイザー・ノブナガ軍は
かなりの技術力があるという。

ならばその軍との取引だが、油断はいけない。
こちらからは食糧などを補給させ、
そちらからは武器、兵器を交換してもらう。
だが、味方ではなく
窮地に陥った時の両家の参戦は無しとする。

見合った徴収も既に真田家がやってくれていた。
すごい有能。助かります真田一家。

そう言えば、真田エミ村の父、

(この世界では) エミ幸か。

彼は武田信玄の弟子だったな。

交渉には千代の忍者に行ってもらおう。
こちらにも有能すぎる。ありがたい。

そして、後の問題は………ちびノブ、か。
彼らに協力を求められないだろうか。
………求める意義? うーん………なんとなく。
いや、戦力は多い方がいいし。場所近いし。

「では直接行ってみるのはどうだろうか」

「………そうだな。確かにそれが良さそうだ」

「少数がいいだろう。」

「そちらの方が警戒も緩む」

「ふむ………なら、沖田オルタ、千代。」

「俺と共にちびノブ一揆衆の所へ行くぞ」

「分かった」「承知、でござる」

エミヤには地域の守護を任せたい。

「構わないが……………」

真田家が乗っ取る可能性もあるのだぞ」

「それはない」

「……………なぜ、断言できる？」

「う、それを言われるとだが……………」

「そうだな。はっきり言うと、信頼してるからな」

「……………承知した。」

留守は真田に任せてくれ」

「ああ、ありがとう」

何となく、だ。

カルデアに呼ばれる前に、一度彼と共闘した。

だから、だと思う。彼は……………彼らは信頼に値する。

そうして俺たちはちびノブ一揆衆の元へ向かう。

沖田オルタ、千代の2人と共に

ちびノブ一揆衆と会うために歩く。

「ふむ……………お館様」

「ああ、どうしたんだろうなこりゃ」

村を渡り歩いているが、どこも結構な貧しさ。

そんなに徴収をキツくしただろうか？

「む。マスター、あれではないか？」
「うん？」

沖田オルタの指差す方を見ると、
白装束の、僧兵………だろうか。
里の老人から米俵を受け取っている巨大な僧兵。
だが、あれはかなりの量だ。
老人もかなり痩せている。
まさかあれが………？

「ノツブー！」
「「えっ」「」

俺たちの横から………ちびノブと
呼ばれる謎のゆるキャラ的な奴らが飛び出し、
僧兵たちへ攻撃を始める。

「ぐあ!?!この邪悪そうな生き物はまた………!」
「………あの、お館様、なんですかあれ」
「ちびノブだ。詳しいことはよく分からん」

千代が困惑している。
すると僧兵たちがちびノブに刺激されたのか
周囲の者たち見境なく攻撃を始める。
これは不味いのでは………ん？

「うおおおおお!!」
「はっ」
「あ、土方さんだなアレは」

雄叫びを上げて僧兵を蹴散らし始めた土方。

事態についていけない。

……………まあここ、加賀だし

たくあん貰ったとかそんなんだろうな。

「千代、沖田、里の人たちの避難を頼む。

必要だと感じたら僧兵を倒せ」

「承知！」

腰の刀を抜いて二人へ指示。

土方の元へと僧兵を斬り捨ててゆく。

試しに少し魔力を込めると、

刃から炎が出て広範囲を薙ぎ払うことが出来た。

サーヴァントってすげえな。

「ん、沖田の許嫁か！」

「やめてくれないか、それ」

俺を呼ぶときに許嫁とか言うのやめてほしい。

恥ずかしいんだが。

「ノ、ノブブ!？」

「あ？おい許嫁、お前味方だよな？」

「そう認識してくれるとありがたい」

「安心しやがれ、コイツは味方だ」

バーサーカーだが、彼はかなり話が分かる人物だ。

あとは沖田の許嫁って呼び方をどうにか。

公衆の面前で迷いなく言うせいで恥ずかしい。

「取り敢えずコイツらをぶった斬るぞ。

たくあんを貰った礼もあるんでな」

「分かった、協力させてくれ」

ぐだぐだファイナル本能寺 その3

「っし、こんなもんか」

土方が最後の僧兵を薙ぎ倒し、そう言う。

どうやら沖田オルタたちも終わったようだ。

だが……………結構な数がいたな。

ちよつと予想外。

俺が殺したのだけで……………28人、か。

「助かったぜ許嫁」

「話聞いてくれないなあ」

「っつか、何だお前。」

その鎧兜といい、おかしな力使ってやがったな」

「武田信玄の疑似サーヴァントだってよ。」

目的は天下統一からの上杉謙信との決戦だ」

話していると、沖田オルタと千代が戻ってくる。

避難を終えた里の人々も出てきたようだ。

「ほお……………ん？」

黒い沖田はいるのか、あと1人は誰だ？」

「千代、と申します」

「土方、なんだコイツらは。」

倒すのめんどくさかったぞ」

「知るか。あ？」

「ノツブブー！」

「うおー！」

ノツブが飛び付いてくる。

ノブノブ言ってるだけなので何を言ってるのか。

「おい、取り敢えず付いてこい。」

お前たちを城に案内したいとよ」

「分かるのか？」

「なんとなくな」

いやもうホントによく分からんが、

土方、ちびノブ達について行くことになる。

「ノツブア、ノツブノツブブー！」

「……………あー、成る程。」

俺たちの傘下に入ってくれるのか」

「ノツブー!!」

デカイノツブが地図を指し、

加賀と飛騨を囲うようにぐるぐる回す。

まあ傘下に入ってくれるという事だろう。

ちびノブは勝手に増えるし兵としても

使えないこともないので歓迎だ。

「で、土方はどうするんだ」

「俺もお前らと行くぞ。1つ言っておくが、
戦国だろうが何だろうが俺は新撰組だ。」

沖田の許嫁、そこんどこ、忘れんじやねえぞ」
「……………分かったよ」

呼び方変えてくれないなあ……………もういいか。
視界の端では千代がちびノブを持ち上げて
目をキラキラさせている。可愛いな。

「ああお館様、この者たち、

我が忍衆の諜報に採用したく存じます」

「え、使えんの？」

「ええ、聞き出した中でも有力な

情報もあり、どうやら諜報など得意なようです」

「聞き出した!？」

「あ、いえ、聞き出したというより

この紙に書いてもらったでござる。

有力な情報というのも、どうぞご覧に」

千代から何枚か紙を受け取る。

確かに、機密になるような情報がチラホラある。

……………うん？

紙の1つを見る。

そこに書かれていた内容は。

『越後の織田ノツブ家が崩壊、

新しい謎の勢力、カルデア家が勃興』

「か、カルデア家……………?」

……………あー、なるほど。

立香とマシユか……………多分カルデアの

ノツブと再会できたとかそんな感じだろうな。

「マスター、カルデアの奴らだな？」

「これは再会し手を取り合うべきじゃないか？」

「そうだな……いや、ダメだ」

「む？」

「目的は天下統一だ。立香たちとはいえ、

俺も信玄との約束を守らないといけない。

残念だが今回はアイツらは敵だな」

紙を見直す。

「どうやら強力な奴らも記載されているようだ。

將軍は……まあ立香だよな。」

「家老マシユ、織田ノツブ。は分かる。」

「……白装束の槍使い、ランサー森長 可？」

「誰だろうか……最後の2人は知らん。」

「森長 可……生前の信長公の家臣です。」

「どうやらカイザー・ノツブ軍の襲撃を

カルデア家が救ったようでごさる」

「千代、助かる。」

「この白装束の槍使いについては分かるか？」

「……すみませぬ、候補は幾人かいますが、

如何せんその候補が多すぎるでござる……」

「いや、仕方ないさ。」

「だが気になるな……」

「まあいい、どうせ後で会うことになるし、

その内にちびノブ忍衆が調べてくれるだろう。」

「ノツブ、ノブノブ」

「うん？」

「おう、ちよつといいかい？」

「あれ、兄貴じゃん」

ノツブの知らせと共に入ってきたのは
クー・フリーリン（槍）の兄貴だ。

「おっと、俺は確かに兄貴だ。

だが今は槍の又佐こと前田セタンタだ。

またなぜか幼名だが、

そこんとこよろしく頼むぜ、坊主」

「では前田セタンタ殿、

お館様に何の用でござるか？」

「いやあな、オレも召喚されてから

山で猪狩って飯食ってたんだがよ。

それにも飽きてな、そしたら三食付きの

戦働きが出来たって話じゃねえか、ってな」

「つまり……仲間になってくれるのか？」

「おうよ。つー訳でよろしく頼むわ」

なんだか仲間がどっと増えた。

順調、順調。

さて、軍備も揃う頃だろう。

うって出るべきだな。

ぐだぐだファイナル本能寺 その4

「くっ…………まさか姉上以外の者に破れるなんて」
「お前本当にブレねえよな」

軍を率い、本物信長軍を攻め落とした俺は
信勝と話をしていた。

本物信長だが……………参考書とかに
乗っている絵そのままだった。

そう、そのままだった。絵だった。

信勝が後ろから本物信長を刺して謀反してたが、
コイツ軍を指揮する能力はそこまでなかったし。
後は信勝が油断したところを

千代に捕縛、ほとんど戦をせずに勝利した。
卑怯とは言うまいな。

「アレにはちつとビビったな」

「当たり前です、

僕の姉上が男なわけないでしょう」

「俺たちの歴史では男って伝わってるんだよな。

……………もう当たり前になってきてて分からん」

一体何が真実なのか。

……………なんかやだなあ、信長がノツブだとか。

取り敢えず信勝を縛って敵軍を降伏させ、

尾張の国を勝ち取る。

「あれ、これ僕ってどうなるんです?」

「処遇を決めるのはマスターだぞ」

「ああそうか、どうするか」

そうだな、カイザー・ノツブとの交渉、
もしくは他の国への人質に……………いや待て

「コイツ人質にして交渉とか無理じゃね？」

「全員がいらん、とか言いそうだな」

「無理だろ」

「あ、僕は姉上がいる所ならどこでも」

「ちよつと黙ってようか」

……………取り敢えず牢にぶち込むか？

まあいいか、取り敢えず飛騨に戻って考えよう。
そんなわけで、俺たちは飛騨に戻るのだった。

結局、信勝は牢に入れておくことに。
本物信長のように刺されるのも嫌だからな。
ちなみにどこかのノツブが軍に
入って出してほしいなら出すということに。
と、天井から千代が現れる。
びつくりするからやめような千代。

「千代、戻ったでござる」

「お疲れ様、今回はありがとうな」

「いえ、戦をせずに」

勝利できたこと、嬉しく存じます」

今回の戦、彼女のお陰と言っても過言ではない。
というか戦ですらなかったからな。

「そして新たな情報を掴むことに成功しました」

「新たな情報……カルデア軍の動きか？」

「ちびノブ衆の調査の結果、

カルデア軍もこちらに気づいております。

そしてカイザー・ノブナガ軍へ仕掛け、

どうやら勝利した、とのことですよ」

「なるほど……取引相手が潰れたか」

半ば諦めていたのかもな。

取引の決め事通り、こちらに

救援を求めることもなかったか。

「まあいいか、武器兵器の類は手に入った」

「これは推測でござるが、よろしいでしょうか」

「ん？」

「カルデア軍へカイザー・ノブナガ軍は降伏、

帝都はカルデア家に落ちました。

つまり次の攻めると思われる場所は……」

「………確かに。帝都からは距離も近い。

くく、これは利用すべきか」

「どうなさるのですか？」

次は、信長吉法師がカルデア家に狙われる。
ならば、これを利用するべきだ。

「そうだな、はっきり言うか」

信長吉法師にそれほど大きな軍はない。
必ず落とされるだろう。

「信長吉法師へ救援に行く。
軍を動かし、カルデア軍を奇襲するぞ」

ぐだぐだファイナル本能寺 その5

軍を土方に任せて、
俺は単身、山を馬で駆ける。
すると沖田オルタが後ろから馬で追い付いてきた。

「マスター、千代女からの情報だ。

どうやら甲斐には李書文もいるらしい」

「マジで？助けたら手伝ってくれそうだな。

こりやあカルデアに一手をかけられそうだ」

「ああ、というか沖田総司はどこへ

行ったんだろうな。流石の魔神さんも不安だぞ」

いつもなら速攻で走ってききそうなもんだが。

確かに不安である。

……まさかカルデア家にいるわけじゃないよな？
裏切られてないよな？

「やべ、不安になってきた……」

「まあ安心しろマスター、

その時は魔神さんが傍にいてやろう」

「頼む……精神が崩壊しそうだ」

あの時はともかく、

沖田はできるだけ敵に回したくない。

本音を言えば立香たちもだが、

シユミレーションだと思えば大丈夫。

まあ立香たちを捕らえはしても

牢に入れたりもしないし。

倒せたら、の話だが。

「さて、もう少しか」

「カルデア家は挟み撃ちを決行したようだ。

おそらく第六天魔王の策だろう」

「なら背後を突くぞ。」

どうせ雑兵だ。沖田オルタ、暴れるぞ」

「分かった、行こうマスター」

馬に乗ったまま剣を抜き、名乗りを上げる。
戦国なので流石に名乗りは上げないとな。

「我、武田信玄公の写し身、武田真機なり！」

「その家臣、我が名は魔神・沖田総司なり！」

俺たちの声に目の前の

カルデア軍が驚愕の声を上げる。

沖田オルタと目を合わせ、叫ぶ。

「さあ……道を開けろ!!」

刀に炎を纏わせ薙ぎ払い、雑兵を蹴散らす。
少々乱暴だが、このまま前線まで突破する。

〈カルデア家 said〉

「何事じゃ、なぜ伏兵が動かん!？」

「伏兵!？」

「法螺貝を鳴らす筈じゃったろうが！」

あ、そつかお主らには伝えとらんかった!」

「あの女に任せてたんじゃねえのか大殿!？」

不味い、このままでは……………

逃げた筈の兵たちが戻ってきて応戦してるけど、

織田吉法師の勢いが止まらない。

「進めええええ!!！」

「くっ、先輩^{との}ここは撤退して——!？」

その時だった。

ノツブが言つてた伏兵がいる筈の崖から
炎の柱が立ち昇る。

そして、崖から兵たちが次々と落下し、
そこから馬に乗った2人が現れる。

「フハハハハハ!!」

織田吉法師よ、武田軍、加勢するぞ!!」

「ノリノリだなマスター……………」

見覚えのある大太刀の女性、

そして——深紅の鎧兜を纏った人物。

「真機先輩!？」

「魔神さん!？」

「何やっとなるんじゃアイツらああ!？」

高々に宣言する。

テンションが最高潮で熱が引かない。

その時、カルデア家の軍の中から名乗りが上がる。

その声に、身体中の血が

沸き立つような感覚を覚えた。

「我が名、長尾影虎あ!!」

いざ尋常に、勝負!!にやー!!」

沸き立つ感覚を抑え、刀を握る手に力を込める。

「沖田オルタ、先に行け。」

ヤツとは一騎討ちする」

「む、了解した」

槍を手に走り寄ってくる白装束の女。

馬から飛び降り、全力で迎え撃つ。

振り下ろされる槍を刀で鏝迫り合いに持ち込む。

「にやー!!顔は違いますね!!」

ですがその力、信玄公そのもの!!」

「同じく見覚えはねえが、

この感覚、我が好敵手と見た!!」

押し返し、距離を開く。
影虎が槍を天に突き上げる。
俺は刀を地面に突き立てる。

「運は天にあり！」

鎧は胸にあり！

手柄は足にあり！

—— 毘沙門天、我に力を!!」

「疾ときこと風の如く！」

徐しずかなること林の如く！

侵しんりやく掠すること火の如く！

動かざること山の如し！

—— 風林、火山!!」

血沸き肉踊る戦。

好敵手は上杉謙信もとい、長尾 影虎。

沸き上がるのは殺意ではなく、戦意。

殺す為でなく、戦う為に刀を構えた。

ぐだぐだファイナル本能寺 その6

「にゃー!!」

猫のような叫び声を上げながら、
影虎が刀と槍を交差して飛びかかってくる。

「ぬぁあっ!!」

刀を交差された槍と刀の中心にぶつけ、
打ち上げて体勢を崩す。

「む!?!」

「そうらあッ!!」

影虎の裾を掴み、
背負い投げの要領で地面に叩きつける。
が、2つの得物を地面に突き立てて防がれる。
後ろへ跳び、距離を取った瞬間。

「く……………!?!」

「あははははは!!」

凄まじい、それこそ猫のような俊敏さで
こちらの息のかかるような位置まで接近される。
その目は、酷く濁っていて。
だが、こちらの戦意をも高める。

「そうだ、その目だ……………影虎アアア!!」

「あはははははは!!」

吠え、刀を打ち合わせる。

火花が散り、崖上の森が燃え始める。

このままでは焼け死ぬだろう。

だが、そんなことは既に意識にはなく。

「はははははは!!」

「あははははは!!」

虎と竜は笑う。

く崖下の山道く

「やっべ!? 影虎の奴、

このままだと死ぬまでやる気じゃぞアレ!」

「戦どころではありません!

先輩、急いで撤退しましょう!」

「あつ、うん。わかった!

みんな、急いで撤退して!」

立香が指示を飛ばす。

前線で戦っていた森長 可と李書文が手を緩め、
やって来た沖田オルタが二人を大太刀で制する。

「ああ!? 邪魔すんじやねえよ!」

「聞こえなかったのかお前、」

お前たちの殿様から撤退しろって言われたろ。

あ、あんたはこつちに来てほしい」

「む……………仕方あるまい、さらばだ」

「あつてメエ逃げんじやねえ!! ぶっ殺すぞ!!」

織田吉法師の所では、千代女が案内をしていた。

「こちらでござる」

「なあ、助けてくれんのは嬉しいがよ」

「む?」

「俺たちを助けるメリットがお前たちにあるか?」

その言葉に千代女は少し迷い……………答える。

「お館様は敵将の確認と新しい客将を招くためと。

大規模な戦は望んでおらぬようだったでござる。

お館様の意思は拙者も分かりかねんでござるが」

「そうか……………まあ助かるならそれで良いか!」

「良いのでござるか……………」

傷だらけの虎と竜は息をつく。

「チツ、不味いな……………」

「ちよつと熱が入りましたね、これは熱い」

「そりや燃えてるからな」

どうにか戦いを切り上げ、

そしてやつと周囲の惨状に気づく。

多分撤退命令は出ただろう、多分。

出てるといいなー。

「困りましたねえ、どうします信玄？」

「あー……………どうするかねえ……………」

「私、結構満足したのでここで

2人で死ぬのもアリかなー、と」

「やめろ、そういうこと言うの」

つーか、ぐだぐだ世界で

死ぬとか恥ずかしくて死ねん。

何が悲しくてこんな世界で死なねばならんだ。

「さっさと脱出するぞ」

「疲れて立てません。おんぶー」

「子供か」

「と言いつつ背負ってくれるんですね」

うつせ、と言ひ影虎を背負う。
………戦闘中にも思ったが
コイツどんだけ武器持ってたんだ、重つ。

「鎧が硬くて痛いです」

「注文が多いわ!?!我慢しろよ!?!」

めんどくさつ。

めんどくさつ、影虎。

そんなことを思いながら、

燃える森を虎と竜は彷徨うのだった。

番外編

番外編 あったかもしれない世界 愛欲の獣編

ネタバレ注意！

もし、召喚されたサーヴァントが違ったなら。
有り得たかもしれない、この物語。
これはその、更に有り得たかもしれない物語だ。

「素に銀と鉄。
礎に石と契約の大公。」

憂いなど不要なり。義もまた然り。
我に情は無し。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、
王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ、閉じよ、
閉じよ、閉じよ、
閉じよ、閉じよ、
閉じよ、閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる時を破却する。

—— 告げる。

汝の身は我が元に。

我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、
この理に従うなら答えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者。

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

召喚サークルに眩しい光が溢れ、

そして光の中から、それは現れた。
白と黒の尼僧服。
艶やかな微笑みを浮かべて。

「アルターエゴ、殺生院キアラ。

召喚に応じ、参上いたしました。

ふふ、私を呼ぶとは……………これはもう、地獄の
底までお付き合ひして頂くしかありませんね？」

ゾツとするほどの、ナニカを感じた。

あるえ？台本と違うぞ……………？

キアラ

(どうやら、私の正体を明かすのは

未だ早すぎるようですね……………ふふ、

ここで私がこの方々を溺れさせれば……………)

こうして、俺はキアラ、
立香たちと共に人理修復へと挑む。

影のアーチャー 戦後

「馬鹿な……!!?」

まさか、まさかこの力は……!?

「ふふふ、ソワカソワカ……」

「はあっ、はあっ……!!?」

「大丈夫でしょうか、マスター？」

「ご安心下さい。私、戦闘には自信が有りました」

黒ノ聖女 戦後

「く……!!」

「お前の生きた意味が、あつたんだよ。

この特異点で。だから……さよならだ」

「……………」

「そう……そうなのね。

良かった——」

「……………どうしたんだ、キアラ？」

「いえ、何でもありませんよ」

神の鞭 戦後

「見事なり、アルテラ……………」

「いつかまた、違うカタチで戦うこともあろう」

「ふふ……………」

「……………同じ、か……………尼よ」

「同じ……………?どういうことだ?」

「マスターと同意見です、一体……………」

「いつか、お前にも……………」

「分か理解する時が来るだろう……………」

「その者と、共に歩けば……………」

「……………そうですか、

それはそれは……………楽しみです」

裏切りの魔女 戦後

「……………星を集めなさい、あなた方」

「え?」

「負けぬ、何者にも負けることのない星を。」

「そうすれば、もしかしたら……………あなたも」

「……………ふふ、そうですか。」

「……………それはきつと、有り得ませんわね」

「……………」

魔術の祖、魔術王 戦後

「……………！」

「……………ふん、つくづく馬鹿な女よ。」

己の歪みの歪みに気づかぬとは、な」

「アンデルセン……………!?!お前は……………！」

「何故……………！」

「何故、とそう問うか？」

知るか、自分で見つけるものだ。

それは、その感情に名前をつけるならば、

自分で付けられるくらいになっておけ、馬鹿が」

「キアラ……………？」

「しかし、お前のようなのが……………」

つくづく、分からんものだな。小僧、任せたぞ」

「……………あ、ああ」

「じゃあな、どうやらメ切のようだ——」

「……………はあ、鬱陶しい男ですね……………っ……………」

“軍魔”の魔神柱 戦後

「ミス・キアラ、最後にお話が」

「ええ、何でしょう？」

「私は身体の傷は治せても、

精神……………心の傷までは癒せません」

「……………はあ」

「あなたの傷は、深く、心を抉っている。」

ですが……心の傷というモノは
治し難く、そして、最も治しやすい」
「……それが、一体なんだと——」
「共に歩く者を信じなさい。
そして、本当の本当に、
貴方が求めるモノを、見つけなさい」
「、——」

聖槍の獅子王 戦

「ふ……まさか、人理の獣がな……」
「獅子王、何を……」
「マスター、近づいてはなりません」
「ふっ……星を集めよ、カルデア。」
「どのような悪性にも負けぬ、星を」
「星を……悪性つてのは」
「人類の原罪だ。」
「だが……もしもだが、な」
「……」
「罪は、認め、許されることもある、か——」

原初の獣 戦後

「……………マスター。」

一つ、聞いてもよろしいですか？」

「ん？どうしたんだ？」

「……………あなたは、多くの旅をして……………」

どんなものを、得られましたか？」

「ん……………、そうだな。」

キアラへの、信頼が一番大きいと思う」

「……………詳しく聞かせて下さいませ」

「恥ずかしいな……………、……………」

——最初、俺は君を信用できなかつたんだ」

「……………」

「だけど、旅を通して……………」

命の意味を知って……………」

そして、君という存在を知った」

「……………」

「時々、少し抜けてて。」

時々、凜々しくて。

時々、美しくて」

「……………」

「多分、俺はこの感情を初めて感じてる」

「……………」

「ありがとう、キアラ。」

君に出会えて、本当に良かった」

「……………ええ、そうですね」

第二の獣、魔神王 最終戦

倒れ伏す、カルデア。

ドクター……………ソロモンの介入、虚しく。

「く、そ……………こんな、ところで……………!!」

「負ける、わけにはいかないのに……………!!」

「ドクター……………私に、立つ、力を……………!!」

「……………諦めてはいけませんよ、マスター」

ただ、一人。

立ち上がる、女^獣が、いた。

「何度立とうと無駄だ。私は……………!!!」

「キアラ……………!?!」

「キアラさん……………その、姿は……………!?!」

「馬鹿な……………!?!」

そんな、そんなことが、あつていい筈が……………!!」

邪悪、醜悪。

「……………ああ、何ということでしょうか。

心と欲望のまま、差し出したつもりが。

ふふ、確かに、分からないものですね」

「第三の、ビーストだと……………!?!」

「キアラが……………!?!」

満たされぬ、筈だった私は――

「ええ、ええ、満たされない。

私は、満たされなかった――なのに」

いつか、いつの間にか。

「満たされて、いたのですね」

自信に溢れる顔の獣は。

その腕を魔神の王へと向ける。

白の腕が、魔神王を掴み。

そして、膨大な魔力が渦巻く。

「これは――!?!」

「まさか貴様――自爆する気か!!?!」

魔神の王は意味が理解出来ず、

腕を振りほどこうとするが、出来ない。

「私は、知らなかった。

本来なら、知ることはないのでしょうか」

宝具。

「ですが私は……………*恋*を、知りました。

私の知る筈もなかった、*愛*を、知りました」

開帳。

「あなたのお陰です、マスター」

獣は、否、女は、振り向く。

その目には、親愛と……ある筈のない、
愛しい人を見る、情愛があつた。

「あなたを知りました」

地面を構成する魔神柱の魔力すら吸い上げ、
時空を歪ませるほどの凄まじい魔力が収束する。

「どこか暖かい、違和感を知りました」

魔力は女の姿を変え、さらに拡大。

「恋を知りました」

獣は、獣だったものは。

「好きを………知りました」

その目に、涙を浮かべていた。

「やめろ………やめてくれ………!」

「いつか、言ってくれましたね」

魔力が、収束完了する。

女は、両の手を魔神へと向けた。

「私も——」

爆発する。

あなたに会えて——良かった

おめでとう、諸君。

この戦いで、

君たちは素晴らしいモノを見せてくれた。

君たちの手によって、3体の獣は倒された。

私は、本当に——美しいモノを見た。

刃を交えずとも倒せる悪はあり、
血を流さなかつたからこそ、
辿り着ける答えがあつた。

そして、あの獣もまた、愛を知つた。

これは、君への細やかなオクリモノ。

消えたモノを、取り戻したいだろうから。

獣ではなくなった彼女もまた、

君に会いたいだろうから。

おめでとう、カルデアの善き人々。

三体の獣は、君たちの手によつて救われた。

重なる言葉に、涙は止まらない。

愛を知らぬ獣は恋を知り。

命を知らぬ青年もまた、知った。

これは、愛と希望の物語。

愛を知らぬ獣に、色彩を与えた物語。

）
f
i
n
（

番外編 甘過ぎて、暖か過ぎて

「はい、これあげる」

部屋にやって来た立香から包み箱を渡される。
……………んん？

「ありがとう……なんだっけか？」

「えっ本気でそれ言ってる？」

ドクターでも分かったのに」

「誕生日は今日じゃないが？」

今日は2月の14日、だよな？」

全く、見当もつかないのだが。

今日は何かの記念日だったか……………？

「ええ……………バレンタインだよ？」

ていうか、女の子に言わせたらダメだよ？」

「ばれんたいん……………？」

ああ、チョコレートの日か！」

「なんか違うよ!?!」

チョコレートの日じゃないのか？

この日には毎年、

町行く人々が舞い上がっていたり

落ち込んでいたりしたものだっただけ。

店ではチョコレートの販売が常だったり、

どこにいようと甘い匂いがしたが。

「真機くん、バレンタインって知ってる？」

「いやだからチョコレートの日じゃないのか？」

「あつダメだ、マジだよこの人」

「ちよつとその目やめてくれないかな？」

その哀れむような目をやめて欲しい。

時々言われるが、俺、少し常識がズレてるらしい。

「バレンタインっていうのは——」

立香に説明を受ける。

なんでも、バレンタインは女性が意中の男性、

もしくは仕事の同僚、友達などに

チョコレートを渡す日だとか。

「へえー………知らなかった」

「ええ………学校で好きな子とか

………あ、真機くん学校行ってないのか」

「まあな。俺の学校は戦場だ」

「カッコいいけど酷いからねそれ」

ともかく、俺は立香と共にカルデアを回ることに。

くマシユ・キリエライトからく

部屋から出ると、廊下でマシユと会う。

「あつ、先輩方。丁度いいところに。」

今日はバレンタインということで、

チョコレートを用意しました、どうぞ！」

マシユからチョコレートの包みを受けとる。
立香も受け取った。

「ありがとう、マシユ。」

「ここで食べてみてもいい？」

「俺も是非食べてみたいな」

「ええ、頑張って作りましたので！」

というわけで、包みを開き、

中の箱に入っていたチョコレートを見る。

ホワイトチョコレート、か。

どうやら苺の果肉が混ぜられているようで、
少しピンクがかっている。

これは美味しそうだ。

「頂きます」「頂きまーす！」

指でつまみ、口へ放り込む。

……………チョコレートの甘さ、

苺の薄い酸味が丁度良く、楽に食べられる。

「どうぞ、お味はいかがですか？」

「とても美味しいよ。ありがとう、マシユ」

「うん！美味しいよー！」

「それは良かったです。食堂の方で

サーヴァントの皆さんがチョコレート

フォンデュをしているので、行ってみませんか？」

自由だな……………まあ取り敢えず楽しそうなので
行ってみることにした。

く沖田 総司からく

サーヴァントたちのチョコフォンデュ祭りに
参加した帰り、部屋へと戻るために
廊下を歩いていると。

「……………何やってるんだ？」

コソコソと部屋の近くをうろろしている沖田を
見つける。マジで何してんの？

取り敢えず、声をかける。

「……………おい」

「ひあああああ!?!」

「ど、どうしたんだ？」

悲鳴をあげて飛び退く沖田。

そんなに驚かせるつもりはなかったのだが。

よく見ると、手には包みが。

そう言えば、途中でフォンデュ祭り抜けてたな。

「えーっと、あの、その

……………チョコレートを持ってきたんです」

「ああ、そうか。ありがとう」

「……………ノツブに言われたんですが、マスターが

良いんでしたら……………一緒に食べませんか？」

「別に構わないよ、上がってってくれ」

ああ、部屋に鍵してたから入れなかったのか。

たまたま勝手に入り込むヤツがいるから。

部屋で待つてくれるつもりなら悪いことをした。

「で、ではどうぞ……………」

「ありがとう」

沖田から包みを受け取り、

包みを取って開けてみる。

シンプルなハート型のチョコレート……………

それが2つ並んでいる。

特に装飾のようなものはないが、

沖田に貰ったもの、ということだけで

十二分に嬉しいものだ。

「あまり装飾が分からなくてですね……………」

でもでも、きつと美味しいですよ……………多分」

「多分……………」

手作りなのが不味いわけがないだろう？」

沖田に片方のチョコレートを渡し、
もう片方のチョコレートを口へ放り込む。

「あっ」

「……………」

……………今回のバレンタインで、立香やマシユ、
それに他のサーヴァントたちからもチョコレートを
貰って食べたのだが……………
その、どれよりも美味しく感じて。

「……………マスター？」

その甘さが、頭を支配する。

——気づかずに、目頭が熱くなっていた。

「マスター!?!ど、どうしたんですか!?!」

「あ……………え?」

「不味かったんですか!?!」

「そんな筈は……………口に合わなかったですか!?!」

「え……………いや、あれだよ……………」

自分でも意味が分からなくて。

涙が溢れていた。

どうしようもなく甘くて。

どうしようもなく美味しくくて。

「……………泣くほど美味しい……………だけだから……………」

どうしようもなく、暖かいものに満たされた。

「悪い………美味しすぎた」

「びっくりしましたよ………」

急に泣き出すんですから」

「ははは………」

あれは一体なんだったのか。

とにかく、チョコレートは最後まで

美味しく頂いた。

「本当に美味しかったんですよ？」

「美味しかったぞ？泣くほど」

「なら良いんですけど………」

まあ、ともかく。

「ホワイトデー、つてのがあるんだろ？」

お返し、ちゃんと美味しいの準備しとくから」

「泣くほどですか？」

「泣くほど美味しいのをな」

笑い合う、幸せな日々の一ページ。

番外編 沖田さんの思い出話

たまにはガールズトークでもどうか、
と立香に誘われ、私、立香、マシユ、
そして何故かノツブの4人でお茶会を開くことに。
マスターはシュミレーションルームで
他のサーヴアクトたちと戦闘訓練らしいです。
まあ当然、女子のお茶会となれば確定して
その……………そういう話になるわけで。

「沖田さんは真機先輩が好きなんですよね？」
「うえっ!？」

まさかマシユにも言われるとは思っていなかった。
立香とノツブの二人はニヤニヤ顔で
こちらを見てくるのでイラつきと恥ずかしさが
混ざって顔を伏せてしまう。

「沖田あゝマシユにも分かるくらいではないかゝ」
「うっ、うっさい!」

立香、立香もでしょう!？」

「いや別に?」
「えっ!？」

「うーん、確かに好きなんだけど……………」

親友以上、恋人未満って感じかな、良い意味で」

良かった……………じゃなくて。
どうにか話を逸らさない……………

「沖田さんの初恋っていつ?」

「聞かれたくないことを」

容赦なく聞いてきますね!」

「うははははげほっ、うはははははははははは!!」

「ノツブ笑いすぎです! 斬りますよ!」

むせてまで笑いますか!?

ていうか、立香ってストレートですよね……………

「ははは……………ふう、ああ笑った笑った。」

二人とも聞けい、こやつ、初恋は生前だぞ」

「あ、そうだったんですか?」

「へー、知らなかったな。沖田さんに

ついては色々知ってるつもりだったけど」

「あまり知られておらぬからのお」

……………これはもう話す流れですかね。

まあ別に恥ずかしいことでもないんですが……………

なんというか……………

「沖田、話せ」

「あの、無理しなくても……………」

「えーでも気になるな」

「……………分かりましたよ。」

決して面白い話ではないと思いますが」

話し始める。

あれは生前のこと——

私が新撰組として、

人斬りの鬼として恐れられた頃。

知つての通り、
病弱だった私は病院へ行っていました。
まあ病院と言つても、今のように入りました
治療は受けられませんでした。

そこで出会った方に、私は恋をしたのです。

治療は受けられましたが、その頃には
私は人斬りとして知られていたので、
お医者様を含めた誰もが私に怯えています。
ですが1人だけ………
私に普通に接してくれた方がいたのです。

その方はお医者様の息子さんで………
と言つても、私と同じ年だったららしいですが。
床に伏せることになった私を、
怯えることなく熱心に看病してくれたんです。
恥ずかしい話なんです………

この時の私は寡黙で、
ほとんど喋ることもなかったんですよ。
その人と会う度に必死に言葉を交わして………
それから、冗談を言つて人と距離を
縮めるようになったんです。

この性格も、あの人のお陰ですね。
新撰組に戻った時は本物か疑われましたもん。

——ああ、結婚する気はなかったか、ですか。

多分……………あつたと思います。

まあでも、近藤さんに猛反対されて……………

私は新撰組でしたから、

局長の近藤さんに反対されたら色々

終わりみたいなものでしたから……………まあ、

諦めましたよ。きつぱりと。

こんな感じ、でしょうかね。私の初恋は。

「……………つーか何で酒飲んでるんですかノツブ」

「ぶはっ、いいじやろ、別に」

溜め息をはく。

話して損じた感じですね……………

「そうだったんですか……………」

「なんか聞いちやってごめんね」

「いいですよ、きつぱり諦めもつきましたし」

「泣いて親戚に愚痴ったとか言ってたじやろ」

「余計なこと言わなくていいんですよ……………!」

ノツブの頬を引っ張つる。

ともかく、と話を戻します。

「私の初恋はこんな感じですかね」

「それで今は？」

「マスターのことが……ってノツブウツ!!」

「ぞっこんじゃなあ、うっはっはっはっは!!」

「今度、近藤さんに言われたらどうする？」

真機くんと別れる、って」

「絶対に嫌です!!」

このあと、何とか落ち着きを取り戻すまで5分。

「何となく聞くけど、贈り物とかしたの？」

「あー………そう言えば」

首飾りをあげたような……あれ？」

首飾り………でも何だろう。違和感が………
どこかで、あれを見たような………

「首飾りはわしも初耳じゃな。

だが、首飾りと言えば………」

「えっと………え？」

「ま、まさか………」

「え………」

マスターに貫った指輪を反射的に見る。
この指輪………確か、マスターの首飾りから……

「あつ、あれ！」

立香が窓の外を指差し、
つられてそちらを向きます。

そこには、シユミレーシヨールムの帰りなのか
汗でびっしりになって歩くマスターの姿が。
その首には、確かにあの首飾りが。

「?!?!」

3人が絶句。

私は——本能的に、走り出していました。
部屋から飛び出す。

「マスター!!」

「ん……沖田か、ただいま」

「お帰りなさい、じゃなくて!!」

マスターのその首飾り、どこで!?!」

「これか? ああ、話してなかったな。

これ、ウチの家系に伝わっててな?

ウチの家系も俺だけだから持つてるんだ」

「………あ………」

マスターはさらりと話していて………
なんだか、持っているのが当たり前みたい。

「結構古いものらしいんだけど、

なんか肌身離したくないんだよな」

「……………」

「これがどうかしたか?」

「……………」いえ、何でもありませんよ?

何となく、気になったもので」

「そうか、部屋にいるから、

何かあったら呼んでくれ」

「はい」

……………マスターが、もし、そうだとしたら。

あの人は、誰か別の人を娶ったのだろう。

だけど……………これが残っているのなら。

捨てられていなかったのなら……………

そう考えて、崩れ落ちる。

「!?どうした、大丈夫か!」

—————なんて、嬉しい

あの首飾りが、また、繋いでくれたのか。

大好きな人と。会うべき人と。

だったなら――

マスターが、私を呼んだのも納得がいく。

凄まじく強力な、*“縁”*。

マスターの家系だけでなく、あの首飾りが
知らず知らずの内に触媒になっていた。

「おい、沖田！大丈夫か!？」

「……………はい、マスター」

涙がボロボロと零れて。

私は無意識の内に言葉を紡いだ。

「大好き、です――!」

この後、赤面して部屋で話を聞かれるのは別の話。

番外編 カルデアゲーム大会！

「ゲーム大会？」

「はい！」

首を傾げる俺と立香。

その目の前にこやかに笑うのは、胸に大きく
Basterとロゴの入ったダサイTシャツを着た
ゲーマー・インフェルノもとい、巴御前だ。

「この新カルデアにも人が増えてきましたし、
しかも異聞帯の方々までいらつしやいました。
そこで、色々な方々との親睦を深めるため、
ゲーム大会をしようと思いついたのです」

「相変わらずのゲーム脳だね巴さん」

「えへへ、それほどでも」

「多分それ褒めてないぞ」

ちなみに沖田と沖田オルタは出てマシユと共に
3時のおやつ
甘味処へ行っている。子供かな？

それにしても、ゲーム大会か。

実は、娯楽として遊んでいたゲームは好きだ。

実はPCで面白かったゲームをやっていた

記憶があるが……………なんだったつけ。

ノベルゲーだったか……………えーと…………

魔法の夜……………じゃなくて……………駄目だ、思い出せん。

「どんなゲームするの？RTA？」

「いえ、ここはトーナメントで一位を決めます」

「トーナメント？」

という()とは、まさか？

「そう、格ゲーです!!」

格ゲー。

それは、燃える戦いである。

「才能の無駄使いつてこういうことを言うんだな」
「あはは……………」

なんと、バベツジ、ニコラ・テスラ、

エジソン、エレナ、孔明先生、ダヴィンチなど
作製者としては素晴らしいサーヴァントたちが

(珍しく) 手を取り合って作成した格闘ゲーム。

なんとカルデア中のシュミレーションの

データを入力、カルデアのサーヴァント全員が
参加できるゲームらしい。

なんと彷徨海に入ってすぐに製作に取り掛かって
いたらしく、もうバグの1つも見られないとか。

そして現在参加し、

凄まじい戦いを繰り広げているのが。

「カルナアアアア!!」

「アルジュナアアア!!」

絶滅とは是、この一刺し。

神性領域拡大、空間固定。

それぞれのオリジナルロゴが入った

だっせえTシャツを着たインド兄弟である。

「全ては些事……………」

「な、なんですとおおお!？」

拙者が、拙者が負けたでござるか!？」

その横では、行くでござる!、プララヤ、

それぞれのロゴTシャツを着た

なんか凄い神と下品な海賊が

戦いを終えたところだった。

「これコントローラー壊れるだろ」

『安心しなよ、コントローラーなら』

専用パッド合わせて200台用意してあるんだ♪』

「あ、そうなんだ」

ちなみにこれ、準々決勝である。

俺は意外と強かった魔王ノツブに勝ったところ。

今は立香と二人で鑑賞中。

ちなみに、これを始めた件の彼女はインドの

施しの英雄に負けていた。すげえな施しの英雄。

ダヴィンチはアウンスをやっている。

立香、マシユは見守る側である。

負けた奴は見守る側へシフトする。

そんな戦いが、かれこれもう12時間である。

『さて、準々々決勝、

インド兄弟の戦いも大詰めだー!』

「うおおおお!!」

生中継が各サーヴァントの部屋でされており、マジで盛り上がっている。

まあ因縁の戦いをゲームで出来るってお前たちそれでいいの?とは思うが。準々々決勝なので、

その時点で残っているのは俺含めて16人。さつき哀れな黒髭が落ちたので15人か。

「なんか嫌な予感するんだよなあ……」

『おおっとこれは!?!』

「あっ」「ん?」

立香が呆然とし、ダヴィンチが驚愕。

インド兄弟のゲーム画面では………

「馬鹿、な………」「見事だ………」

drawの文字が表示されていた。

つまり、相討ち。

………なんかすげえなインドって。

で、俺の準々決勝の相手になるのは――

「ふはははは!!まさか真機、

貴様が勝ち上がったってくるとはな!!」

「何してんすか王様」

「たわけえ!!」

周回で弾にされる気持ちが貴様に分かるか!?

これは休暇を利用した我の粋オレな計らいだ!!」

「なんか色々ごめん王様」

『そして、命の価値に区別なく!』

……………なんか幻聴が聞こえた気がする。

疲れてるのかな、俺。

相手はキャスターの英雄王。

そう言えばさつきフアラオ太陽王と激闘繰り広げてた。

他のところは

神ジュナvsセイバー両儀式、

柳生さんvs沖田、

アラファイフvsホームズとなっている。

色々おかしい気がするのは俺だけなの？

つかセイバー組多くない？

沖田さん勝ち残ってるの？

柳生さんと式は何やってんの？

ハメ技多用する紳士と探偵はズルくね？

「突っ込みが追いつかない」
「見て見ぬフリだ、たわけ」

流石は賢王、常識（？）人。

『おおっと、決着がついたぞー!』

「ほう……………」

「ふふっ、流石は神様、お上手だったわ」

「…………ふっ、中々楽しめた。」

「これにて、終いとするか……………」

「沖田さん大勝利ー!」

「な、なんとか勝ちましたー!!」

「おや? どうやら手が滑ったようだ」

「のおおお!?」

「自爆って、自爆ってなんだホームズ!」

「それ絶対におかしいよネ!」

「ふははは……………勝ちを譲ってやる、我は寝る!」
「お疲れ様です王様」

結果はこんな感じ。

うん、なんかおかしいよねやっぱり。

勝ち残ったのは、俺、剣式、沖田。
形式上は俺が式と戦うことになって
沖田はシードになるわけだが。

「つーか何やってんのさ……………」

「ダメかしら？」

「いやダメじゃないけど」

……………まあ楽しそうだしいいわ（諦め）

「ふふっ♪」

本当にこの人フワフワしてるよな……………
実は彼女にはよく揶揄われる。
たまには仕返しするのもいいだろう。

「つ、つつよ……………ギリギリ勝てた……………」

「あら、負けてしまったわ。

このまま優勝してしまおうと思ったのだけど」

ギリギリ、HPバーを1ドット残した状態で
ゲーム内の式を斬り伏せる。

マジで強かったよ式さん……………

「ふふっ、それじゃあ私は退場するわね」

「ああ、お疲れ」

「ええ」

……………不思議な感覚だ。

もしかしたら、と、考えてしまうのだ。

サーヴァントとして彼女を召喚していたら、と。

そんな筈はない、今が全て、か。

それもそうだよな。

まあともかく。

これで、決勝。残る相手は……………

「……………」

これで戦うのは二度目か。

一度は現実、次は仮想。なんともこれは。

『まさかまさかの唯一の主従対決!!』

立香ちゃんのサーヴァントが全て脱落、決勝、

真機くんとそのサーヴァント、沖田総司だけ！

これは盛り上がって来たぞー!!』

「すげえなお前、どうやって勝ち残ったんだ？」

「根性です。もちろん、

マスターにも負けるつもりはありません」

根性スゴイナー（棒）。

こいつ戦闘続行スキルでも持ってんのか？
俺も沖田も専用のゲームパッドだ。

「マスターとはいえ、容赦はしませんよ」

「同じく。容赦はしない」

そして、優勝を賭けた戦いが始まった。

結果……………

「やった、やりました!!」

沖田さん、大勝利ー!!!」

「……………なん、だと……………」

負けた。

いや思った以上にサーヴァントも
ゲームの实力は侮れないなー、と思った。
と、ダヴィンチと所長がやって来る。

「はっはははー！」

「見事だったぞ橘真機、沖田総司！

昔に見た映画のように

ポップコーン片手に盛り上がったぞ！」

「おめでどう沖田さん、これは優勝賞品だよ」

ダヴィンチが沖田にプレゼント箱を手渡す。

「え、賞品とかあったんですか!?!」

「まあね。その辺、抜かりはないよ」

「うむ、よく頑張ったな真機、

負けて悔しいだろう、泣いてもいいぞ」

「新所長あとでポップコーン貰っていいですか」

「あれー、私心配したのになー」

沖田がプレゼント箱を開ける。

座っているので見えないが……………

「?……………えっ!?!」

ちよ、えっ!?!なんですかコレ!?!」

「むふふ〜まあ最近は少し落ち着いてお楽しみも
増えたんだろうし……………これはダヴィンチちゃん
からのささやかなプレゼントさ♪

ま、さつき現像したものなんだけどね?」

「何が入ってたんだ?」

「あああ!?!マスターは見ないで下さい!!」

慌てふためく沖田を見て俺は首を傾げる。

そして、俺の知らないところで

それはモニターに写し出されていたのだった。

それは、一枚のとある写真。

青年と少女の選択と約束の写真。

人理修復の果て。

その時、ダ・ヴィンチが写真として収めたものだ。

番外編 あったかも知れない世界 愛玩の獣編

もし、召喚されたサーヴァントが違ったなら。

有り得たかもしれない、この物語。

これはその、更に有り得たかもしれない物語。

その一端。

人と相容れぬ獣は、青年と何を見るのか。

「サーヴァント、アサシン。

召喚に応じ、参上しました♪」

おちやらけた風貌、口調。

存在そのものが胡散臭い。

本来なら、異聞で戦う筈の獣。

だが、何の因果か、彼女は此処に顕れた。

「私を呼ぶなんて……………大当たり♪♪

おめでとうございます、マ・ス・ター？」

「……………は？」

「あらあら、自己紹介がまだでした。

反省反省、では改めて」

ニヤリと、黒い笑みを浮かべて。
彼女は腰に手を当てて、言ったのだ。

「サーヴァント、コヤンスカヤ。

マスター、よろしくお願いいたしますね？」

「コヤンスカヤ……聞いたことないわね」

「私ありません。何者でしょうか？」

「さあ……まあいいんじゃない？」

そんな言葉が聞こえてくる。

やはり人間はこんなものでしょうねえ。

だがこのマスター、想像以上に人間辞めてますね。
どうやら私たちと似た者同士だったり？

「アサシン、でいいのか？」

「いえいえ、コヤンスカヤでお願いします♡」

「そうか、じゃコヤンスカヤ、早速だけど」

「ええ、なんでしょーか？」

どおんな命令でも申し付け下さいませ♡」

「敵だ」

「は?」

回りを見回すと汚ならしい骸骨どもがわらわらと。

つーかこのマスター、

色仕掛け耐性スキルでもついてんですか?

魅了スキル全然効果を發揮してませんね……………

もしかしたら女性の

頼れるところに惚れちゃうタイプ?

ならば仕方ありませんねえ……………

「私めにお任せを。」

骨抜きにして差し上げますわ」

「いや流石にこの数はキツイだろ、

まずは戦い方を見せてくれ、合わせる」

「えっ?あつ、はい」

なんなんですかこのマスター……………

やつぱ吐き気のある良い人……………

って感じじゃないですねやつぱり。

「銃とかありますか?」

私、あまり前線は好きではなくて」

「そうなのか、

そりや気が合うな、ほら」

「へ?」

なんとマスターは銃を生み出したのです。

生成した?……………何はともあれ、これは凄い……………

初めて見る魔術の属性でもあるんですかね?

投げ渡されたショットガンを受けとる。
本物ですね……………銃弾も込められていますし。

「俺が前に出る。マシユ、行くぞ！」

「コヤンスカヤは援護射撃、頼んだ！」

「了解です♪」

銃をぶっぱするのは良いんです。

それにしても召喚したばかりのサーヴァントに
背中を預けますかね普通。

信頼……………もあるかもですが、

どちらかと言うと、切羽詰まってる、
と言った感じですかね。

「それにしても凄いですね……………」

意外と肉体派なんです、マスター？」

「職業柄、だ！」

「一体どんな職業でして？」

「口よりっ、手を動かしてくれ！」

俺ばかりじゃなくてマシユたちにも頼む！」

「……………承知しましたー♪」

職業柄、ですか……………

その血の染み付いた匂いで何となく察せますけど。
しかしまあ、仲間は見捨てないんですね。

このマスターとはもしかしたら

仲良くやっていけるかも知れませんね♡

嗚呼、悪性の獣よ。

人理の旅で其は何を見る。

獣に堕ちるか、それとも

番外編 獣の予兆

思考が支配される。

たった1つの願望が、渦を巻くように
脳内をぐるぐると回り続ける。

ベッドの端に座り、必死に空気を呷る。

息が詰まる。手が震える。

暖房の入った自室の筈だ。

なのに、恐ろしいほどの寒気がする。

「はあ、っ、はあ、っ、……………か、あっ」

まだ、駄目だ。

まだ俺は立たねばならない。

まだ、カルデアの皆といなければ。

「はあっ、はあっ、はあっ……………くそ……………」

服を震える手で何とか脱ぎ、

そして刻まれた傷を見る。

まだドクターにも見せていない。

今は、ドクターに無理をさせるわけには、

心配をかけさせるわけにはいかない。

だが、右肩から左腰まで刻まれたその黒い傷は、

未だに脈動を続け……………いや、脈動は徐々に

大きくなっている。

触れてみるが、痛みはない。

ベトリとした、泥の感覚だけ。

眺めていると、ドアがノックされる。
誰だろうか。

「……………少し、待って、くれ」

急いで服を着る。

そして深呼吸、自身を落ち着かせる。

鏡で顔を取り繕えているかを確かめる。

……………多分、大丈夫だ。

「悪い、入ってくれ」

「おじやましませす、おかあさん」

「旦那はん、少おし時間、よろしおすな？」

「……………ジャックに、酒呑か」

入ってきたのはジャックと酒呑童子だった。
不思議な組み合わせだ。

ジャックは珍しく、アリスや

オルタリイと一緒にじゃない。

どうしたのだろうか？

酒呑童子が俺の隣に座る。

「おかあさん、わたしたち、ちよつと話があるの」

「うん、どうした？」

「その前に、よつ、と。……………えへへ」

ジャックが俺の膝の上に座り、笑う。

……………今は少しでも人肌が恋しかった。

自然と、俺も頬が緩む。

「で、どんな話を？」

「うん、ちいと困った旦那はんの話や」
「おかあさん、そろそろ死ぬでしょ？」

「……何の話だ？」

「嘘ついちゃダメだよ。」

中の黒い聖女様も言ってる。

「おかあさん、もう限界だよね？」

気づかれていたのか。

取り繕った意味が全部なくなるし。

……しまったな、みんなにバレるか？

「……まだ大丈夫だ。」

俺の限界は死ぬ時だからな」

「じゃあ限界だよ。」

「おかあさん、無理ばかりしてるもん」

「霊器を取り込んで、身体を無理矢理動かして、

それから今度は泥に呑まれたんやろ？」

大丈夫ってなんやろなあ？」

「あー……じゃあ立香たちには黙っててくれ。」

「ドクター、ダヴィンチ、あと、沖田にも」

その言葉に、

ジャックは怒ったように頬を膨らませ、

酒呑は寒気を感じる妖しい笑みを浮かべる。

「なあ旦那はん？」

「ここにいるうちらの属性、覚えとる？」

「……混沌、悪か」

「そやねえ、それで、なんやけどな？」

「おかあさん、ちよつと」

特異点から帰ってきてからおかしいんだよ？」

「おかしい?」

「んん、気づいとらんかったんやねえ?

まあしょうがないなあ、

旦那はんは、まだ人間やし」

「……………酒呑、悪いがはつきり言ってくれるか」

酒呑童子が焦らす性格なのは重々分かっている。
結局、どういうことなのかを知りたい。

「ふふっ、そんな目しなくても

教えたるわあ、ほんに、怖い怖い……………」

「わたしたちが言っっちゃうけど、

おかあさんね、もう人間じゃないよ」

「……………これ、か」

「そうやなあ、それは切っ掛け、

旦那はんは耐えられんかもなあ?」

「……………俺は、どうなる」

「死ぬなあ」「死ぬよ」

まあ答えるだろうとは思っていたけど。
頭を抱え、溜め息をつく。

「まあうちもカルデアの1人やし、

マスターの面目もあるわけなんや」

「わたしたちもおかあさんは死なせたくないよ?」

「……………ジャックはともかく、酒呑は胡散臭いな」

「いややわあ、これでもうち、

小僧よりも旦那はんは好みなんよ?

ふふ、会った時から血の匂いが凄かったわあ」

「そんなに俺って血生臭いか?」

「うーん、おかあさんの匂いは良い匂いだよ。」

「だけど、わたしたちには何となく分かるんだ」

「うちも鬼、どれだけ殺してるかなんて

雰囲気と匂いで分かってしまうんよねえ。

旦那はん、英霊より人殺しとるんやない？」

酒呑の見透かすような瞳がこちらを射抜く。

気がつけば、甘い匂いが漂っていた。

……………果実の酒気か。

「ううん……………」

「酒呑童子」

「ああもう、いけず……………」

悪かったわ、ほんの確認なんよ？」

酒呑童子から瓢箪を奪う。

ジャックが泥酔していた。

酒呑の果実の酒気スキルは声や吐息に酒の香を

宿らせ、視線だけで泥酔させる。

「確認？」

「まだ気づかないん？」

旦那はん、魅了にかかったことがないやろ？」

「」

そう言えば……………確かにそうだ。

エウリュアレやステンノに何度か悪戯を

されたことがあるが、前は立香やマシユでさえ

おかしくなったというのに俺は何もなかった。

思い当たることは、何もない。

「返しとくれやす」

「…………やるなら言ってくれ。」

もしジャックが酔ったらどうする」

「考えとくわ。それにしても……………旦那はん、鈍感、って訳でもないんよなあ？」

「……………まあ、そうだな。」

人の考えを見抜くのは得意ではあるから」

酒呑は相変わらずクスクスと笑い、立つ。

眠ったジャックをベッドに横にして、

溜め息をつく。

「待ってくれ、それだけか？」

「それだけ……………ああ、忘れるところやった、

1つ、忠告させてもらうけど……………」

その時の酒呑童子は、どこか雰囲気違った。

まるで、過去のトラウマを思い出したかのような。

「旦那はん、人として生きいよ。」

人を捨てたら、それはただの獣やさかい」

柄にもないなあ、とクスリと笑い、

酒呑童子は部屋を出る。

「……………人として生きろ、か」

意味は分からないが、

酒呑には何か考えがあるのは分かる。

覚えておいた方がいいだろう。

旅も終わる。

長いようで短かった旅も、この命も。

なら、今、自分に来ることをしよう。

生きて欲しい人たちに、残せることをしよう。

」

——俺は、聖杯保管室へ向かう。

黒衣の殺人鬼が、既にその場から

いなくなっていることにも気づかず。

後日談 エリセのカルデア案内

盤上遊戯騒動が終わり、

カルデアに帰還して1日の休みを貰った

俺たちは、現在。

立香と共に、新しくカルデアの仲間となった

エリセにカルデアの案内をしていた。

「で、ここが真機くんの部屋。

カルデアはこんな感じで、案内は

これで終わりだけど、他に聞きたいことある？」

「……………なんか、凄いな。カルデアって」

「英霊を英雄と思えなくなる施設だな」

実際にそうである。

特に案内中もうるさかった

フェルグスとかマックとかロイとか。

エリセの服装にも問題あるような気がするけど。

「でもホントに色んな英霊がいるんだ……………！」

「……………この見た目で中学生は無理だろ」

「確かに」

「えっ？」

「何でもない」

目をキラキラさせて鼻血を出している

中学生を見ていると普通という概念が何なのか
分からなくなってくる。

……………その服は狙われるだろ、
黒髭とかエドワードとかティーチとかに。
目の毒だろ。

だが、確かに英霊は凄いやな、と改めて思う。
騎士王、英雄王、第六天魔王、施しの英雄……
チーズぶつけられて死んだ英霊……
性癖で真名がバレた英霊……
溶岩水泳部……
聖女のリリーのオルタのサンタ……
おはぎ好きの魔性菩薩……
理性蒸発勇士……
朕……

「……………英雄ってなんだろう」

俺と立香は思考を共有してしまったのか
一気に熱が冷めてしまう。

英雄……………英雄？

「英雄は英雄でしょ!？」

「お前はカルデアに来て後悔すると思う」

心底そう思うんだ、俺。

英霊ってこれでいいんだろうか……

と、そこへ清姫がやって来る。

彼女は俺に気づいて顔をパツと明るくし……

「好き!!」(挨拶)

「清姫、やめよう。」

新しい子の前でそういうこと言うのは」

「マスターのことでは私も負けていないぞ！」

「こらあー！私のマスターですって！」

「沖田さん2人出てきた……………」

「す、凄い、日本の英霊だあ……………!!」

「お前は清姫の挨拶を聞いてなかったのか？」

「ああ真機様、今日も素敵です……………」

「清姫少し静かにしてもらっていい？」

とはいえこれがカルデアなのかと聞かれたら

「はいそうです」と答えるしかないのも事実。

知らず知らずの内に

慣れてしまっていた自分が怖い。

ともかく、沖田2人と清姫がやって来た。

清姫の挨拶とか色々おかしいが、

まあいつものことなので割愛。

ついでだが、エリセにも紹介しないと。

「あ……………エリセ。」

この緑の着物の奴が清姫。

大太刀を持つてるのが魔神・沖田総司オルタ。

で、こっちが沖田総司で、俺のサーヴァントだ」

「凄い……………清姫伝説の清姫に、

沖田総司が違う霊器で2人……………!!？」

「エリセ、オルタのことは分かる？」

「うん、知ってる。」

黒化した英霊は私にも知り合いがいるの」

「へー」

……………エリセの鼻血が止まらないのだが、

大丈夫なのだろうか、これは。

もし倒れたとして、目が覚めた瞬間に
クリミアの天使と医神……どちらもかなり
有名な英霊だ。エリセ、死ぬのでは？
と、立香が思い出したようにあつ、と言う。

「そうだ、まだ行ってない場所あったよね」

「そうだったか？」

「ついでだよ。真機くん、石」

「今ので理解したぞガチャ廃人め」

石を要求するなら場所は分かる。

確かにあそこには行ってなかったな。

ちなみに、

基本的に俺はサーヴァント召喚はしない。

召喚に必要な聖晶石は大体立香に渡している。

血走った目をしている時は爆死した証なので

組み伏せて諦めてもらう。

今回はまだ召喚をしてないので

立香に召喚20回分の石を袋に入れたものを渡す。

「マスター、どこへ？」

「召喚室だ。沖田、折角だから一緒に行くか」

「はい！」

「召喚室………？」

「サーヴァントの召喚室だよ。」

今回はエリセを触媒にして紅葉さんと

ボイジャーくんを召喚できるかもしれない………！」

「それ本当!？」

「もしかしたら!？」

「………欲丸出しだと来るもんも来ないぞー」

「大丈夫、今回はエリセがいるから………ふふふ」

爆死しないといいなあ、と思いつつ、
4人で俺たちは召喚室へと向かう。

「案の定というか……………なんというか……………」

「そら見たことか。」

言っただろ、欲丸出しじゃ来ないって」

結果、爆死して崩れ落ちる2人を見ることに。

そこには幾つもの概念礼装カードの山が。

「そんな……………ボイジャー……………紅葉さん……………」

「なんで……………今回はいい触媒もいるのに……………?」

「お前らなあ……………」

懲りないなあ、と思いつつ

狙いの2人との縁が強くなる

次の周期を俺たちは待つのだった。

特別編 沖田さんのマスター

たまには沖田とシユミレーションルームで遊ぶか、
そう思つて俺は沖田の部屋へ向かつていた。

(と言つても隣なのだが)

いつものように呼び出し用のインターフォンを
鳴らしてみるのだが。

「……………いないのか？」

反応がない。普段ならいなくても

『直感スキルです！どうしましたかマスター！』

等と言つて走つてくるのだが……………

何となく扉に俺は手をかける。

「開いてる……………？」

なんと無用心な。

いないのなら閉めておくべきだろう、

そう思っているのか確かめようと

俺は部屋の中へと入り……………

「あ」

「なんだ、いるじゃないか。

返事くらいしてくれてもいいだろ？」

「えっ、えっっ？」

中で何か困惑しているような沖田に話しかける。

……………？

何か、違和感が………髪の色とか、服とか。
服はまあ、水着とかあったし、
レイシフト以外は着物だったり違ったりするし。

「あれ………う？」

「えっ、その………えっ？」

それに何か声も違うような………

いや待て待て待て待て待て待て待て待て待て。
この感覚は………まさか。

「誰だお前!？」

「ごつちの台詞なんですけど!？」

思わず叫ぶと、

どうやら向こうも俺を知らないらしい。

赤髪に割烹着の女性だ。

よく見たらアホ毛もないし。

「まさか………偽物か!？」

「ちよ、待って下さい!？」

しかも志貴さんみたいにナイフ!？」

「誰だよ！」

「ごつちの台詞ですって！」

ナイフ抜いてを構える。

というか瞳の色だけが同じだ。

指輪は嵌めてない。詰めが甘いな。

髪型はアホ毛がないだけの完成度が高いが。
いや、というか偽物なのか？
イベント系のぐだぐだ感を感じる。

「……………悪い、少し焦ってた。」

物騒なもんを出して悪かった、ごめん」

「い、いえ……………こちらこそなんかすいません。」

喧嘩売るような真似をしてしまい……………」

落ち着いたのでナイフを納める。

それにしても……………似ている。

観察すればするほど、だ。

もしや沖田は疑似サーヴァントだったのか……………？
ということは彼女はその元の……………

「あの……………志貴さん、ではないですよね？」

「……………分からない。」

俺も誰かに似てるのか？」

「はい。私、見ての通り使用人を

してるんですが、主人にそっくりで……………顔とか」

「奇遇だけ……………俺も君に似た奴と間違えた。

瞳の色と髪型はほとんど同じなんだ」

「へえ……………あつ、名乗ってませんでしたね。」

私は、琥珀、と申します」

「俺は橘 真機。よろしく、琥珀」

「あつはい。すごい似てますねえ……………」

取り敢えず、互いの知らない知り合いに

似てる者同士で困惑していたらしい。

遠野志貴、という人物に顔つきが似ていたらしい。

メガネをすれば本人と見分けがつかなさそう、

とのこと。

「ちなみに私は誰に間違えたんですか？」

「あー………英霊、サーヴァントはわかるか？」

「はい、私もマスターだったことがありますよ」

「あつ、じゃあ俺は後輩だったのか」

「ええ、セイバーでしたね。」

元は私が英霊になる予定だったんですけど」

「は？」

そこまで言った時だった。

扉が開く音に、俺と琥珀はそちらを向く。

そこにいたのは、着物の紛れもない沖田だ。

実家のような……いや寧ろ実家以上の安心感。

「沖田、お帰り」「セイバーさん!？」

「はっ」

また困惑に陥ったので割愛。

「はあ………また何ともぐだぐだですね。」

それにしてもマスターが2人ですか………」

「まさか琥珀も沖田のマスターだとは」

「ええ、驚きですね。」

真機さんもでしたか……現在進行形とは」

どうにか落ち着き、

3人で琥珀が入れてくれた茶を啜る。

何か不思議な味がする。

ハーブティー、こんな味だったか……まあいいか。

「それにしても似てるな……」

瞳の色と髪型、リボンもか」

「あ、元々琥珀さんがセイバーになったら、

という設定が没になったので名残ですね。

だから似てるんだと思います」

「あー、そんな設定もありましたね。

懐かしいくらいに感じます。

ちなみに青灰姉さん（作者）は七夜さんを

モチーフにマスターを考えたそうですよ」

「へえ……」

なんか色々と凄い話になってるが

それなら似てることにも納得だ。

その頃もアルトリア顔のセイバーが

量産されていた時期だったからかもしれないな。

Xが張り切る理由も分かる気がする。

「帝都での聖杯戦争がありました、

そこでマスターになってもらったんですよ。

あ、この着物も琥珀さんに貰ったものです」

「琥珀、ナイスだ」

「気に入ってますねー」

そうだ。

琥珀なら先輩マスターとして沖田についての
アドバイスとか聞いておこう。
茶を啜り、聞いてみる。

「琥珀、沖田のことでアドバイスとかあるか？
どうフォローしたらいいとか、
気を付けるべきこととか」

「ええ…………コハエース世界なので
あまりいいアドバイスはできませんよ？」
「それでも構わない。」

「マスターとして支えたいんだ」
「……………あの、マスター。恥ずかしいんですが」
「……………おお、これはこれは。
なるほど、そういう……………」

なんか俺と沖田を見て何か納得しているが、
どうということだろうか。

「分かりました！

役立てるかは分かりませんが教えます」

「ありがとう」

「はい！まずは精神面です。」

メンタルが弱いので気を付けましょう。

メンタルケアを怠ると吐血します」

「軽くデイスラれる気分なんですけど」

「あ……………分かった。」

思い当たるから気を付けないと」

吐血は……………まあお家芸みたいになってるから
心配が薄れてきているから気を付けよう。

「あと分かると思いますが、身体が弱いです。対魔力も装甲も紙なので持久戦は避けること。後は令呪によるブーストも危険ですね。無理させてはいけません。」

真機さんが戦えるなら気遣ってあげてください」

「それ言うとうちのマスターが」

死ぬのでやめてください琥珀さん」

「分かった。もっと俺が頑張らないとな」

「マスター!?!」

沖田は守らないと。大切な仲間は必ず守る。

無茶はさせないようにしよう。

令呪も避けるのが得策か、気を付けないと。

「言っておきますが彼女が令呪を志願しても

追い込まれた時ほど使つてはいけません。

霊基が消滅、霊核が砕けるまで戦うので」

「分かった。」

沖田、頼むから無茶はしないでくれよ」

「その言葉、そのままお返しします」

琥珀はごほん、と咳払い。

どうやらこのくらいだよ。

「まあ身体、精神面でのケアに努めましょう。

吐血に気をつけて、無理なようなら

ドクターならぬマスターストップをどうぞ」

「それをマスターに言っただけでほしいです。

サーヴァントストップかけたいくらいです」

「お互い無理しないようにな」

「ホントですよ」

「ああ、それと——」

琥珀がこちらをチラリと見てくる。
茶を飲み干し、カップを皿に置く。

「貴方もご自愛を。」

セイバーは誰かを守ることは苦手ですが、
それでも守るために剣を振っていますから。

——少なくとも、今は………確実に」

見抜かれたような眼差しでこちらを見てくる。

………参った、まさか本当に見抜かれているのでは？
苦笑いを溢してしまう。

沖田にも心配された目を向けられる。

それに答えるように彼女の髪を撫でた。

「………努力するよ」

「むう、そこはいつもの

『分かった』でいいんですよ、マスター」

「………伝えたいことはこのくらいです。

頑張ってくださいね、真機さん」

そう言った琥珀を見る——答だった。

「「え？」」

既にその場に姿はなく、
あるのは熱が残る2人分のティーカップだけ。
琥珀の姿は、影も形もない。

「き、消えた………？」

「夢でも見てたんでしょっか……………」

夢にしては鮮明だし、

同じ夢や幻とは考えられない。

だが、本当に夢のような……………」

「……………」

なんだか、身体が妙に熱いことに気づく。

火照ったような感覚だ。

心臓が煩く、どこか、身体がおかしい。

沖田を見ると、同じような状態だ。

「あの、マス、ター……………」

「……………ま、さか……………」

「琥珀さんなら、有り得る、と、いうか……………」

盛られた。

そういう、考えに至って……………」

「「アイツ……………次会ったら……………」」

俺たちは、ベッドに向かうことになるのだった。

プロローグ

「始まり」

この物語はフィクションであり、

Fate／Grand Orderの二次創作です。

人理継続保障機関、フィニス・カルデア。

ここが俺の新しい職場である。

なんでも、レイシフトとやらの適正が完全らしく、

そして俺の仕事柄で俺はここに配属された。

何故だか分からんが、Aチームに配属らしい。

一番良いチームだと聞いて驚いた。

カルデアについて初日。

俺は適当にスタッフ達に挨拶なんかを済ませ、

フラフラと歩いていた。

(名前なんだっけ?) 所長の話を

適当に流し、飽きたのでトイレと言って出てきた。途中、オレンジ髪の少女が寝てて所長に平手打ち食らったのは笑ってしまった。可愛かった。俺は自室に向かう。

ドアを開けると、そこにはオレンジ髪の少女、それと何故か医療担当のドクターがいた。

「おや、お客さんかい？」

「あり？ドクター何してんすか？」

「誰？ここ私の部屋なんだけど」

なんで男子ばかり入ってくるの？」

酷い言い草である。

あとここ俺の部屋では？

「あれ、ここ俺の部屋じゃね？」

「え？でもマシユが言うにはここだった」

「あー……そう言えば確かキミが」

最後のレイシフト適正者かい？」

「レフ教授って方が言うにはそうらしいっすけど」

あの胡散臭い男が俺をスカウトしたヤツだ。

なぜ俺の住み家がバレたのか知らんが、

まあ仕事らしいので受けた。

曰く、俺は最後の適正者だ、らしい。

ついでで見つけたとか。失礼じゃね？

「ああ、ごめんごめん、ここキミの部屋だ」

「ええ!?私の部屋は!？」

「1つ隣じゃないか？」

「ここ俺の分の急造の部屋って言ってたし」

「そうか、キミが49人目の適正者だったんだね」

そう、俺は49人目。

レイシフト適正者では最後に登録されたとか。

自惚れるつもりはないが、

まあ俺に依頼とか（俺の）職業的に

危険な仕事なんだろうな……とは思う。

「これも何かの縁だ、自己紹介でもしようか。

ボクはロマニ・アーキマン。

気軽にドクター・ロマンと呼んでくれ」

「私は藤丸 立香。立香って呼んで。」

あなたは？」

「俺は橘 たちばな 真機 しんき。

漢字は果実の橘に、真実の真、機械の機だ。

シンキ、と呼んでくれ」

「え、もしかして日本人!？」

「ああ、同郷がいて良かった。

外国人ばかりだったからな、助かるよ」

「うん！よろしくね！」

元氣いいなー。

日本語で統一されていることが助けだ。

実は日本人が立香以外にいないくて寂しかった。

「フオウ！フオウフオウ！」

「おわ、何だ!？」

突然、視界が真っ白に染まる。

なんか獣臭っ!？」

「あれ、それって噂の怪物？」

マシユから聞いてたけど、本当にいたんだねえ」

「うおおお!?!なんだなんだ怪物って!?!」

「あはははは!シンキくん面白い!」

「取ってくれー!」

「フォーウ!!」

なんでこんな引っ付くの!?

ドクター、立香、笑ってないで助けて!?

「あはは、兎も角、所在のない者同士、

皆ここで友好を深めようじゃないか」

「取ってくれってー」

ドクターたちと少し話をする。

カルデアについて、カルデアの役目について。

「んあ?」

話をしていると、突然、ピンポンパンポンと

アナウンスの合図が鳴る。

声は、あの胡散臭いレフ教授の声だ。

『ロマニ、そしてマスター49番。

あと少いでレイシフト開始だ。

万が一に備えてこちらに来てくれないか?』

「ヤベツ、俺もか!?!」

『49番を除いたAチームの状態は万全だが、
Bチーム以下、
慣れていない者に若干の変調が見られる』

明らかに俺を皮肉ってるな。

俺は顔に引っ付いている獣を剥がす。

……………猫か？

「フオウ？」

「それは気の毒だ。

それじゃ、麻酔をかけに行こうか。

真機くんの体調はバツチりっぽいよ」

『そうか、今は医務室だろ？』

そこなら2分で到着出来る筈だ』

立香が俺に耳打ちする。

うん、なんか言いたいことは分かる。

「ここ、シンキくんの部屋だよね？」

「ドクター……………何分かかりますかね？」

「あわわ……………ここからだっいたら5分はかかるぞ……………

大丈夫かな……………Aチーム万全ほいし……………なっ!？」

と、突然部屋の電気が落ち、

凄まじい音がしてドクターがビビる。

俺への耳打ちで近くにいた立香も

ビクツたのを感じる。

俺もその轟音に驚き、周囲を確認。

夜目は効くのでまず二人を確認する。

2人も驚いているだけのようだ。

「なんだ!?!」

『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました』

俺たちは火災と言うアナウンスに驚愕する。

先ほど、ここは雪山の上にあると言っていた筈だ。

火災と言うのはかなりのモノでは!?!

言葉を失う俺たちにアナウンスは続ける。

『中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。』

職員は速やかに第二ゲートから退避して下さい』

『繰り返しします。中央発電所、及び――』

「なんだ今の爆発音は!?!」

一体何が起こっている……!?!」

ドクターがすぐに我に返り、

モニターを呼ぶが………

そこに写し出されたのは、惨状だった。

「………酷い………!」

「爆発か………これは不味い………」

立香に同意する。

すると、電気が復旧したのか点灯する。

「二人とも、すぐに避難してくれ!」

ボクは管制室に行く!」

「何を……!?!」

「もうじきゲートが閉まる。」

キミたちだけでも脱出するんだ!」

ドクターが部屋から出る。

立香を見ると、フォウと呼ばれる猫(?)が

立香と俺を見つめているのが分かった。

立香は静かに、頷く。

「……………うん。分かってる。

——マシユを助けに行こう」

「フォウ！」

立香はフォウと共に部屋から出ていく。

どこへ行く気だ!?

俺はそれを追いかけて、外に出る。

「おい、待て！」

「なにやってる!?

ゲートはあつちだぞ！」

「分かってます！」

「まさかついて来る気かい!?

そりや人手があると助かるけど……

ああもう！話している時間も惜しい！

障壁が閉鎖される前に戻るんだぞ!？」

「……………ああー……………俺も行く。パターンか、これ」

俺は2人と一匹と共に管制室へ走る。

管制室へたどり着いた俺たちが見たのは、
文字通り地獄だった。

立香は驚きのあまり入口で硬直。
仕方ないだろう。

俺はドクターと共に
倒れている人々の脈を確認する。

「……………火傷も酷いな、こりや駄目だ」

「生存者はいない、無事なのはカルデアだけだ」

カルデアス、というのは、奥のあの球体。
今は真っ黒に染まっているが……………

「おそらく、爆発は人為的なモノ。

誰かが仕組んだようだな。ドクター」

「えっ?! うおっ!」

俺はそれをドクターに投げ渡す。

それは。

「ば、爆弾じゃないか!?!」

「安心しろ、処理はしておいた」

「処理!?!……………な、出来てる!?!」

不発だったようだ。連鎖的に仕組んだようだな。

適当に脈を図るついでに処理した。

と、ここでアナウンス。

『障壁閉鎖まで あと 40秒。』

中央区画に 残っている 職員は速やかに――』

「電気がヤバいっほいな、ガサガサじゃねえか」
「……………ボクは地下室へ行く。」

カルデアの灯火を止めるわけにはいかない。
急いで来た道に戻るんだ、今なら間に合う」

ドクターは決意した顔でそう言う。

俺は頷き、入口にいる筈の立香を……………
いねえ。

「どこ行った!?!」

『システム レイシフト最終段階に移行します

座標 西暦2004年 1月 30日 日本 冬木』

『ラプラスによる転移保護 成立

特異点への因子追加枠 確保』

なんかヤバそうだ!急がねば……………!

マジでどこに行きやがった!?!

「立香……………あっ!?!」

俺が目にしたのは、瓦礫へ近づく立香と。

その下にいる、マシユ・キリエライト。

まだ、生きている!

目に光がある!

「しっかりして!今助けるから!」

「……………、……………あ……………!」

先輩……………逃げて……………下、さい……………!

「え」

瓦礫の下のマシユを助けようと、

立香が手を差し伸べる。
その上から、巨大な瓦礫が。

「……………くそ、仕方ねえな！」

——クロロノス・ブレイク、Andante!!」

俺は魔術回路を通し、魔術を発動——
時間を遅くする。

そして更に魔術を発動。

「image・makeup!!」

俺の手の内に手榴弾が出現する。
ピンを抜き、走り出す。

それを見開く立香とマシユ・キリエライトの
上から降ってくる瓦礫へ放り投げ、
立香の頭を床に押し付ける。

「クロロノス・ブレイク、atemporal」

時間を元に戻す。

その瞬間、手榴弾が爆発。

俺は立香に覆い被さり、背に爆発を受ける。

「な、何が……………!?!」

「シンキくん!!?!」

「無事か……………」

なんとか無事を確認できた。

ああ……………良かった。

『全工程、完了。』

ファーストオーダー 実証を 開始 します』

俺の意識は、闇に落ちたのだった。

特異点F 炎上汚染都市 冬木
第1話「燃える街」

体が重い。

あの時間を弄る魔術の影響だろう。
俺は耳に届く叫び声のようなものに
意識を無理やり覚醒させられる。

「——きて！お願いっ、起きて!!」

「ぐ……………あ」

「…………先輩！目覚めました!!」

体が揺さぶられている。

酔うって…………俺は瞼を開け、
ボヤける視線を合わせる。

「(こ)こ、は……………」

「シンキくんっ!!」

「ぐう…………立香……………苦しい……………」

抱きつくな。死ぬぞ、俺が。

「良かった……………」

「……………」

「本当に良かったです。真機先輩」

余程心配してくれていたのか、
立香は俺の腹に顔を埋めて動かない。
マシユを見ると姿が変わっていた。

気になることばかりだが……………

「マシユ、何が起こったんだ…………？」

「それが……………っ！」

マシユが突然、手にしている巨大な盾を構える。

俺は立香と共に周囲を見渡す。

「Gi……………G a a a a a a a a!!」

「く、また……………！」

「言語による意志疎通は不可能、

再び、敵対生物として判断します！」

再び……………これが示す意味は。

敵か。俺たちを囲むこの骸骨は。

立香が立ち上がる。

「マスター、指示を！」

「うん！」

だが……………数が多い。

ならば、俺も出るべきだろう。

俺は立ち上がる。

女子2人だけに任せるのは男が廃る。

「真機先輩!?下がって下さい！」

「問題ない」

「でも、シンキくんは……………！」

俺は魔術回路を確認する。

腕に黒い光の筋が走る。

ボロボロの魔術礼装のコートだが、
魔術礼装を使わなくとも。

「……………ああ、殺れる。」

立香、俺がマシユを援護する」

「え……………」

「先輩、敵対生物が来ます!!」

「……………マシユ、お願い!」

マシユが骸骨たちへ向かっていく。

俺は魔術を発動。

「i^イm^{マー}a^{ジュ}g^エe^ス・m^{メイ}a^クk^アe^ッu^プ……………!」

俺の手に現れたのは、

ショットガンとその銃弾だ。

霧状の魔力が収束し、形作る。

俺はそれを構え、装填する。

「うえっ?!銃!」

「立香、耳を塞いでろ」

俺は片膝立ちでマシユの背後から迫る骸骨へ
ショットガンを撃ち放つ。

弾は骸骨の纏うボロ布へ着弾、

小さな爆発を起こし、骸骨をバラバラに砕く。

「じ、銃弾?!」

「マシユ、援護は任せろ。」

目の前の敵に集中するんだ。

立香もマシユへ指示を出してくれ」

「う、うん！」

と、今のでターゲットが
マシユから俺へ移ったようだ。
俺は立香をマシユへ任せろ。
あの2人ならば大丈夫だろう。

「G a a a a！」

「ふッ！」

銃を腰のベルトへ挟み、
飛びかかってくる骸骨の頭部へ蹴りを放つ。
頭蓋骨を砕き、骸骨は動きを止める。
俺はその剣を奪いとり、上段へ構える。
マシユたちの骸骨は3。
俺の相手する骸骨は2。
寝起きで体が怠く、キツイが踏ん張るしかない。
俺はボロ剣の柄を強く握った。

第2話 「霊脈地へ」

「はっ、はあっ」

俺は弓を持った骸骨を斬り伏せて膝をつく。
なんとかか………勝ったか。

つかマジで何が起こりやがったんだ………
なんで骸骨なんてモンがいやがる。

「シンキくん、大丈夫!？」

「真機先輩！」

2人が駆け寄ってくる。

俺が疲れている原因は、管制室で使ったあの魔術。
一種の固有結界のようなものだ。

完全にあれを発動すれば2〜3日は動けなくなる。

「真機先輩、今の力は………」

「魔術だ………それについては後、

俺も色々聞きたいし………」

どこか、行く場所はあるのか」

「そうだ、霊脈地つて所に行こう、

そこならドクターと通信ができるよ」

「そりゃいい………行こうか」

周囲を見回すと、骸骨どもがまだ彷徨っている。
どうにか戦闘を避けながら進まねば。

俺は立ち上がり、マシユに肩を借りて進む。

10分ほど進むと

なんとか自力で立てるようになった。

どうやら大気中のマナの濃度が濃いようだ。
魔力の回復が早い。

「さっきドクターから連絡がありました、

今は連絡のために霊脈地へ向かっているんです」

「通信も出来ないか……」

予測出来ない事態だ、気をつけて行こう」

「うん、さっきの骸骨みたいだね」

2人から連絡による話を聞く。

どうやら俺たちはレイシフトされ、ここは冬木。

マシユが謎のサーヴァントと融合し、戦えるとか。

大体はこんな感じか。

そして、また少し進むと。

立香が突然立ち止まる。

「どうしましたか、先輩」

「何か聞こえた、あっち！」

「お、おい！」

立香は走り出し、俺たちも後を追う。

確かに……だが、

よく今の小さな音を聞き取れたものだ。

そこにいたのは。

「し、所長!？」

「あ、貴方たち!？」

ああもう、何が一体どうなってるのよーっ!？」

骸骨の群れに襲われる所長だった。

不味い、どうにかしなければ。

「マシユ、行ける!？」

「はい！戦闘、開始します！」

立香も三度目の戦闘に慣れたようで、

マシユへ指示を出している。

先ほどよりは数が少ない。

魔術を使うまでもないか。

俺は拳を握り、マシユと背中合わせになる。

「立香、マシユ、左を頼む！」

「分かりました！」「了解！」

「G a a a a!!」

魔術による強化を使い、

斬りかかってくる骸骨の頭蓋へ拳を放って砕く。

反動がないわけではないが、魔力の消費なら

こちらの方が断然いい。

「しっ！」

蹴りを放って剣ごと胸骨を貫き砕く。

そのまま足を振り下ろし、バラバラに。

残りは、弓持ちが二体か。

距離が遠いが、仕方ない。魔術を行使しよう。

俺は再びショットガンを生成する。

「i^イma^マge^{ジュ}・ma^{メイ}ke^クup^{アップ}……！」

この際だ。もう説明してしまうが、この魔術は俺のオリジナルのもの。

俺の属性——というか、俺の家系の属性は無。

この魔術は、使ったことのある

モノを生成する、というもの。

<i^イma^マge^{ジュ}・ma^{メイ}ke^クup^{アップ}>の

詠唱を行う魔術。

イメージも大事だが使用歴がせめて10年はないとその武器を生成することは出来ない。

似たものに投影魔術があるが、

あちらは脆い代わりに大量に生成できる。

見て構成を確認すればすぐに出せる。

だがこちらは一度に5つまでしか生成できない。

魔力の燃費もかなり悪いが、頑丈なのが利点か。

「戦闘、終了しました。」

お怪我はありませんか、所長」

「……………、……………、……………、……………、……………、……………、……………、……………、……………、……………」

俺たちは所長に経緯を説明する。

そしてどうやら霊脈は丁度この下を流れている

ようなので、俺たちはそこに召喚サークルを

設置することになったのだった。

第3話 「英霊召喚」

なんとかドクターとの通信が可能になり、俺たちは状況を確認する。

カルデアのスタッフたちも20人に満たないらしい。かなりの人があの爆発に巻き込まれたようだ。

しかもカルデア自体も機能を8割近く失ったとか。レイシフトの修理を進め、その間、

俺たちはここ、特異点Fの調査を進めることになったのだった。

通信は切断される。

電力も危ない中、連絡を不要にするのは駄目だ。

「……………所長、よろしいんですか？」

ここで救助を待つ、という案もありますが」

「そういう訳にもいかないわ。

カルデアに戻っても次のチーム選抜に

どれだけ時間がかかるか分からないもの」

「まあ確かに……………Aチームの連中は凍結か」

「そういえば、貴方はAチームだったでしょう？」

なぜマシユのようにデミ・サーヴァント化も

していないのに殆ど傷もないの？」

「う……………」

俺は口をつぐむ。

Aチームの連中は変わり者ばかりで疲れるのだ。

まあ何人かは一緒にいても苦にはならなかったが。

サボってたとか言えねえ。

「……………ふん。貴方、

「確か49番目のマスターだったわね」

「え、はい。そうですけど」

「名前は確か、真機、だったかしら。」

「こうして召喚サークルを設置したのよ。」

「やることは1つでしょう」

「まあ、そうなるだろうな。」

「はて、俺はレイシフト適正はあっても」

「マスター適正までもは知らん。」

「どうなるかねえ……………」

「了解しました、と」

「真面目にしなさい！」

「貴方にカルデアの戦力がかかっているのよ!？」

「へいへい……………」

「面倒くせえ……………」

「俺は召喚サークルの前に立ち、詠唱を開始する。」

「手の甲にある、渦巻く線の形をした令呪が輝く。」

「息を吐き、そして集中するために目を瞑る。」

「素に銀と鉄。」

「礎に石と契約の大公。」

「憂いなど不要なり。義もまた然り。」

「我に情は無し。」

「降り立つ風には壁を。」

「四方の門は閉じ、王冠より出で、」

「王国に至る三叉路は循環せよ。」

「閉じよ、閉じよ、」

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、」

「繰り返すつどに五度。」

ただ、満たされる時を破却する。

——告げる。

汝の身は我が元に。

我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、

この理に従うなら答えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者。

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

召喚サークルに眩しい光が溢れ、

そして光の中から、それは現れた。

桃色の袴、そして短いピンクかかった白髪。

腰には刀が指してある。

それは、いや、彼女は笑みを浮かべ、

言ったのだ。

「セイバー、新撰組一番隊隊長、沖田総司。

召喚に応じ、推参致しました！」

それは、俺には不相応なほどの最優。

これから幾つもの苦楽を共にすることになる、

運命とも言える出会いだった。

第4話 「セイバー、沖田総司」

「では問おう」

俺が召喚したサーヴァント、セイバー

——沖田総司と名乗った彼女は、

俺をじつと見つめ、言った。

「貴方が私の、マスターか」

凜とした声が響き、

彼女は俺を真剣な目で見つめる。

「……ああ、俺は橘 真機。

よろしく、セイバー」

彼女はパツと顔を明るくし、

嬉しそうにこう言った。

「おおっ！素晴らしいです！

この一番言ってみたかったセリフに

この優しそうなマスターの返答!!

間違いありません、これは運命ですね!？」

「お、おう」

急にテンションの跳ね上がったセイバーを見て、立香たちは硬直、俺は引く。

「あ、セイバーではなく、

沖田と呼んでください！

そちらの方がしつくりくる気がします！」

「わ、分かった。じゃあ、沖田」

「はいー！」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！」

所長が止めに入る。

なんだか俺も言いたいことが分かった気が。

立香たちも同じような顔をしている。

「貴方、沖田総司と名乗ったわよね？」

日本のサムライ、沖田総司は男ではないの!？」

「ちやいますよ？」

実際、私とその沖田さんですし」

「驚きました……」

「えー、私も男だと思ってたよ」

沖田は泣きそうな顔でこちらを見る。

ええ………どうしろと。

「………マスター」

「………女だと思ってた」「ですよね!!」

めっちゃ嬉しそうなんだが。

まあ、沖田総司といえ幕末の天才と

言われたほどの剣の腕前だ。

彼女が沖田総司なら、それも分かるだろう。

「おや、どうやら私の初陣の相手のようです」

「………っ!? 敵対生物確認、囲まれています!」

「はあっ!」

「数は………10つてところか、

立香、マシユ、沖田、行くぞ！」

俺たちは集まってきた骸骨を相手にする。
今回は固まって少しづつ撃破していくことに。

「前衛は私にお任せあれ！」

「あ、おい！」

沖田が飛び出して行く。

流石にこの数で1人は……………！

「せえあッ!!」

「G a a a !?」

「!?!?」

空気が震えるほどの気迫が沖田から放たれ、
先ほどの明るい笑顔とは考えられない
殺気を纏った沖田が刀を振るう。

一太刀で骸骨がバラバラに斬られ、
更にその剣速も凄まじいものだ。

銃弾斬れるんじゃないやねえのか沖田さあん……
……何はともあれ、やはり沖田総司、本人だろう。

「うし、負けてられないぞ！」

「は、はい！マスター指示を！」

「分かった！」

俺たちもそれぞれに出来ることを。

俺は魔術を行使し、ショットガンを構える。

沖田1人で流石に対処は難しい。

マシユ含め、前衛の2人を援護する。

「これで、最後っ!!」

沖田が最後の骸骨の首をすつ飛ばす。

崩れ落ちる骸骨を前に、沖田は「ふー」と息を吐き。

「沖田さん大勝利ー!!」

どうですどうです? 私、強いでしょう!?!」

先ほどの気迫はどこへやら。

刀を納めた彼女は俺にピースサインを出す。

「沖田、凄い剣技だったぞー!

流石は——」「こふっ!?!」沖田ああ!?!」

「「ええええっ!?!」」

いきなり吐血した沖田を見て俺たちは仰天する。

俺は倒れかけた沖田を支える。

一体どうしたんだ!?!

「あふっ………だ、大丈夫です………」

私、生まれつき病弱でして………」

「絶対大丈夫じゃないだろ!？」

吐血だよ!？」

こうして俺たちは調査を先伸ばしにし、

沖田と共にもう少し休むことになったのだった。

第5話 「影のサーヴァント」

「どこに行っても焼け野原ね……」

住人の痕跡もない、一体何があったのかしら……」

俺たちは現在、教会があったと

思われる場所を調査している。

ちなみに沖田は俺が背負っている。

また吐血されても困るし、彼女は大切な戦力。

まさか病弱がサーヴァントのスキルとして

決定されていたとは思いもしなかった。

「恥ずかしいんですが………」

「そうか？」

うー、と彼女は背中に顔を埋める。

だが、いざと言うときに困るしなあ………」

マシユたちと少し離れて瓦礫を漁る。

「マスター、何をしてるんですか？」

「武器として使えるモノないかな、と」

「脳筋ですか？」

「違うわ」

まあそう受け取られてもおかしくはないが。

だって銃弾までmakeupするの疲れるし。

本当は石でも装填したいくらいだ。

だが弾詰まりでも起こしたら面倒だし。

「おっと？」

ラツキー、銃弾発見。拳銃の弾か？

見たところ大口径の弾薬だ。

近くにはライフルの（珍しい螺旋状）マガジンまで。

かなり大容量ぽいな。すっげ。

真っ黒焦げじゃなけりや欲しい。持って帰ろ。

もしかして同業者かな？

「私、銃器は苦手なんですよね……」

「んじや今度剣術を教えてくださいよ、

俺も我流だが一応剣は扱えるんだ」

「マジですか!? 良いですね！

バシバシ鍛えてあげますよ！」

これでも軽くだが近接戦闘は

剣術はそこそこ、体術はまあまあ出来る。

どうしても魔術師は機械音痴、

運動不足になりがちなのだが、ウチは異常である。

俺は鼻歌を歌いながら瓦礫を漁る。

沖田はいつの間にか俺の背中から降りていた。

「〜♪」

「……………あれ？」

「どうした？」

「いえ、なんだかとっても懐かしい感じが……………？」

その瞬間だ。

鎖の音が、聞こえた。

「……………ッ！」

——image makeup!——

「え、どうしたんです」

「沖田伏せろ!!」

「きゃあ!？」

頭を切り替え、回転速度を上げる。

集中を高め、回転式拳銃に弾が装填してある状態でメイクアップする。

左手で沖田の体を抱き止めて

そのまま地面に倒し、右手でリボルバーを発射、飛来するモノの標準を逸らす。

それ——鎖は俺の後ろ髪を擦って

俺たちのすぐ後ろの地面につき刺さり、

そして鎖を手繰ってそれは地面に降り立った。

それは、黒い、ヒトガタの影。

「なんだ……コイツは……!」

「マスター!」

「ああ、迎撃するぞ!」

俺たちは立ち上がり、それぞれの得物を構える。

対する黒い影も黙って

鎖のついた杭のような短剣を構えた。

立香たちを呼ぶ暇はない。

今、ここで倒す——!

俺は残った3発の銃弾を装填し直し、

撃ち放って使い果たす。

銃弾は全て短剣によって斬り落とされるが。

「沖田!」

「せえア!!」

「……………ツ!!」

沖田が刀を振るい、影を圧倒する。

あの天才に近接では勝ち目がないと判断したのか、

影は適度に中距離を保っている。

俺は魔術を使い、弾薬を補充。

走り出し、装填して影に撃ち放つ。

「……………ウツ!?!」

影は大きく怯む。

一発食らつても大丈夫と、侮ったな?

改造型ポイントソフトポイント——

やはり、英霊でもこれは堪えるだろう。

「沖田、今だ!」

「はぁあツ!!」

沖田が大きく気合いと共に踏み込み、一閃。

影は横一文字に斬り断られたのだった。

影は、何も言わずに溶けるように消えた。

俺たちはその場に立ち尽くす。

「ふう、沖田、体は大丈夫か？」

「あ、はい。一瞬で片付きましたので。」

それにしても……………」

沖田が俺をじつと見つめる。

どうしたのだろうか。

「私たち相性バツチリじゃないですか？」

「……………同じく」

「……………ふっ、あはははははー！」

俺たちは拳を突き合わせ、笑い合う。

そして、立香たちを探しに行くのだった。

第6話 「キヤスター」

「立香！」

「あ、真機くんに沖田さん！」

俺たちが教会の表側に向かうと、

立香、マシユ、所長と、

そして青いローブを着た男がいた。

「なんだ、お前らがお仲間さんかい？」

「うん、2人とも無事だった？」

さつきキヤスターがライダーが

そつちに向かったって言ってたから心配で」

「なんとか撃破できた。」

そつちは……マシユ、大丈夫か？」

「はい、こちらランサーとアサシンに

襲われたのですが、キヤスターさんと合流して

なんとか撃破することが出来ました」

そう、か。

俺たちを襲ったライダー、

そしてこのキヤスターという男。

つまり、俺たちが戦ったのはやはり……

「サーヴァント、か」

「鋭いねえ坊主、名前は？」

「橘 真機だ。」

3人を助けてくれてありがとう、キヤスター」

「良いつてことよ、そつちの嬢ちゃんは？」

「……………ええ……………」

さつきから俺の背中で妙に黙ってる沖田。
どうしたんだ？

「あなた、確かランサーでは……？」

「おう、本業はな。今回はこっちの現界だ。

つか、どっかで会ったことあるか？」

「いえ気のせいです。

私は沖田総司、マスターのサーヴァントです」

「お、おう。そうか」

俺たちはキャスターの兄貴に話を聞くことに。

なんでも、聖杯戦争があつたらしく、

キャスターはその召喚されたその1人。

セイバーに全てのサーヴァントは倒され、

それらは影となって何かを探しているらしい。

その中には、キャスターの兄貴も含まれ、

おそらくは……………

「私たちも含まれる、かも？」

「……………だな」

『真機くん、沖田さん、聞きたいことが

あるんだけど、いいかい？』

「はい、どうしました？」

俺たちはドクターとの通信に対応する。

なんかハモった。

兄貴も既にドクターとも話をしたようだ。

驚いていない。

『こちらを襲った黒いサーヴァントは

喋っていたんだ、何か情報を
得られたりしなかったかい？」

「え、喋れたんですか？」

「ぜんっぜん喋りませんでしたよ？」

黙っていたのか？

まあ、ソフトポイントを食らった時は

苦しむような声をあげていたが。

「あー、ライダーの奴はそういう奴だ」

『むう、そうか……………』

何か情報が得られればと思っただけだ』

「セイバーの奴は洞窟の中に居座ってやがる。

お前らの目的も同じだろう？」

俺たちは頷く。

おそらく、ここでまともなサーヴァントは

兄貴くらいしかいないのだろう。

ならば、セイバーを倒せば

この特異点は修復される筈だ。

「所長……………」

「……………言われなくとも分かってるわ、

立香、真機、この特異点を修復する為に、

残ったアーチャーとセイバーを倒しなさい」

「はい！」

これからの目的は決まった。

目指すは冬木にある洞窟。

そこで、この特異点を発生させた大元を叩く——！

第7話「影の弓兵」

俺たちは洞窟の奥にあるという大聖杯を
目指して薄暗い洞窟の中を進む。

「あ、真機先輩！聞いて下さい、

私、さっきの戦闘で宝具を使えたんです！」

「宝具って言えば……あの宝具か？」

「凄いいじゃないか、マシユ！」

宝具はサーヴァントにとって切り札だ。

マシユはデミ・サーヴァントの身でそれが
使えるというのは凄いことではないか。

「今度お見せしますね！」

「ああ、楽しみにしてるよ」

「はいー！」

嬉しそうだなー。

なんだかこんな嬉しそうな人を見ると

こちらも嬉しくなってくる。

まあマシユが嬉しそうで何より。

「うー………私の宝具も凄いですからね」

「勿論。沖田のも見るのが楽しみだ」

「ふっふふ、私の全力をお見せしますよ」

「こっぴつ!？」ってなるのが心配なんだよなあ。

沖田は宝具を使わせたら早く下がらせよう。

確かに強そうだが、その一撃で敵を

倒しきれなかったら不味いだろうし。
と、俺は兄貴がこちらを
じっと見ているのに気づく。

「……………」

「ん、どうしたんだ、兄貴？」

「俺はお前の兄貴じゃねえんだが……………まあいい、

いや、なんでそいつが召喚されたのか、ってな

「どういうことだ？」

「召喚されるサーヴァントは

土地に引つ張られたりするもんなんだよ、

お前さん、そいつに会ったこともねえんだろ？」

「初対面だな」「初対面ですな」

まあ、確かにそうだが。

「ここが日本だからじゃないか？」

「ん、ああ、それもそうか……………」

———そういうことにしとくか」

「……………」

なあ兄貴、1つ聞いていいか？」

俺は気になっていたことを聞く。

俺は兄貴を真剣な目で見ると

彼を疑うつもりはないが……………」

「アンタは泥に飲まれなかったのか？」

「……………やっぱ鋭いな、坊主」

「アンタを疑うわけじゃない。

確かにアンタは俺たちの味方だ。

だって俺たちの方に味方した方が劣勢だ」

「なるほど、確かに。」

キャスターのあなたが敵側に回ればすぐに
私たちは壊滅させられるでしょうし」

キャスターは黙って前を歩く。

沖田も気づいたようだ。

「今は関係ねえことだ。なあ、門番！

相変わらず聖剣使いを護ってんのかよ！」

突然、キャスターが洞窟の奥へ

声を投げ掛ける。

俺たちは洞窟の窪みに座る

影にそこで気付き、戦闘態勢を取る。

「私は門番になったつもりはないがね。

つまらん来客を追い返す程度はするさ」

「けっ、門番ってのはそれを言うんだよ」

黒い影ははつきりと喋っている。

確かに、この雰囲気はさっきのライダーとは
何かが違う。

明確に目的を持っているように感じるな。

「兄貴、立香たちと先に行ってくれ。

このアーチャーは俺と沖田がやる」

「大丈夫か？」

「行けるか、沖田？」

「ええ、万全です！」

俺は立香たちを見る。

マシユがアーチャーの動きを警戒している。
俺は立香へと叫ぶ。

「立香！所長と兄貴と先に行ってくれ！」

「えっ!?でも……」

「問題ない！行ってセイバーを倒せ！」

俺はマシユへ目線を送る。

「先輩、ここは真機先輩に任せましょう。」

あの2人ならおそろく、大丈夫かと」

「……っ、分かった！」

気をつけて、頑張つて！」

「おう！」

兄貴を含めた4人がアーチャーの横を通りすぎて
先に進んでいく。

アーチャーは手出しをしなかった。

「止めないんだな？」

「止めても無駄なことくらい分かっているのね」

俺はアーチャーへ銃を向け、

背中からは既に沖田が降りて刀を抜いていた。
無論、彼に余計なことなどしてほしくはない。

「アーチャー、お前みたいな正義の代行者が

そんなことやっていいのかねえ？」

「……どこかで会ったか、お前とは」

「忘れてるなら別に構わないけどな。」

俺にとっては衝撃的だったが」

「マスター？知り合いですか？」

「あつちは忘れてるみたいだけどな」

「さて、話はここまでだ」

アーチャーは魔術、投影魔術を行使して

巨大な弓を構え、こちらに向ける。

俺たちは、影となった正義の代行者と対峙する。

第8話 「影アーチャー戦」

「はあッ！」

「ふッ！」

2人が刀と剣を打ち合わせる。

影のアーチャーの二振りの双剣が沖田に

迫るが、沖田は素早い身のこなしで避けていく。

俺は沖田の反撃から距離をとったアーチャーへ

走りながらライフルを撃ち、接近する。

「マスターながら接近戦とは、

狙われる対象になることを、理解しろ!!」

アーチャーは銃弾を双剣で弾き、

弓を取り出し、巨大な矢を放つ。

「職業柄ツ、戦闘だけが俺の取り柄でな!!」

俺は自身の血液に魔力を流し、

文字通り全身に身体強化を施して矢を

左手で掴み、握り、へし折る。

「何!？」

「魔術師舐めんなア!!」

俺は足へ更に強化を施し、

足裏からジェット噴射の要領で

アーチャーへと急接近。

同じように引き絞った右腕の肘から

魔力をジェット噴射。

「アーチャーへ拳を放つ。

「ッ、^ロ熾^イ天覆う七つの^ア円環^ス!!!」

アーチャーの俺へ向けた掌から

5枚の光の盾が花卉のように展開される。

結界か……………!!

「ぐッ……………!?!」

魔力によるジェット噴射した俺の拳は

盾の中央に激突。

凄まじい爆風が起こり、盾を破壊する。

「バカな!?!」

俺は反動で後ろへ弾き飛ばされる。

ダメージを与えることは出来なかったが、十分だ。

「沖田ア!!」

「せああッ!!」

「くッ!?!」

俺は吹き飛ばされる瞬間に名前を呼ぶ。

沖田がアーチャーの背へ刀を振り抜くが、前へ跳んだアーチャーに回避される。

俺は地面へ受け身を取って片膝をつく。

「チッ、はあ、はあ、

間合いを間違えましたか……………!」

「はあ、っ、はあっ、ふうっ、くっ……………!」

不味い、疲労が出てきた。
今の不意討ちで終わらせるつもりだったんだが。
あまり長期戦はしたくない。

「どうやら長期戦は苦手なようだな」

「はあーっ、はあっ、うっ、せえ……」

「英霊でもないその体で出来ることなど
たかが知れている。」

中々の魔力量のようなだが、これまでだ」

「はあっ、黙って、ろ、油断が、過ぎるぞ」

「!!」

俺は魔力を再び体から放出。

近づいてくるアーチャーに距離を取らせる。

仕方がない、切り札を切る………!

「沖田！ 宝具解放準備!!」

「………！ 承知しました!!」

俺は右手の掌を地面に当て、

地面の魔力を吸い上げる。

やはり、だ。

この洞窟は外よりもマナが濃い。

骸骨も竜牙兵などが出てきた。

ただでさえ、神代並みのマナの濃さ。

だから土だろうと、魔力が宿っている。

ならば、こういうことも可能だ。

「——クロノス・ブレイク、ワールド!!」

「!？」

土を媒介に、魔術を発動する。
魔力が渦巻き、世界を塗り潰す。

世界が切り替わる。

空は暗く、月明かりだけが射す場所。
足元の水面は何をも映すこともなく、
波紋だけが、水を走る。

「まさか……………固有結界だ?!」

俺は立ち上がり、目を瞑る。

少しでも集中を切らせばこの世界は崩れ落ちる。
沖田の存在が隣にある。

それは、この世界の加護を受け渡す。

「水面に映すは隣に立つ者。

その真なる姿をそこに映す」

沖田の足元の水面が揺れ、その姿が映る。

この世界は、水面に映る存在を高める。

沖田の姿が掻き消える。

「一歩音越え」

「な、投影が………!?!」

アーチャーが投影を使おうとするも、
世界がそれを許さない。

沖田が大きく踏み込む、1歩目。

「二歩無間」

神速でアーチャーへ迫る、2歩目。

「三步絶刀!」

刀を引き絞り、3歩目。

「〃無明三段突き〃ッ!!!」

3本の閃光が、アーチャーの影の体を穿った。

第9話 「悪辣なる笑み」

「マス、ター、大丈夫、ですか……………」

「ああ……………お互い、満身創痍、だな……………」

俺は固有結界と度重なる疲労で、

沖田は戦闘後の吐血で、それぞれ膝をつく。

というか、召喚した沖田の維持だけでも魔力を
持つていかれるので体の怠さが消えない。

まあ気を使わせたくないと言わない。

風邪を引いてる気分だ。

俺はふらつく足で立ち上がり、

沖田の元へ向かう。

「大丈夫か？」

「はい……………ごめんなさい」

「謝らないでくれ、沖田のお陰で倒せたんだ。

ほら、立香たちと合流しよう」

「ありがとうございます……………」

俺は彼女を背負い、洞窟の奥へと進む。

彼女自身が軽いので苦ではないが、

やはり少しふらつく。

しばらく進むと、大空洞にたどり着く。

あれが……………大聖杯か。

聖杯を見るのは初めてだが、

凄まじい魔力を感じる。

「あ、真機くん！」

「真機先輩！」

「……………はあ、良かった、無事だったのね」

3人が駆け寄ってくる。

良かった、そちらも無事だったようだ。

あれ、兄貴は？

「キャスターの兄貴はどうしたんだ？」

「そういえばいませんね……………」

「うん、セイバーを倒したら消えちゃって……………」

「ともかく、あの水晶体を回収しましょう。」

ここを特異点にしたのはあれが原因でしょうし」

所長がそう言い、大聖杯に近づこうとした時。

何者かが、そこに現れる。

「——な!？」

「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。」

計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。

いやはや、全く48人目のみならず、49人目まで

逃してしまっていたとは、失態だったよ」

レフ教授だった。

胡散臭いヤツだとは思ってはいたが、

まさか——この発言、

コイツがカルデアの爆発の元凶か。

「レフ教授!？」

『レフ——!？」

レフ教授だって!？」彼がそこにいるのか!？」

「うん?その声はロマニ君かな?」

君も生き残ってしまったのか。
すぐに管制室へ来てほしいと言ったのに、
全く——」

ニタリと、不気味にヤツは笑った。
薄気味悪い、嫌悪感の止まらない笑み。

「どいつもこいつも統率のとれない
クズばかりで吐き気が止まらないな」

『「——!?!」』

「人間というものはどうしてこう、
定められた運命からズレたがるんだい？」

閉じていた目を開き、ヤツはそう言う。
すぐにでも撃ちたいが、下手に動く危険だと
職業柄、そして本能が警鐘を鳴らしている。

「——っ、マスター、

下がって………下がってください！」

「マシユ!?!」

「ああ、ヤツはもう——」

と、俺の隣に所長が出てくる。

彼女は、ふらふらとヤツへと向かっていく。

「ああ、レフ、レフ………生きていたのね」

「所長——!?!」

「マシユ、近づくなー!」

「所長を止めようとするマシユを手で制する。
勘だが、分かる。」

もう、所長はヤツの射程の中だ。

「やあオルガ、元気そうで何よりだ。

君も大変だったようだね」

「ええ、ええ、そうなの！」

カルデアは爆発するし、

この町は完全に廃墟だし」

「……………はあ、本当に予想外の

ことばかりで本当に頭にくる」

マシユは俺を見るが、

ヤツに隙を晒す訳にはいかない。

不用意に動いて殺されては意味がない。

「その中でも最も予想外なのが君だよ、オルガ。

爆弾は君の足元に設置したのに、

まさか生きているなんて」

「——え、れ、レフ？それ、どういう」

「いや、生きている、というのは違うな。

君はもう死んでいる。肉体はとつくにね。

残留思念をこの土地に転移させてしまったか」

「え、あ」

「君はカルデアに戻ればしない。

そこで消滅するのだからね」

「カルデアに……………戻れない？」

「そうだと。だが、それでは哀れだ」

レフは聖杯を使い、所長に何かを見せる。

「これが、カルデアの末路さ」

「そ、そんな……………私のカルデアスが、真っ赤に」

「あれは君の、ではない。

全く、最期まで耳障りな小娘だったな」

「!」

所長は俯き、動かなくなる。

精神が崩壊した？

だが、助けにいくわけには……………!!

彼女の体が浮かび上がる。

まるで、何かに引き付けられるように。

「このまま殺してもいいが、特別だ。

最期に君の願いを叶えてあげよう」

「——所長!」

「不味い……………!!」

まさか、カルデアスに!」

「その通りだとも、49番くん」

あれは、確か高密度の情報体、

人が触れようものなら粒子レベルで

バラバラに分解されるモノ。

まさか、あれに所長を引きずり込む気か!?

「去らばだ」

「所長……………っ!!」

所長は、意識が崩壊していたからか、

ほとんど無表情で、そして、

最期に悲痛に顔を歪めて、消えた。

レフは見届けると、こちらを向く。

「クク、黙って見ていてくれて感謝するよ」

「ほぎけ、不用意に近づけば殺されただけだ」

「ほう？流石は49番くんだ。」

「仕事で鍛えた観察眼かな？」

「仕事……………」

「では、改めて自己紹介をしようか」

レフは、大きく腕を広げる。

「私はレフ・ライノール・フラウロス。」

「人類を滅ぼすために遣わされた者だ」

「……………」

「聞こえているな、ドクター・ロマニ？」

「折角だ、教えてやろう」

そして、ヤツは衝撃の言葉を口にした。

「人理は焼却された。」

「人類はこの時点で滅んでいる」

第10話 「帰還」

『どういうことですか、レフ教授……』

人理が、焼却された、とは』

「言葉通りの意味だ。

未来は焼却され、結末は確定した。

貴様たちの時代はもう存在しない」

話についていけない。

未来が消失した、というのは

まだ一万歩譲って分かる。

だが、焼却された、とわざわざ言い直したのだ。

焼却、とは。

「カルデアスは磁気によって守られている

だろうが、外はこの冬木と同じようになっている」

『……、……そうでしたか。

外との通信が取れないのは、

そもそも通信を受けとる相手がいないから』

「ふん、流石に聡いな。

真っ先に殺すのは貴様であつたか。

まあいい、カルデア内の時間が2016年を

過ぎれば、そこもこの宇宙から消滅する」

2016年を過ぎれば、か。

思考を巡らせる。

一定の時間に達した時に焼却、

つまり、それまでは猶予がある。

「もはや誰にもこの結末は変えられない。

これは人類史による人理の否定だからだ」

人類史による、人理の否定………
過去を消した、いや焼却したのか？
だとすれば、未来も必然的に無くなる。
と、ここで地面が揺れ始める。

「うわ、っ!？」

「地震か!？」

「おっと、もうこの特異点も限界か。」

もう少し話をしてやりたかったのだがね」

レフが舌打ちをする。

「チツ、セイバーめ、

聖杯を与えられながらこの世界を
維持しようなどと余計な手間を取らせてくれた。
大人しく従っていれば
生き残らせてやったものを」

「………!?!?待て、どういふことだ!!」

やはり、だ。

感じていた違和感。

セイバーはレフの仲間じゃない。
なぜ、ここをヤツは守っていた？
未来を焼却するためではなく、
この世界を維持するためとヤツは言った。

「では、去らばだ、ロマニ。」

そしてマシユ、人類最後のマスターたちよ。
こう見えても次の仕事があるのでね」

「——沖田、一度降りてくれ」
「え？」

そう言い、レフは身を翻す。
逃がすものか——！

俺は沖田を地面に下ろし、
魔術を発動、自動小銃を装填して構える。
距離は500メートル程。

「ただで逃がすと思うな!!」

「真機先輩!」

「何!?グッ………!!」

「チツ——!」

地面の揺れが激しいため、命中したのは2発。
左肩に命中した。が、致命傷にはならない。

「ぐ——このガキが………!!」

次に会うとき、覚えていろ………!!」

レフがこの空間から完全に消え失せる。

『よし、レイシフト準備完了だ!』

「ドクター、早く!」

「急いで下さい!地下空洞が空間ごと崩れます!」

『今やってる!だけどそっちの方が早いかもだ!』

意識をしつかり持つてくれよ!!』

俺は消えたレフを見て流し、

何かできることはないか探る。

そして、地面がひび割れ、地下空洞が崩れる。

俺は地面に飲み込まれる。

「く——!？」

「マスター!!」

「沖田!!」

手を伸ばす。そして、手を繋ぎ止めた。

世界が、消えた。

第11話 「グランドオーダー」

目を覚ます。

意識を一瞬で取り戻し、重い瞼を開ける。
上半身に力を入れ、飛び起きる。

「うわっ!?なんだ、どうしたんだい!？」

「——ドクター?」

そこにいたのは、ドクターだった。
回りを見渡すと、そこは俺の自室だった。
俺はベッドに寝かされていたようで、
ベッドの横の椅子にドクターが座っていた。
と、やっとここで右手に違和感を感じた。

「沖田——?」

「ふう、どうやら混乱してるみたいだね。

「これから説明するから、まず落ち着こう」
「あ、ありがとうございます………」

俺はドクターから水の入った
コップを左手で受け取り、飲み干す。
思っていたより喉が乾いていたようで、
冷たい水が心地よく、思考を落ち着かせる。

「落ち着いたかい?」

「はい……ありがとうございます」

「うん。それじゃあ説明をしようか」

俺はドクターの話を聞く。

どうやら全員のレイシフトは成功。
俺、沖田、立香、マシユは無事だった。
そして、どうやら沖田は俺と手を繋いだまま
レイシフトしたようだ。

「手が固くて離れなくてね。」

仕方なく同じベッドに寝かせたんだ」

「……………すみません……………」

顔が熱くなる。

ニヤニヤ笑うドクターに俺は冷えた左手で
赤いであろう顔を隠す。

「さて、それじゃ管制室へ行こう。」

立香ちゃんもそろそろ目覚めるだろうし」

「はい」

俺は沖田と繋いだ手を離す。

彼女が少し呻いたので、

軽く頭を撫でてから部屋を出て管制室へ向かう。

管制室へ行くと、そこにはマシユがいた。

「あ、真機先輩、おはようございます。」

「ご無事で何よりです」

「マシユも無事なようで良かったよ。」

「特異点ではありがとうな」

「いえ……………あとは、先輩だけですな」

「ああ…………と、噂をすれば、だね」

管制室の扉が開き、立香と……………

確か、カルデアの召喚したサーヴァントの。

「やあ、真機くん。私を覚えているかな？」

「ダ・ヴィンチ……………」

「良かった、あなたも無事だったのか」

「相変わらず “ちゃん” 付けはしないんだね……………」

「おはよう、マシユ、真機くん」

「おはようございます、先輩」

「おはよう、立香」

俺たちは挨拶を交わし、ドクターを見る。

「さて、これで揃ったね。まあ一人足りないけど」

「俺から説明しておきます」

「頼むよ。では……………」

生還、そしてミッション達成おめでとう」

そう、俺たちはあの特異点から脱出できた。

ドクターは続ける。

所長の死、カルデアの状況。

そして、人類史に現れた、七つの特異点。

この未来を取り戻せるのは、

俺たちだけだと言うこと。

「マスター48番、藤丸立香。

マスター49番、橘 真機。

君たちに、人類の未来を背負う覚悟はあるか？」

人類の未来を救う。

不完全な過去を修復し、

焼却された未来を元の形に戻す。

世界を救う、戦いだ。

まさか、ただの仕事で

こんなことになるとは思いもしなかった。

普通の仕事なら契約破棄し、

俺は逃げ出すだろう。

だが。

俺は横の少女と目を合わせ、頷き合う。

「勿論です」

それが、答え。

焼却された未来を救うため、

時を遡って過去を修復する。

「——ありがとう。」

その言葉でボクたちの運命は決した」

ドクターは嬉しそうに笑う。

俺も、立香も、笑っていた。

「これよりカルデアは、

人類継続の存命を全うする」

これは、長く、辛く、苦しい戦いの始まり。

「目的は人類史の保護、奪還。

搜索対象は各年代と、原因の聖杯。

我々が戦うべき相手は歴史そのもの。

君たちの前に立ちはだかるのは伝説そのものだ」

それでも、俺たちは未来を得るために、
戦い、抗い続けるのだ。

「それは挑戦であり、伝説への冒険だ。

だが、それでも未来を取り戻すために戦う」

たとえ、その先が

どれだけ暗く危険な道だとしても。

「以上の決意を以て、

作戦名はファーストオーダーから改める」

俺たちは未来を、取り戻すために

過去へ赴き、伝説を相手にする。

「人理守護指定、

グランド・オーダー
G・O。

魔術世界における最高位の使命を以て、

我々は未来を取り戻す!!」

これは、未来を取り戻すための戦い。

その名も——F a t e / G r a n d O r d e r

特異点F終了後 幕間の物語
幕間「橘 真機という男」

「と、言うわけだ」

「人理修復ですか。」

「また凄いことになりましたね……」

それから休暇が与えられた俺は、
部屋に戻って沖田に説明をする。

「で、一緒に来てくれるか？」

「はっ？」

「はっ？」 じゃなくて。

俺、沖田さんが来てくれないと

別のサーヴァントを召喚しないとイケないわけで。

「何を言ってるんですか、マスター。」

「私も行くに決まってるじゃないですか」

「そ、そうか。なら良いんだが……」

沖田は現在、着物ではなく青い羽織。

無くしていたらしい。

どっから見つけたんだろうか。

と、俺は忘れそうになっていたことを思い出す。

「ああ、渡しておくものがあるんだよ」

「何かくれるんですか？」

「大したものじゃないが………」

俺は首にかかっている首飾りを外し、
それにかかっていた指輪を沖田に渡す。

「ほれ」

「これは……指輪、ですか？」

「これから一緒にやっていくんだからな。」

本当に大したものじゃないんだが、渡しておく」

指輪には漆黒の宝石がつけられており、

銀のリングは傷1つない。

「へえー、ありがとうございます」

「これからよろしく頼むよ」

それから少しすると、俺たちは食堂へ向かう。
やはり食事くらいは取っておかないと。
人間、腹が減る。

「む?」

「あつ?」「え?」

食堂でメニューを見ていると、
とある人物と目が合う。

……立香がサーヴァントを召喚していたと
言っていたが、まさか。

「よお、正義の代行者。おかしな縁だな」

「お前は確か……そうか……」

確かに不思議な縁もあるものだ」

「え、この人、確か特異点の!?!」

アーチャーである。

だが、特異点の彼とは違うだろう。

そのことを沖田に耳打ちする。

俺は彼と握手を交わす。

「まさかあんたが呼ばれたとはな」

「ああ、代行者改め、エミヤだ。

また、よろしく頼む」

「随分と吹っ切れた感じだな……」

こっちは沖田総司だ、よろしく」

「あ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

どうやら彼が料理をするらしい。

つか、コイツこんなだったっけ？

まあいつか。

「おーい！真機くん！」

「お、立香にマシユか。」

じゃあ、エミヤこれ頼む」

「ああ、では後で」

エミヤにケーキを2つ頼み、
俺と沖田は立香たちの元へ。
彼女らと向かい合って椅子に座る。

「何の話をしてたの？」

「メニューについて少し喋ってたんだ」

「何を頼んだんですか？」

「ケーキ。」

しまった、2人の分も頼めば良かったな」

沖田と自分の分だけ頼んでしまった。

しまったな……………

「大丈夫だよ、後で頼めばいいし」

「そうか、悪いな」

「けえき、って何ですか？」

「あ、沖田さんは知らないんですよね。」

西洋のお菓子です。とても美味しいんですよ」

「お菓子ですか！」

私、甘いもの大好きなんですよ！」

そんなこんなで、

それぞれの好みなどを聞き合うことに。

しばらく喋ると、当然話題は俺のことになる。

「ねえねえ、真機くんは好きなものとかある？」

「俺か？俺は……………そうだなあ、

好きな物……………本と、銃器とかだな」

「うわお、落ち着いてんのか物騒なのか」

んー、でも仕事の関係だからな、銃器関係は。どうしても弄らないといけない。

「あはは……真機先輩は

どんな本がお好きなんですか？」

「んー、そうだな。

推理、ファンタジー、歴史ものも好きだな」

「そう言えばさ、真機くん。

お仕事してるって言ってたけど幾つなの？」

「……………まあ、当然これも聞かれるわけで。

「17だな、立香は16だったか？」

「うん。あれ、敬語の方がいい？」

「いや、そのままでもいいよ」

「それじゃ、このままで。」

「お仕事は何をしてたの？」

「……………まあいいか。

これから共に旅をする仲間だ。

「……………秘密は少ない方がいいよな。

「こんなことになったから言うことにするよ」

「……………？」

「物騒な仕事してそうですよねマスター。」

「それこそ新撰組みたいな」

「実際、新撰組より物騒だな」

「ええ……………どんな仕事をしてたんですか？」

「うん。俺は間を開ける。」

「…………殺し屋、って言えば分かるか？」

空気が凍りつく。

それはまあ、仕方ないことで。

「え…………あ、あの…………」

「安心してくれ、俺はもう辞めた身だ」

「こ、殺し屋って…………どういうことですか」

「言葉通りだ。ウチの家系が暗殺者の家系でな。

紛争に駆り出され、魔術師暗殺に出されたり。

元々魔術教会に身をおいていたんだけどな、

封印指定…………ホルマリン漬け判定を受けてな」

そうやって路頭に迷っていたところを

レフの奴にスカウトされた、というわけだ。

「妙に強かったですし…………」

なるほど、そう言うことでしたか」

「俺の火器魔術もウチの家系の産物さ。」

銃器の扱いもな。戦闘慣れもそれだ」

「……………」

「言い訳になるが、

罪のない人を殺したことはなくて

「なら別に良いんじゃない？」は？」

「せ、先輩？」

立香が俺の言葉を遮る。

「別にさ、そうやらないと

生きていけないような境遇だったんでしょ？」

「……………まあ、そうだな」

「でも、今は私たちの仲間だよ。」

悪い人じゃないってことは分かってるし」

「俺がお前たちを殺そうと」

狙ってないとも限らないだろ？」

「それはないよ。そうだとしたら」

あの時、私たちがなんで助けたの？」

あの時……カルデアが火に包まれ、

立香がマシユを助けようとした時か。

確かに、あの瓦礫を破壊するため

立香たちを爆風から守ったんだっただか。

「それに、私たちと一緒に

これから戦ってくれるんでしょ？」

「……………そうだな。ああ、そうだ。」

未来を取り戻すために、俺に力をかしてくれ」

「それはこちらのセリフです。」

私たちに力を貸してください。

共に人類史を修復し、未来を取り戻しましょう」

2人と握手を交わす。

ああ……………

仲間って言うのは、存外嬉しいものだ。

これから、俺はこの4人と様々な苦楽を共にする。

これはその、絆を深める第一歩だった。

幕間「設定」

名前：橘 真機

年齢：17 性別：男

身長／体重：179cm／62kg

契約サーヴァント：沖田総司

属性：秩序・善（悪）

1、

2、

扱える魔術

・ 火器魔術

……… 本人が一番使う魔術。

5個まで使ったことのある火器を一時的にコピーし生み出す。投影と似て非なる魔術。

「image make up」の詠唱で発動する。

・ 時間操作

……… 橘家が魔術師として研究していた魔術。

周囲に薄い結界を張り、時間を操作する。

衛宮切嗣のものと似ており、肉体に負荷がかかるところは同じだが橘家の場合は体が

動かなくなるほどの疲労が一度の使用で蓄積。

詠唱は「χρ^ッορ^ロο^ノ⊠^ス・br^ブea^{レイ}k^ク」

その後が続く詠唱で速度が決まる。

- ・魔力放出
- ……：魔力を急速に放出し、速度を上げる。
- 物理攻撃の際に使用し、ジェット噴射で一撃の速度と威力を上げる。
- 制御できておらず、たまに暴発する。

- ・固有結界「真を映す水面」まこと みなも
- ……：対影アーチャー戦で使用した固有結界。魔術協会所属時に開発した対魔術固有結界。水面に映した者の存在を高め、あらゆる能力を飛躍的に上昇する。
- 映されない者は様々な制約を課せられる

(例) 魔術↓使用不可 幻想種↓マナに還元
英霊↓2段階パラメータのランクダウン
というチート結界。

対象数によって魔力の消費が増減する。
映し出すのは対象の本質。

サーヴァントではなく、英霊そのものが映る。
(マシユを映す↓ギアラハッドとマシユが映る
バニヤンなどの伝承の鯖↓姿は変わらず映る)
類似しているものに弓塚さつきの
「固有結界・枯渴庭園」があるが、
特に関係はない。

プロフィール、設定など

- ・この作品の主人公。
- ・グレーの髪に黒い瞳。

バサバサの髪でセットはしない。
寝癖かけっぱなし。

・性格は冷静。怒ると怖いタイプ。

仲間には優しく、敵には冷酷。

仲間への敵か味方か、それで人が変わる。

・魔術の属性は火と水の二重属性。だが

自ら開発した火器魔術を使っているため

無に属する「機」となっている。

彼自身の魔術回路の本数は36本。

・得意なことは火器の扱い。剣も少し扱える。

好きなことは武器の改造、読書、甘いもの、

そしてトランプ等のカードゲーム。

・苦手なものは辛いものと蜘蛛。

両方がトラウマになっている。

・特異点Fで沖田総司を召喚した。仲は良好。

・令呪の形は手の甲の中央に向かって

3本の線が渦巻く形。

・カルデアに来る前は暗殺魔術師が職だった。

仕事は選んだので罪のない人間は殺していない。

父親側が暗殺魔術師の家系で、

5歳で初の暗殺を行い、人の死に慣れる。

・生まれは日本ではなくアメリカ。

父親は不明、母親は日本人。

英語、日本語の両方を喋ることが可能。

・感情失陥者であり、自分と仲間以外の命を

何とも思っていないが、

情が移りやすいため気づかれにくい。

・人類を救うのは立香、マシユ、ロマンが

望んだからであり、実際は他人の死を

特に意識しないサイコパス。

・扱う銃器（例）

小銃

AR-10

狙撃銃

モシン・ナガンM1891/30

ショットガン

ミロク・サイドプレート(改造済み)

回転式拳銃

エンフィールドNo.2 Mk. I (改造済み)

・立香、マシユに暗殺者の過去を話す。

ロマン、ダ・ヴィンチにも話した。

・沖田に仲間、異性として好意を抱く。

未だに気づいていないが、

ロマンに揶揄われて赤くなるなどはしている。

・立香、マシユとの仲も良好。

友達感覚で共にトランプなどもする。

・エミヤとの面識があり、彼が英霊になる前の

抑止力と契約して間もない頃に一度会っている。

暗殺者として行動していた時に、対象の殺害が

目的として一致したために協力している。

・親に仕込まれたのは銃器の扱い、魔術、体術。

体術は某“愉悦神父”と同格。

完全にアサシンですねありますが(ry

剣術は自前で完全に我流。

・辛いものが苦手。激辛麻婆豆腐など以ての他。

日本に来た時にとある人物に進められ、

偶然食べており、死にかけている。愉☆悦。

・全てのカルデアスタッフ、

マスターたちに挨拶の際に会っているので

Aチームとの面識もある。

・サーヴァントは沖田のみ。

というか、沖田総司しか召喚できないので

これ以上の召喚は縁が強い触媒がないと不可能。

- ・サイコパスの本性を持っているため、沖田さん同様戦闘では冷酷無慈悲。希に暴走し殺戮モードへ移行する模様。騎士道くそ食らえ。
- ・某鬼畜マゾゲーの狩人主人公よろしく盾など自身を守るものを持たない戦闘スタイル。対人戦では、通常は銃、殺戮モードで右手ナイフ、左手で銃を使用する。

- ・第一特異点ではジャンヌオルタの『復讐』に共感を示す。

聖女ジャンヌ・ダルクより

ジャンヌオルタの方が人間らしいと感じている。

- ・かなりの甘党。
- 好物はみたらし団子、羊羹ようかんなど。
- ・一応右手もそこそこ使えるが、左利き。邪ンヌに左肩を貫かれた時、実はかなり焦っていた。

- ・ジャンヌオルタに行つたのは魂喰い。自己改造スキルに類似した魔術、自己破改魔術を行使して魔術回路を吸収、彼女の宝具を使用可能になっていた。
- ・自己破改魔術は秘匿とされる橘家の負の遺産。殺した相手から全てを奪う、という目的で橘家で秘密裏に開発されていたもの。
- 近代の真機が完全に完成させ、利用している。
- ・自己破改魔術は自身の身体を破壊、そこに魂喰いを通して無理矢理に魔術刻印、魔術回路を移植するというもの。彼の魔術回路なのは本人のもの

そうでないものがあり、見えてこそいないが
全身に魔術刻印がビッシリと刻んである。

・無論、自身を破壊するので自我が薄れていく。
魔力は変質し、その性質は歪んでゆく。

歪みきった先にあるのは、死か、

それとも、獣に堕ちるか、その2つである。

・第2特異点の時点で、魔術回路の数は
奪ったものを含め500を越えている。

魔術刻印も100以上を刻み、不安定な状態。

第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン
第1話「第一の特異点」

「フオーウ!!」

「おぶっ!」

休暇が終わった朝。

ドアがノックされ、返事をして中に入ってもらおう。その瞬間にドアの隙間から白い生き物が飛び出し、ドアへ向かっていた俺の顔に張り付く。

「マスター!」

「えっ、フオーウさん何を!」

「フオーウくん、どしたの!」

「フオーウフオーウ!フオーウ!!」

「ああああ!離れろおお!!」

顔に張り付くのはフオーウだ。

視界が真っ白でしかもゴワゴワするからやめて。

声からして沖田、それと立香とマシユがいる。

「はーなーれーろおお!」

「フオーウ……………」

「だ、大丈夫?」

し、死ぬかと思った。これ窒息死するから。

なんとかフオーウを引き剥がし、

両手で動けなくする。

「なんとかか……………」

「フオウさん、一体どうしたんですか？」

「フオウフオウ！」

「なんだったんだ一体……………」

で、3人揃ってどうしたんだ？」

まあ何となく分かってるが。

遂にこの日が来たわけだ。

「マスター、特異点に行くための

事前会議の時間です。さあ、行きましょう！」

「おはよう、4人とも。

早速だけどブリーフィングを始めようか」

管制室で待っていたのはドクターだ。

俺たちはそれぞれ話を聞く。

簡単に纏めると、

俺たちの目的は、特異点の調査・修正、

そして、聖杯の調査。

聖杯、というのは、願いを叶える願望器だ。

冬木の以外は見たことはない。

それと、特異点についてからは
霊脈地への召喚サークルの設置。

「と、いうわけ。」

待ちきれなくて説明変わっちゃった♪」

「ダ・ヴィンチか、おはよう」

「おはよう、ダ・ヴィンチちゃん」

「おはようございます」

いつの間にかダ・ヴィンチが説明を

変わっており、ドクターがため息をつく。

ちなみにコイツ、現在は女である。

とやかく言っではいけない。

「まあ……それじゃ、ブリーフィングは終わりだ。

レイシフトの準備をするが、いいかい？」

「はい」

「よし、それじゃコフィンに入ってくれ。」

レイシフトは安全、迅速に出来る筈だ」

俺たちはコフィンに入る。

沖田はあっちの召喚サークルから

召喚せねばならないので待機だ。

早く、一刻でも早くサークルを設置しよう。

「では、検討を祈るよ」

コフィン内で目を閉じる。

アナウンスが流れ始める。

『アンサモンプログラム スタート

『靈子変換を開始　します』

意識が遠退く感覚を味わう。

『レイシフト開始まで　あと3、2、1……………』

拳を握る。

『全工程　完了』

グランドオーダー　実証を　開始　します』

意識が完全に闇に落ちる。

これは、炎に飲まれた聖女の物語。

聖女は死する時、二律背反に苛まれる。

白と黒の2人の聖女は引かれ合う。

たとえば白の贗作であろうと、その思いは――

第2話 「百年戦争の地」

意識を覚醒させ、瞼を開ける。
明るい場所に目を慣らすため、手で目を覆う。

「……………()は……………」

どうやら草原の上にあつ立つていたようだ。
俺は体に力が入ることを確認し、
周囲が静かすぎることに気づく。

「……………えっ」

……………ハードモードですか、ドクター。
特異点を一人で攻略しろと？

立香と、マシユの姿がなかった。

俺は嫌な予感を感じ、
通信機でドクターへ連絡を取るが……………

「……………ダメだ、通信がきかねえ」

通信機で映るのは砂嵐。
ダメだ、繋がってはいるんだろうが、
粗すぎて声も姿もダメだ。
俺にどうしろと。
俺は空を仰ぎ……………それを見つけた。

「……………なんじゃ、ありやあ」

それは、さも当たり前のように浮かんでいた。
光の輪……………か？

とんでもない大きさだな……………

「……………しっかし、どうするかねえ」

ここがどこかも分からない。

バカ広い上に、何があるかも分からない。

立香たちを探そうにも、どこにいるか分からない。
ないない尽くしでどうしろと。マジで。

「……………まず、周囲を確認するか」

俺は近くの丘に上り、ポケットに入れていた

折り畳み式の小型双眼鏡を取り出す。

所々に建物が見える。

どこか、人のいる場所に行こう。

双眼鏡を覗き、建物を確認していくが……………

「廃墟ばっかじゃねえか、何があったんだ……………？」

何かに破壊されたような廃墟ばかりだ。

他は、大きな城、町、森、砦。

……………中世だ。

おそらく、フランスあたりか？

ヨーロッパであることは確定だな、これは。

砦や城があった時代、中世のヨーロッパ……………

「……………百年戦争の時代、か？」

かのジャンヌ・ダルクが有名になった時代。
フランス中北部のことをオルレアンと呼ぶが、
まさかそこだろうか。

「戦争に巻き込まれんのかよ……………」

イングランド軍との戦争など、ゴメンなのだが。
何が嬉しくて戦争なんか……………暗殺させろ、暗殺。
王様ぶっ殺してやろうか。

「いや、ダメか。」

「特異点を更におかしくするだけだな」

と、その時だった。

何か、翼の音が聞こえた。

鳥…………いや、鳥にしてはデカすぎる。

俺は双眼鏡をしまい、上を見る。

「はあっ!？」

俺が目にしたのは、飛竜……………

この世界にいるはずのない、

ワイバーンと呼ばれる幻想種だった。

ワイバーンは群れる筈だが、コイツは一匹。
黒い。おそらく群れの強个体か。

「G y a a a a a a!!」

「チツ、殺るしかないか!!」

俺は背中からライフル銃を抜き、安全装置を外す。

黒ワイバーンの空からの爪の振り下ろしを転がって回避し、マガジンをセットする。

「G y a a a a !!」

「食らえオラア!!」

膝立ちで銃を飛竜に撃ち込む。

改造は銃弾にもしてあるので、

竜の鱗くらいなら貫ける。

「G y a o o o o o ! ?」

「……………致命傷にはならないがな」

ワイバーンが翼を羽ばたかせ、

風の刃が凄まじいスピードで飛来する。

俺も人間、一撃を食らえば

死にはしないだろうが、動けなくなる。

なんとか横飛びで避け、

俺は仕方なく魔力を使う。

出来るだけ消費を抑えるため、

持ち出すものは2つ。

「現代兵器の力、手始めにお前に教えてやるよ」

俺はR P G ー7……………

所謂口ケツトランチャーを肩に乗せ、構える。

本能か、危険を察知したのか知らんが

飛竜が襲いかかってくる。

だが、遅い。

「消し飛べ、トカゲ」

凄まじい爆風が、黒い飛竜を焼き焦がした。

第3話 「竜殺し」

「……………取り敢えず、旨いなこれ」

見事にワイバーンを丸焦げにした俺は、
まずは食料を得るためにしたこと。

それは、ワイバーンを血抜きして捌くことだった。
鱗の下の肉は筋肉がいい具合に引き締まっており、
とても美味しい鶏肉のような感じだ。

ウマすぎる!!

「カロリーは高そうだが、滅茶苦茶旨いな。

干し肉でも作っておきたいな。これ」

暗殺者として行動していた頃は

レーション（不味い）、兵糧丸（味無し）だったりと
味気ないものばかりだったので普通の食事が
とても幸せだ。

ソースをかけてステーキとかどうだろうか。
とても美味しいだろう。うん。

「ヤバいな、これ。癖になりそうだ」

とっても美味しかった。

また食べたいな。

俺はワイバーンの4分の1を食べてしまった。

まあ朝飯前だったからな。

朝から飛竜の丸焼きだったが、

胃もたれしないだろうか。

正露丸でも持ってくれば良かったかもな。

まあ、ともかく。
俺は残ったワイバーンをそのまま放置し、
人が多い町の方へ行くことにしたのだった。

少し歩くと、町が見えてくる。
町までたどり着き、町の様子を見てみると、
どことなく沈んでいるようだ。
というか、何かに怯えているような………？
ヒトは死ぬ直前に出す匂いがある。
何度も殺してわかることだが、
その匂いが充満しているような感じだ。

「血の匂いもするな………」

やはり戦争だろうか？
さっきのワイバーンのような生物兵器を
利用した戦争になっているとか、
じゃないといいんだけど。
取り敢えず、人に話を聞いてみることに。
近くにいた兵士に話しかける。

「なあ、少しいいか？」

「ん、どうした？」

食事の配給なら既に終わっているぞ」

「いや、俺はあちこち旅をしてるんだが、

この国で、一体何が起こってるんだ？」

「た、旅だど!? よく生きていられるな……………」

教えよう、あの、竜の魔女についてな」

竜の魔女、とは何だ？

——ジャンヌ・ダルクは知ってるだろう？

奴は火刑に処されて死んだ……………」

だが、蘇ったんだ、彼女は。

飛竜を連れてな。

蘇った……………？そんなことがあり得るのか？

——さあな、俺だって信じたくない。

全く、悪夢を見てる気分だ……………」

……………軍はどうした？

——砦を作って交戦中だ。

飛竜以外にも、恐ろしく強い連中まで

いやがるんだ。

それこそ、砦を一人で落とすほどのな。

……………シャルル王は？

——殺されたよ、その魔女にな。

俺が知ってるのはこのくらいだ。

「そうか、ありがとな」

「ああ、あんたも気を付けろよ。

このご時世、生きてられるだけ強運だ」

「おう、じゃあな」

……………竜の魔女、ね。

ジャンヌ・ダルクが火刑によって怒り心頭、
激おこぷんぷん丸状態。

で、国を滅ぼしにかかっているってわけか。
ん？

何か妙な格好の男を見つける。

大きな剣を背に、灰色の長髪と胸と

背が大きく開いた鎧を着ている。

明らかに……普通の人間ではないな。

「……………何かな？」

先ほどから、こちらを見ているようだが」

「ん、ああ、悪い。珍しい格好だと思っただけ」

「……………それはお互い様ではないか？」

あ、そうか。

俺は今魔術師としての魔術礼装を着ている。

確かに今の時代とは不釣り合いだ。

だが、もしかすると彼は……………

「……………サーヴァント、だよな？」

「どうやら異邦人のようだな、君は」

この世界に召喚されたサーヴァント、セイバー。

彼の名は、ジークフリート。

ニーベルンゲンの歌の竜殺しは、

俺と握手を交わした。

第4話 「オペラ座の怪人」

俺はジークフリートと名乗った
サーヴァントと、町の門近くで話をする。
特異点、カルデアについてなど。

「なるほど、飛竜……」

確かに竜殺しは俺の得意分野だ」

「そうか、頼りになりそうだ。

よろしく頼む、ジークフリート」

「ああ、微力ながら助力させてもらおう」

彼の力があれば、飛竜程度なら問題なからう。
早く沖田たちと会いたいもんだが。

……………ん？

「……………おいおい、まさか…………」

「急げ、ここは俺に任せて

お前は町の人々の避難を頼む」

「……………大丈夫なのか？」

俺たちの目線の先には、

飛竜の大群がやって来ていた。

30程の飛竜が大量に飛んできているが……………

「問題ない、行ってくれ」

「わかった、避難が終わったら俺も手伝おう。

伊達に魔術師やってないからな」

俺は町へ行き、人々の避難を開始する。

戦えるものを中心に、纏まって他の場所へ向かってもらおうように伝える。
俺が避難を終えようとした、その時だった。
鮮血が、舞った。

「……………ああ、何とも美しい。」

——そして、悲しい」

「！っ、全員、そいつから離れろ!!」

悲鳴が飛び交い、俺は人混みを押し退けてそれと対峙する。

それは、怪人と呼ぶにふさわしい男。
仮面をつけ、その手は禍々しい爪が。

「……………全員、死にたくないなら逃げろ」

俺のその言葉で、人々は逃げ出す。
纏まって逃げたのは良かった。
俺は邪魔な死体を足で横へ蹴飛ばす。

「狂っていないというのに、狂っている……………」

狂気に震える者よ……………名を名乗るといい……………」

「……………橘 真機。」

意味のない人殺しは趣味じゃなくてね、
アンタは現行犯だ。楽にしてろ、すぐ死ぬ」

怪人を前に、俺は銃を構える。

怪人は血に濡れた爪を胸の前で交差し、
こちらへ素早く迫ってくる。

「ハハハ、私を殺せるか？」

「死なない奴なんていねえよ」

迫ってくる怪人が右の爪を振り上げる。
俺は言い放ち、左の爪を蹴り飛ばし、
右の振り下ろされた爪へ銃を撃ち放つ。

「し——ッ！」

「ぬ!？」

狙いを外し、隙が出来る。

俺は拳をがら空きの腹へ叩き込む。が。

「っ!？」

「心は読めぬ……………」

「づッ！」

背中を恐ろしく屈曲させ回避した怪人は
巨大な爪で薙ぐ。

腹が抉れる感覚が走り、血が噴き出す。

不味い……………!!

銃を連射して、相手に距離を取らせる。

「ぐ……………柔らけえ体だな……………」

「ハハハッ、読みが甘い……………」

もつとだ、もつと踊れよ……………」

おそろく、あの素早い動き、アサシンだろう。

厄介な……………!

「どうした暗殺者、

私はこうも昂っているというのに……………!」

「つせえな……………なら見せてやるよ……………!!」

俺は腰から抜いたナイフを右逆手に
左手に銃を構える。

集中しろ、目の前の命、目の前の獲物に。
余計な思考を払い飛ばし、頭を空っぽに。
目の前の獲物を殺す。

「ふ———!」

血に、酔いしれるように。

俺は口端から流れ出した血を舐めとる。

「フッフフ、そうだ、それでいい……………」

お前も、我らと同じだろう……………?」

「……………殺す」

必要な言葉だけを吐き、息を吸いながら
低姿勢で獲物へ迫る。

獲物の爪を撃ち、弾く。

ナイフでもう片方を受け止め、足払いをかける。

「ぬう!?!」

「……………」

体勢を崩した獲物の腰を蹴り上げ、

上がってきた胸に向けて銃弾を撃ち込む。

「(い)が……………ッ!?!」

「χροροο×・break、Andant」

魔術を詠唱し、時間を遅延する。
ナイフを構え、斜め十字に一闪、
血に濡れて舞い踊るように、乱雑に。
獲物を切り刻む。

それは、俺からしても一秒にも満たないもの。

「χρονο☒・break、a tempo」
「ふ、か、は——ッ!？」

獲物の命脈を断つ。
ナイフの血を払って、終わらせる。

第5話 「合流して、また分断」

ファントム・オブ・ジ・オペラ
オペラ座の怪人を

倒した俺は我に返り、その瞬間に崩れ落ちる。
なんとか膝立ちになり、地面に右手をつく。

……………なんとか倒したようだ。

しかし、あの魔術を使ってしまったか。

自分であるのに制御できなくなったあの感じ……………

体が目の前の命を奪うまで

勝手に動くあの感じは……………どうにも、苦手だ。

「っ!?!うっそだろ……………!?!」

町の中にワイバーンの声が響き渡る。

ジークフリート1人では倒しきれなかったか……………!?!

町の空をワイバーンたちが飛び回る。

不味い……………!

体が動かない今は……………!

血が腹から流れ出し、頭がぼうつとしてくる。

空から俺を見つけた

ワイバーンが爪を振り上げ——

「せああッ!!」

鮮血が舞い飛び、飛竜が俺の横に墜落する。
そして、飛竜を落とした彼女は
その上に乗る背に突き刺した刀を抜く。

「ご無事ですか、マスター!」

「——ああ、ナイスタイミングだ。沖田」

沖田だった。

全く、危ないところだ。

もう既に腹の出血がヤバいんだけども。
俺は出血を隠し、沖田の手を取って立ち上がる。

「すみません、遅くなりました」

「いや、助かった。危なかったよ」

「真機先輩!見つけました、先輩!!」

「あっ!良かった無事!」

マシユと立香も走り寄ってくる。

良かった、みんな無事なようだ。

「みんな、町の入口で味方のサーヴァントが

戦ってるんだ。俺たちも加勢しに行こう」

「うん、町の人はジャンヌが助けてるから、

今はそのサーヴァントを助けに行こう!」

「……………心機先輩?

お腹、どうかしたんですか?」

「……………なんでもな

「マスター、失礼します!」うっ!」

沖田が俺の押さえている手を取る。
しまっ——!?

「うわっ!? 大怪我じゃないですか!?

「出血が酷い……………! 真機先輩は

休んでいて下さい、これは酷すぎます!」

「いやだが「ダメ、寝てて」……………分かったよ」

3人とも睨まなくてもいいじゃないか。

……………だが、確かにヤバいかもな……………

頭に血が回っていない、ぼうつとしてくる……………

「……………」

意識が暗転する。

何か……………声が、聞こえたような気がした。

「……………?」

意識がゆっくりと戻ってくる。

瞼を開け、思考を纏める。

「ここ、は——」

「あら、やっと起きたようですね」

「誰だ………?」

俺は起き上がる。

ここは——マジか、牢屋………!!

牢の格子の向こうから話かけられているのか。

「ごきげんよう、気分はいかが?」

「………暖かいベッドが欲しいな」

「ふふ、そんなものは勿論ありません」

格子の向こうで俺を嘲笑うのは

白髪の金の瞳の女だ。

………ポンコツの気配がする。

気のせいだろうか、カリスマを全く感じない。

「………なんだか失礼なことを思われた気がするわ」

「気のせいだろ」

さて………どうしたもんか。

第6話「黒ノ聖女」

手足に枷がつけられているので動けない。
なので彼女とお喋りすることに。

「……………まあいいわ」

「状況を教えてくれると助かるんだけど」

「そうね、教えて上げるわ」

……………教えてくれんの？

敵に甘くない？敵……………だよな？

「私たちが町を襲いに

行った時の戦利品よ、あなたは」

「さいですか」

バリバリ中世だなあ、考え方が。

戦争に勝った戦利品に女を国が持ち帰る、
なんてことはよく聞く。

「ただ……………あの竜殺しが厄介ね。ですが

ファヴニールとぶつけるのが定石ですか……………」

「……………ジークフリートの天敵は

ファヴニールだからそれでいいと思うぞ」

「そうなの？」

ならばそれでいいでしょう、フフフ……………

真名まで教えてくれるなんて、甘いわねえ？」

甘いのはそっちは……………？

しかし、この女かなりチョロいな。
サーヴァントは元に伝承や神話に影響を
大きく受けるのだ。
ジークフリートとファヴニールなら
互いに弱点になりえるが、結果的には
ジークフリートが勝利するのが確定する。
嘘は言っていないからなあ？（ゲス顔）
ポンコツの気配は確かだったな。

「そうね、良い情報が貰えたわ。

あなたは生かしておいてあげる」

「出してくれると嬉しい」

「出すわけがないでしょう？」

「ゲスヨネー」

魔術は使えそうだ。

なんとか出られないものか。

せっかく会えたカルデア組とまた別れるとか、
寂しさがどんどん増しているんだが、

……こいつは敵だよな？

何が目的なのか聞き出すか……

「お前の目的は何だ？

何をしようとしてるんだ、お前は」

「当然、この国を滅ぼすことよ。

私を否定したこの国を、私は否定するの。
だってそうでしょう？

——これは、復讐なのだから」

彼女は凶悪に笑う。

嬉しそうに、憎しみが溢れる顔で笑う。

……なるほど、聖女は確かに火刑にかけられた。
これは火刑にかけられた後の聖女、
……ジャンヌ・ダルクか。

「確かに……お前は国のために尽くしたつてのに、
それでフランスに見捨てられたんだったな」

「よく知ってるじゃない。」

「私を裏切った国を私が裏切るのは——」
「当然、ってことか」

確か……彼女が宗教裁判をかけられた時、
彼女が聞いたという神の声、戦争の男装など、
やってきた全てを否定されたんだったか。
しかも、確か彼女が文字を読めないことを
利用してデタラメな宣誓書にサインをさせ、
しかも彼女を灰にした後川に流すという
完全に外道なことをした国だ。

「あー、そりゃ復讐もするわな。」

「……報われなさすぎだろ、お前」

「同情かしら？」

彼女はこちらを睨みつける。

同情、とは違うんだが。

「違うな、お前の恨みが」

どこまで深いかなんて、俺は知らねえ」

「……それはそれでイラつくわね」

「だけどな、報われないのは別だ。」

お前は誰よりも忠を尽くした、

なのに裏切られた……死んでも死にきれねえよ」

彼女の気持ちなど理解してはいけない。
本当に彼女がどれほど苦痛だったのか、
俺は知らないから。

彼女に理解を示すのは、彼女への侮辱だ。
だが。

「それだったら、殺してよくね？」

虐殺するのも別にいいと思うんだわ、俺」

「……………」

「魔女だとか聖女だとか言われてるけどさ。」

その前に、お前は1人の人間で、少女だろ？」

復讐に走るのは当然だ。

むしろ、復讐しないのは本当に狂っている奴だ。
人間ではなく、聖女という狂った生物だろう。

ここにいるジャンヌ・ダルクは、

一番の人間らしいと俺は思っている。

俺の言葉に、彼女は目を見開いて固まっている。

……………しまった、我を忘れたか。

少し話に熱が入ったな……………悪い癖だ。

暗殺者時代から全く治らんな。

「……………」

「……………喋りすぎたわね。少し席を外しましょう」

彼女は顔を隠すように、そっぽを向く。
そして黙って牢屋部屋から出ていった。

「はあ………どうしてたもんか」

出られないのは変わりなし。

どうにか脱出して沖田たちと合流したいな………

第7話 「聖女マルタ」

……………暇だ。

あれから結構な時間がたったが暇で仕方ない。
腕と足は枷に繋がれており、動かせない。
どうしたものか。

「捕まったことはなかったしな……………ん？」

カツン、カツン、と足音が聞こえてくる。

あの黒いジャンヌだろうか。

顔を少し動かすと、

違う誰かだと言っていることが分かる。

「……………何だ？」

「……………はあ、もののついで、です。

あなたをここから脱出させに来ました」

「マジで!？」

「こら、大きい声出さない！」

聞こえたら大変なんだか、なんですから！」

やって来たのは紫色の髪をした女だ。

白い修道服、そして腕の籠手をつけている。

彼女は鍵を開け、俺の腕と足の枷を外す。

「ふー、助かった。ありがとな」

「全く……………危機感がないですね」

「悪い悪い、んじゃアイツらと

合流しないと。出してくれて感謝するよ」

「私も行かせてもらいます、行きますよ」

彼女はマルタ、と名乗った。

マルタ……確か、1世紀の聖女の英霊だったか。確か竜、タラスクの退治話が有名だった筈だ。

俺はマルタと共に城から脱出する。

ここ城だったのか……てことは、オルレアンか。

「ここまで来れば大丈夫ですね」

「おう、助かった。」

つーか、あそこにいたってことは

お前、あの黒いジャンヌの手先じゃねえのか？」

「召喚したのはアイツだけどね、

聖女に虐殺させないでほしいわ」

やはりだったか、しかし、

サーヴァントはマスターの使い魔という

考えだったのだが、違うようだ。

逆らったりすんだな。

「ふーん、アイツの虐殺の

理由には納得したけどな……」

「ん、あんたアイツと話したの？」

「ちよつとな、あ、そうだ」

俺は通信機を思いだし、

ドクターに連絡をかける。

どうやら今回は通信が安定したようで、ドクターがホログラフで映し出される。

「おっ、繋がった」

「なにこれ？」

『うおっ!? やつと繋がったか! 大丈夫かい!』

立香ちゃん達から拐われたって聞いたけど!』

「その聖女マルタの協力のお陰で脱出出来た、

立香たちにも通信送つといて下さい」

『ああ、彼女たちも心配してる。』

特に沖田さんがね。送っておくよ』

「魔術による通信?」

かなり精巧にできてるわね……………」

ドクターが立香たちに連絡を送ってくれる。

マルタは通信機をまじまじと見ている。

「ドクター、今から立香たちの所へ向かいます。

立香たちはどこにいるか分かりますか?」

『今は近くの森にいるようだね。立香ちゃんたち

とも連絡が取れるようにしとかないとなあ……………』

「ああ、まさかいきなり

分断されるとは思わなかったですよ」

『あー……………それについては済まなかった。』

モニターは出来てただけだね、

どうやら誤作動だったみたいなんだ』

なんでも、誤作動で座標にズレが出たのだとか。

今度からは沖田も一緒にレイシフト

出来るようにしといてくれるらしい。良かった。

そして、ドクターとの連絡が切れる。

「……………そうね、言い忘れてたことがあるわ」

「ん?」

マルタが俺を呼び止める。

その顔は、なにか、決意をしたような顔で。

「私たち、あの黒いジャンヌに召喚された

サーヴァントは狂化、という

スキルを付与されているのよ」

「……………ん」

「それで、あなたに頼みがあるわ。

あなたがアイツと話して焼かれない

言葉を言ったのなら。

——あなたなら分かる筈よ」

「……………了解、お望みとあらば」

俺は、腰からナイフを抜く。

彼女は震えもしない。高潔そのもの、か。

ならば、こちらも敬意を。

他人の死など別にどうでも良いが、

彼女には助けてもらった恩もある。

「痛みも苦しみも無い『死』を、提供しよう」

血すら流れぬ、美しい死を。

第8話「やっと再開」

「お、いたー!」

森を目指して歩いていると、

偶然なのか、出てきた一団を見つける。

えー、確認できるのが、

沖田、立香、マシユ、ジークフリート、

見知らぬ女が2人、男が1人。

「マアスターああああ!!」

「うおわっ!?!」

沖田が立香たちの所から消え、

一瞬で俺の目の前に移動、飛び付いてくる。

「会いたかったですよおおお」

「ははは、悪い悪い。拐われちゃった」

「良かったです……………」

立香たちもこちらへ駆け寄ってくる。

……………200〜300メートルはあるよな。

一体何をしたんだ沖田は。

「縮地です。やったら使えました」

「マジで?」

やったら出来たってどーゆーこと?

ともかく、皆と合流することが出来た。

「良かった、無事だったんだね」

「ご無事で何よりです、真機先輩」

「ああ、知らない人が3人ほど増えてるけど。」

2人とジークフリートも無事なようで良かった」

「あ、そうだね、知らないのか」

……………1人、すっごい見覚えあるんだけど。

イメチエンかな？

「……………え、な、何ですか？」

「敵のボスもアンタと同じ顔だったけど」

「あー、それは……………」

「取り敢えず、安全なところに行こうじゃないか。」

またワイバーンどもが寄ってきたらたまらない」

「そうね、まずはあの町に行きましょう？」

「うん、それじゃあ歩きながら話そうか」

「ああ、頼む」

俺たちは少し先にある町へ向かって歩いていく。

その途中で事情について聞いた。

まず、俺と違う場所にレイシフト。

何故かフォウくんまでいる。

次にジャンヌ・ダルクと合流。

……………うん。まあ、黒がいるなら白もいるだろう。

酷いセリフを吐いた気がするが、まあ、うん。

次に、黒ジャンヌに襲われた時に

アマデウス・モーツアルト、

マリー・アントワネットの2人と合流。

次に俺、ジークフリートと合流。

その時に2度目の襲撃に立ち会う。

ジャンヌの配下の1人、サンソンと交戦。その隙に気絶中の俺が拐われた、と。んで、その後にも色々あって、バーサーカー、ランスロットと交戦。セイバー、シュヴァリエ・デオンと交戦。アーチャー、アタランテと交戦。いずれも撃破したとか。

「うわお、お疲れさま」

「大変でしたね……………」

「真機先輩がいなくて戦闘もキツく、

沖田さんもやる気がでないとかで……………」

「……………悪かった」

「あつ、いえ！先輩を責めてる訳では……………！」

「ああ、これからは全力で援護させてもらうよ。

改めて、これからよろしく、みんな」

これからは戦闘で役に立てるよう、俺はみんなと握手を交わすのだった。

第9話 「VS 処刑人」

「ここが、刃物の町ティエールよ」

マリーがそう言い、

町へ着いた俺たちは門を抜ける。

と、その時。

「な、なんだ!? 炎!?」

「一体何が!？」

町の中央から炎が噴き上がる。

逃げ惑う人々は立香たちに任せ、

俺は沖田、ジークフリート、アマデウスと共に

町の中央へ向かう。

「く……………っ!」

「エリザベート、下がっていなさい!」

「ふん、大して面白くもない」

戦闘しているのは和服の少女と角のある少女、

そして黒いコートの大剣を持った男だ。

と、アマデウスが目を見開く。

「はあ!? またお前かよ!」

「ん? お前は……………マリーは何処だ?」

僕は彼女を再び処刑するためにここへ来たんだ」

空からワイバーンの鳴き声が聞こえる。

またコイツらか……………!

「なんだか厄介事のようにですね……………」

「ジークフリート、沖田、ワイバーンを頼む。

アマデウス、アイツ、誰か知ってるのか？」

「サンソンだ！」

一度ならず二度までも来やがったのか！」

サンソン……………」

処刑人、シャルルⅡアンリ・サンソンか！

俺はジークフリートと沖田にワイバーンを任せ、
戦闘している少女二人の前に立つ。

「シンキ、僕はサポート役だ。

きみは1人で戦えるのかい？」

「問題ない、2人を下がらせてくれ」

「ちよつと！アイツは私の獲物よ！」

「邪魔をしないで下さい！」

「だったら横で手伝え、コイツを倒すぞ」

2人を横目に、俺は短銃を左手に構える。

アマデウスもため息をついて指揮棒を手に取る。
対するサンソンも剣を構え、こちらへ駆け寄る。

「まずは邪魔な君からだッ!!」

「邪魔言うな!!」

振り下ろされる剣を横ステップで避け、
銃弾を近距離で撃ち放つ。

剣の腹で防御されるが、コートを掴んで
背負い投げの要領で投げ飛ばす。

更にそれを波打つような炎が追撃する。

「うっ!?!」

「この機に乗じて私たちも追撃させて頂きます。
もう動けるでしょう、エリザベート!」

「癩に障るけど、任せなさい!!」

エリザベートと呼ばれた少女が槍を
サンソンと打ち合わせる。

銃で適度に援護しながら、サンソンへ走り寄る。

「ちっ!子イヌ、交代よ!」

「誰が子イヌだ!!」

エリザベートが下がり俺と交代、

俺は腰のナイフで大剣を流し火花を散らす。

「ほら援護だ!食らえサンソン!」

アマデウスのエンチャントでもかかったのか、
俺の身体を青い光がつつむ。
がら空きの腹へ蹴りを放つ。

「ぐ、はあッ!?!」

「うおっ!?!」

俺でも驚くほどの威力となった蹴りは
サンソンを吹き飛ばし、建物にめり込ませる。

「……………なら、ここで1人でも終わりにする」

サンソンからおぞましい魔力を感じ、

俺は怯んでしまう。
誰かを殺す、という強い威圧感。

「宝具か……………！」

彼は処刑人だ。

おそらく命中させるのは1人の対人宝具。
誰に来る……………!?

「刑を執行する」

刑……………サンソンの逸話。

確か……………ギロチンか!!

ならば、処刑された人物がターゲット。

俺たちの中で真名が分かり、

なお処刑されたサーヴァントは……………いない!

だが、確か……………その配下が死刑になった奴がいる!

「っ!？」

「エリザベート……………!!」

エリザベートの上空にギロチンが出現し、

死刑執行台が現れる。

俺は彼女の方へいち早く走り出す。

間に合え……………!!

「死は明日・エスボワール
———!!!」

「させるか……………!!!」

処刑台を駆け上がり、
手を伸ばし、エリザベートの手を掴む。

足を横に、ブレーキをかける。
彼女を引き寄せる。
そして。

ギロチンが、切り落とした。

エリザベートの後ろ髪を。

「……………馬鹿、な……………!!?」

「終わりだ、処刑人。」

「死は希望なんかじゃねえんだよ」

俺は、エリザベートを抱き止めた右手から
左手に銃を持ち変える。

そして、撃つ。

銃弾が風を切り、サンソンの胸を撃ち抜いた。

「ぐあ……っ!!」

「じゃあな、死ね。」

偉大なる処刑人——!」

第10話 「揃い踏み」

急ブレーキをかけ、
不安定な体勢で銃を撃った反動で
背中から倒れる。

こう言うことを考えるのは良くないだろうが、
エリザベートを抱き抱えているので重い。

「ぐえっ！」

「大丈夫!？」

アマデウスたちが駆け寄ってくる。

何とか無事だ。エリザベートを離す。

「た、助かったわ、子イヌ」

「いや、無事なようで良かった。

なんとか隙を見せた奴も倒せたしな」

サンソンは俺が倒れると同時に消滅した。

……殺すのが仕事としては俺と同じ。

だが、彼の仕事には誇りがあったのだろうか。

……分らない。

——死はラモール・エスポワールへの希望なり、か。

誰とも知らぬ人の命に、それも罪人に、
希望を与える意味など、あるのだろうか。
そんな、” どうでもいい他人の命”に。

「……………」

「……………本当に大丈夫かい？」

「ん……………あ、ああ、何ともない。」

それよりも、沖田や立香たちを――」

そう言おうと思ったが、必要なさそうだった。起き上がると、沖田たちが集まって来ていた。どうやら丁度集まったようだ。

「良かった、真機くんも無事みたいだね」

「ああ、みんな無事……だよな？」

「はい、そのようです。」

あ、新しい仲間がいますよ」

沖田が誰かを連れてくる。

なんでも共にワイバーンを撃退したとか。

「ゲオルギウスと申します。」

私もあなた方にご協力させて頂きたい。

このまま国を見逃せませんので」

「願ってもない、よろしく頼む」

ゲオルギウス………確か、

ドラゴン退治で有名な聖人だ。

確かに彼なら対飛竜が楽になるだろう。

これからを考えると心強い仲間だ。

「私たちも協力するわ。」

子イヌに助けられた恩もあるし」

「私も協力しますわ。」

………ああ、少し、よろしいですか？」
「ん？」

清姫が俺を呼び、小指を差し出す。

……………指切り、か？
取り敢えず指を結ぶ。

「ゆーびきーりげーんまーん、
うそついたらはりせんぼんのーます……………」
「……………」

「はい、ますたあ、契約です♪」
「えっあつ、はい」

……………なぜだろう、背筋に悪寒が。
彼女と契約を交わして
良かったのだろうか、仮だが。

「それにしても、大分強力な戦力が揃ったな」
「そうだね、えーと……………」
私とアマデウスを抜かして……………」

立香が人数を確認する。
俺、沖田、マシユ、ジャンヌ、マリー、
ジークフリート、清姫、エリザベート、
ゲオルギウス。
9人。確かに、かなりの戦力だ。
サーヴァントとして、マスターとして、
二人もかなり助けになる。
……………フオウはともかく。
全員で11人。

これなら、オルレアンに攻め入るのも可能だ。

「立香、行けるよな？」

「うん、オルレアンに行つて、
あの黒いジャンヌを止めよう！」

決まりだ。
俺たちはオルレアンへ向かう。

第11話 「決戦前の夜」

オルレアンへ攻め込む前、
俺たちは城の前の森で夜を明かすことに。
妙に寝付けなく、寝袋から出る。

……清姫が俺の寝袋の中にいた。
一人用のに二人いるのだ、寝付けるか。
まあ、ともかく。

少し散歩でもしようと、日も昇らない森を歩く。

「……………ん」

「寝付けませんでしたか？」

「ジャンヌか。」

「清姫がなぜか寝袋の中にいたからだと思うけど」
「ふふ、そうでしたか」

森を出た所で岩に座り、城を眺めていたのは
ジャンヌ・ダルクだった。

敵地の目の前だ。

危険、ではあるが、おそらく此方の場所は
既にバレているのだろう。

それより、彼女に聞きたいことがある。

「少し聞きたいことがある、聞いても？」

「ええ、良いですよ。」

「貴方とはあまり話をしてませんでしたから」
「……………トラウマを刺激するようで悪いが、

ジャンヌ・ダルク……………あなたは、

火刑にかけられて、どう感じたんだ？」

それが、ずっと気になっていた。
黒いジャンヌと話をして、
白が……………本物が、どう思っているのか。
彼女は目を伏せる。

「……………」

「悪い……………言い方を変えよう。」

国を、恨みはしなかったのか？」

「……………分かりません。」

恨まなかった、いえ、おそらく私は——」

彼女は少し息を吐き、

オルレアンの城を見つめる。

「……………恨んだ、でしょうね。」

国に尽くして、それでも、

私は見捨てられたのですから」

「……………そうか。悪かった、こんな質問をして」

「いえ……………何故、と聞いても？」

「あそこで……………拐われた時に、

黒いジャンヌと話をしたんだ」

話をした内容を伝える。

彼女は黙って聞いていた。

「そう、でしたか」

「ああ、でも……………良かった。」

あなたが、聖女らしい人間で」

「私は、聖女などではありませんよ」

「ああ、だから、聖女らしい人間だ」

彼女は、確かに国を恨んだだろう。
だが。

それでも、彼女は国を赦した。

それが、国だと、戦争だと。

見切りをつけられたのが、彼女という存在^{ジャンヌ}。

国を赦せなかったのが、あの黒い存在^{ジャンヌ}だったのか。

「偉そうな言い方になるけど、

あなたは、あなたたちは在り方で悩んでる」

「……………的を、得ていますね。」

「おそらく、あちらの私もそうでしょうね」

「ああ、だけど、

「聖女なんて、称号だけでいいんだ」

「称号、だけ……………？」

「聖女としてのサーヴァント。

それだけでいい。」

「偉業を成した過去は、確かに過去だ。

「だから、好きなように振る舞えばいい」

「……………」

「聖女と名高い、マルタに会ったよ。」

「会って後半、彼女はタメ口だったぞ」

「……………ふふ」

「今みたいに、普通に笑えばいい。」

「偉人だって誰だって、元は1人の人間なんだ。」

「英雄だって人間は尊敬の目を向けるけど、

それは教科書に乗ってる英雄たちで、

「今、目の前にいる英雄じゃない」

「あ——」

「だから、好きなようにすればいいと思うよ。

黒いあなたにも言ったよ、

だって、あなたも元は1人の人間なんだから」

「――」

……………ああ、まただ。

情が移りやすくて、話に熱が入ると止まらない。

親父に言われたつてのに、癖は治らないな。

「――ふふ、なんだ、そうだったんですね」

「？」

「好きにしても、良かったんですね。私は」

「……………悪い癖だよ、英霊相手に説教なんて」

「その悪い癖のお陰で、

私は私の在り方を見つけられましたよ？」

「……………敵わないな、やっぱ英霊だよ」

夜が明ける。

日が昇り、空が明るくなる。

「すつきりしました。

あなたと話せて良かった」

「それはこちらもだ。

今日は頑張ろう。決戦だ」

俺たちは握手を交わす。

「そう、ですね。

あなたに、お願いしたいことが――」

「？」

第12話 「オルレアン進撃」

走る。

「「Gyaoooooooo!!」」

空から飛竜たちの咆哮が響き渡る。

一際巨大な黒竜が空を舞う。

「ジークフリート、ゲオルギウス!!」

「任せてくれ、

あれはオレを狙っているようだ」

「微力ながら、私も助力させて頂きましょう」

竜殺しと聖人が邪竜へと剣を向ける。

飛竜たちが空から舞い降り、

こちらを行かせまいと道を塞ぐ。

「させません!」

「邪魔です!」

「退きなさい!」

「燃えなさい!」

「串刺しにしてあげるわ!」

「そこをどけ!」

殴打、剣閃、薙払、灼熱、刺貫、銃撃。

それぞれの手段で飛竜たちを排除し、

城へ一直線へ走る。

城の前で待ち構えるは、

殺気と威圧感を放つ女吸血鬼。

「アレの相手は私がやるわ！」

「エリザベート、清姫、頼む！」

「手伝わさせてもらいますわ、エリザベート」

二人が女吸血鬼と対峙する。

横を抜けて城内へ。

「よし、ここからは分かれて行くぞ」

「うん、ジャンヌは私たちと行こう。」

真機くん、気を付けてね」

「真機さん、お気をつけて」

作戦通り、立香、マシユ、ジャンヌと別れる。

3人は階段を登って聖杯の元へ。

俺は沖田と共にホールへと向かう。

「よし、沖田、行くぞ」

「はー」

~~~~~

今日の朝のことだ。

オルレアンへ進撃する前に、

俺たちは作戦を話し合っていた。

まず、マリー、アマデウスが陽動を行って

ワイバーンたちを引き付ける。

次に俺たちが固まって進撃開始、

おそらくファヴニールが出てくるので

ジークフリート、ゲオルギウスをぶつける。

ファヴニールを倒したらマリーたちと合流、

ワイバーンたちの陽動を続ける。  
吸血鬼、カーミラが現れた場合は、  
エリザベート、清姫が対処、撃破する。  
城の内部についてはマルタから聞いている。  
城の上の階に聖杯、  
下のホールに黒ジャンヌたちがいる。  
聖杯にも守る奴がいるだろう。  
どちらとも対処しなければいけないため、  
上には立香たち、下は俺と沖田が進むことに。

「この作戦で一番危険なのは、

おそらく、マリーたちだが……………」

「大丈夫よ、ねえアマデウス？」

「僕には荷が重いと思うけどね!？」

「ジークフリートたちが来るまでは

耐える、逃げるだけでいい。

それから固まって飛竜に反撃を頼む」

あまり体力が残っていないと

ジークフリートたちだけで戦うことになる。

連携も取れるよう、逃げ続けてもらう。

「あとカーミラだが……………二人で大丈夫か？」

「問題ないわ、私だけで十分なくらいよ」

「駄目だ。危険すぎる。

清姫だけでも一緒に戦ってくれ」

「私、ですか？構いませんよ」

「仕方ないわね……………」

残るは城内。

おそらく飛竜による介入もあるだろうが……………



「おそろく、下側に黒ジャンヌがいる」

「うん。聖杯の方にはジル・ド・レエだね」

「ジル……………」

ジャンヌもジル・ド・レエに思う所があるのか、  
そちらに向かわせることになる。

「じゃあ、行こう。」

黒いジャンヌを止めて、フランスを救おう！」

「「「おー!!!」」」

### 第13話「黒ノ聖女」

ホールの扉を開ける。

そこには、黒いドレスアーマーを纏った、  
ジャンヌ・ダルクがいた。

「やっぱりここにいたか」

「……………1人、のようですね」

ジャンヌが振り向く。

「あら、あなた1人だと思ってたけど、

それもそうよね、サーヴァントはいるわね」

「まあな、今はジャンヌたちが聖杯へ向かってる。

残念だが、ここで終わりだ。ジャンヌ・ダルク」

「……………終わり？いいえ、終わらせないわ。

この国を滅ぼすまで、私は止まらない」

彼女は背中の旗槍の石突を床へ叩きつける。

瞬間、炎が広がり、来た道を封鎖される。

「逃がしなんてしない、

まずはあなたたちからよ！」

俺たちは得物を構えてジャンヌと対峙する。

ジャンヌは旗槍を回し、こちらへ走り出す。

「はあッ！」

「しッ！」

振り下ろしを身体を捻って回避、  
反撃に銃を撃ち込む。  
だが、旗槍に弾かれる。  
やはりサーヴァントに普通に撃つのは駄目だ。  
完全に隙を晒してもらわないと。

「無駄よ！」

「あちっ!？」

沖田がジャンヌの後ろに回り込むが、  
炎がジャンヌの背から猛烈に吹き上がり、  
攻撃を許さない。

ジャンヌが沖田へと向きを変える。

沖田は刀で旗槍と打ち合い、火花を散らす。

その隙に魔術で弾薬を生成、  
手持ちの回転式短銃へ装填、ジャンヌへ接近する。  
未だに剣と旗槍の打ち合いが続いているが、  
筋力の差か、沖田が押し負ける。

「く——!？」

「もらった!!」

ジャンヌが沖田へ槍を引き絞る。  
2対1なのに片方を優先するところを  
見ると戦争の戦い方が抜けていない。  
おそらく個人と複数人の戦いに慣れていないな。

「せえア!!」

「くあっ!?!——ッ！」

身体を回し、回し蹴りを放つ。

肩の薄鎧を破壊し、吹き飛ばす。

「沖田、大丈夫か？」

「く、はい、大丈夫です。」

「なんか、調子が出なくて……………」

「大丈夫だ、自信を持って行こう。」

「ほら、深呼吸」

「すーっ、はーっ……………はい！」

沖田は深呼吸をして頬を両手で叩き、集中する。  
俺は少し後ろに回ろう。

「……………」

「沖田、俺は少し下がって援護する。」

「だから、前衛は頼んだ」

「お任せ下さい！」

いつもの調子を取り戻しました！」

「頼もしいな」

蹴りを放った時、

ジャンヌに反撃を貰ってしまった。

蹴りで回った時に左肩を槍で貫かれたな……………」

銃を持つ手が震える。

ブレが大きくなるし、

慣れないが右手で撃つしかないか。

さつきからジャンヌが黙ってるな……………」

沖田も上手く仕掛けられない。

「……………仲間、か……………」

「？」

「ああ……………憎たらしいわ」

ゾクリと、背筋を悪寒が駆け上がる。

人間の放つ土壇場での言葉の威圧は、  
形勢が逆転する合図でもある。

立香の言葉などが特に大きいだろう。

何か、来る——？

「私は……間違っただけだよ……」

「ここで消えない、消えられるものか!!」

「沖田、来るぞ！」

「はい！」

第2ラウンド、開始だ。

## 第14話 「決着」

炎が床へ広がり、部屋が炎上を始める。  
不味い、元々長期戦は苦手だが、  
早く終わらせなければ。

ジャンヌが旗槍を振り、沖田へと接近する。  
俺は援護のため、中距離まで離れて銃を構える。  
出し惜しみは無しだ。

「——xpoovo☒・break、pre<sup>ブ</sup>st<sup>ト</sup>!!」

沖田に時間短縮の魔術を行使する。  
行動速度が時間ごと速くする魔術の応用だ。

「マスター、感謝しますー!」

「小癪な……!」

ジャンヌが沖田から距離をとり、  
腕をこちらへ向ける。

床が赤熱し、炎が床を破壊して噴き上がる。

俺は何とか床を転がって避ける。

危なかった、魔術の影響で身体が重い。

他人を時間魔法に影響させると、

その分の世界からの修正を受ける。

世界からの修正は、『援護と反対の影響』。

つまり、

沖田を速くした分、俺は動きが重くなり、

沖田が快調な分だけ、俺は身体が怠くなる。

まあそのお陰で身体が爆発四散することはない。

「左手は駄目、と。」

仕方ない、右手でやるか………!」

リボルバーを構え、次にジャンヌが来る位置を  
沖田の剣技、経験から予測して、撃つ。

「……つぐあ!？」

「そこッ!!」

「ちッ!小賢しい真似を………!」

ジャンヌが激昂し、腕を振り上げる。

再び床が赤熱、炎が噴き出す。

沖田の速度補正は0・5秒、

俺の速度は0・5秒遅くなっている。

それを考えながら床の赤熱部分を避けながら走る。

「汝の道は——」

ジャンヌが振り上げた手を上に開く。

魔力が収束するのを感じて天井を見上げると、

黒炎を纏った杭のようなものが大量に形成される。

「マスター、しっかりと掴まって下さい!」

「沖田!？」

沖田が俺を左手で小脇に抱え、

右手に刀を構える。

「既に途絶えた!!」

ジャンヌの笑い、そして詠唱の終わりと共に

黒い杭が天井から降り注ぐ。

沖田は杭を舞うように刀で逸らしていく。

それはまるで、円舞のような剣捌き。

突き上げてスルリと流し、

刀をぶつけて火花を散らし、

突きを放って杭を破壊することもある。

「マスター、このまま宝具行きます！」

「ああ………速度上げられるだけ上げてやる」

杭は俺たちの周囲に突き刺さり、

沖田は俺を床に下ろし、宝具を発動する。

「一步時越え」

かかった魔術による速度補正が

沖田の速度を音速以上に跳ね上げる。

「二歩無絶」

沖田の姿が掻き消え、

それは、足音すらない。

「三步絶剣」

刀の剣閃が大きく引き絞られ、

沖田の姿がジャンヌの目の前に現れる。

「無明三段突き——時越え!!」

貫く閃光は時間をも置いて行く。



3本の剣光は黒い聖女を貫き、  
その背後の壁にすら風穴を開ける。

## 第15話 「泡沫の夢」

閃光に貫かれたジャンヌが倒れる。

沖田が距離を取り、納刀した。

「勝った……………」

「はい、勝ちました！」

聖杯は上です、私たちも行きましょう」

だが、ジャンヌはまだ消滅していない。

左腕で顔を覆い、天井を仰いでいる。

「……………沖田、先に行ってくれ。」

ジャンヌに少し聞きたいことがある」

「え？は、はい」

沖田が来た道が通れるようになったことを

確認し、扉を開けて戻っていく。

俺はジャンヌへ歩み寄る。

「敗者を愚弄するの？」

「聞こえてたろ、聞きたいことがあるんだ」

「……………ふん、燃え落ちても知らないわよ」

俺はジャンヌを見下ろす。

相変わらず顔を隠したままだが、話をする。

「じゃ好きにさせてもらうが……………これ……………」

人理の崩壊を起こして聖杯を与えたのは誰だ？」

「知らないわよ、そんなの。」

「だって私、召喚されたサーヴァントですし」

「は？いや、だが、お前が聖杯を……」

「知らないって言ったわよ。あと少し

違ったわね、私は造られたサーヴァントよ」

「造られた……？」

「いや、ああ、そう言うことか……！」

なるほど、と言うことは、元凶は

黒いジャンヌ・ダルクじゃない。

それを聖杯に願ひ、このジャンヌを造った

ジル・ド・レエか……！！

「青髭、やはり外道だ。」

ホムンクルス並みの酷さではないか。

「私は贋作、あなたたちには

やはり敵わないのが道理ね……」

「……それについて、話がある」

「何か？」

「残念だが、お前は贋作じゃなくなった」

「え……？」

ジル・ド・レエは、このジャンヌを聖杯に願う時、

『フランスを憎むジャンヌ』と願った筈だ。

故にこのジャンヌはIFの存在。

有り得たかも知れないジャンヌ・ダルクだ。

やはり、本物のジャンヌとあの話をして

正解だったのかも知れない。

「人類史のジャンヌ・ダルクが、

本当にフランスを憎んだなら？」

「……………どういふこと？」

理解が、できないわ」

「サーヴァントは、同一人物でも

違うクラスとして現界することもあるそうだ。

たとえば、青年の姿と、その後の老年の姿、と」

「——あ!?!」

彼女は声にならない声を上げる。

俺はニヤリと、それを笑う。

「おそろく、お前は白いジャンヌに

憎しみの感情があったと意識されたことで、

贋作じゃない、ジャンヌ・ダルクとして、

英霊の座に登録されたんじゃないか？」

ジャンヌが、あの夜言ったのだ。

『……………恨んだ、でしょうね。

国に尽くして、それでも、

私は見捨てられたのですから』

実は薄々、俺もこいつが偽物ではないかと

思っていたフシがある。

ジャンヌ・ダルクを聖女と決めつけてた俺がいた。

だから、これに気づけたと思う。

「本物が何人いようと別にいいだろ？」

——なあ、ジャンヌ・ダルク」

俺は笑いかける。

白い彼女も、黒い彼女もジャンヌ・ダルクなのだ。  
教科書に乗っている、英雄としての。

「……………ふふっ、そうね。敵なのに、

アンタには本当、すつきりさせられるわ」

「そうかい。んで、ここで燃えるのは嫌か？」

「また燃やされるなんて二度とゴメンよ。」

炎は消してあげるわ」

「助かる」

先ほど、入ってきた所の道が崩れ落ちた。

どうやら出られなくなったようなので、

取り敢えず彼女に火を消してもらおう。

俺が立香たちの所へ向かうため、

魔術で手榴弾を作ろうとした、その時。

ジャンヌから声がかけられる。

「——最後に、提案があるわ」

## 第16話 「本当の終わり」

ホールから出て階段を上がりながら、  
ドクターに連絡を取る。

『真機くんか、立香ちゃんたちは今、』

ジル・ド・レエと交戦中だ、理由は——』

「青髭が元凶、だからですね？」

『気づいてたのかい!?!』

「報告が遅れました、

ジャンヌ・ダルク、オルタナティブを撃破、

彼女から話を聞きましたんで」

『そうなのか!?!』

だったら外へ向かってくれ、

ジル・ド・レエが海魔に乗って逃げた!』

「外? 城から出たんですか!?!」

面倒な!

階段上がる意味がなくなって立ち止まる。

『ああ、現在立香ちゃんたちが

追い付いて戦闘中だ、急いでくれ!』

「城からの距離は分かかりますか?」

『かなり離れてる!』

「適当すぎですけど!?!」

まあ十分なので、連絡を切って  
階段をそのまま駆け上がる。

階段を上がった時、沖田がこちらへ走ってきた。

あー、そうか、沖田も上に行ったのか。

「マスター、上に誰もいません！」

聖杯もなくなってましたよ!？」

「だったら手伝ってくれ、肩がヤバい」

左肩をジャンヌオルタに貫かれたので

そろそろ血がヤバい。

炎で止血はしたが、無茶苦茶痛い。

「また傷隠してたんですか!？」

「悪かった、でも今は手伝ってくれ!」

近くにあった窓を見つけ、それを開けると  
かなり遠くに立香たちを見つける。

大量の海魔だと思われる奴らと交戦しており、  
ジル・ド・レエに近づけないようだ。

「何ですかアレ!?!気持ち悪っ!」

「海魔って呼ばれる奴ら、だと思う。」

ジル・ド・レエが召喚してるのか?」

ともかく、青髭は召喚に集中して

海魔に体力を削らせているのだろう。

ねちっこいな。

ともかく、それなら好機。

「image make up」

狙撃銃、モシン・ナガンM1891／30を

魔術で生成する。

魔力は訳あって今は十分だ。

左手がもう使えない状態だが。

「沖田、そっち側支えてくれ。」

俺、左手はもう駄目っぽい」

「無茶するからですよ……………」

これからはちゃんと行って下さい」

私、あなたのサーヴァントなんですよ、  
と言つて、沖田は銃を支えてくれる。  
弾を入れてもらい、窓枠に銃を構える。  
高さを調整、スコープを覗く。

沖田が少し慣れ始めたのか、揺れが少なくなる。

「沖田、俺の言う通りに銃の先をずらしてくれ」  
「了解です」

距離は……………2キロ、つてどこか。

かなり離れたようだが、

俺の愛用、それも魔改造銃なので十分対応可能。

沖田に指示を出して少しずつ照準を合わせる。

召喚に集中しているようなので、合わせやすい。

「よし、沖田。そこだ」

「はい、良いですか？」

「おっけー」

んじや、喋ったこともない相手だが——」

沖田にグッドサインを作り、  
スコープを覗いて引き金に手を添える。

「——THE END、だ」



引き金を引く。

頭に狙いを合わせた銃弾は、  
タアンと心地よい音と共に発射される。

風を切り、空を走る。

撃ち抜く。

「うし、やった！」

だが、流石はサーヴァント。

倒れてくれないか。

かなりのダメージは入ったらしく、

よろめき、大きく怯む。

しかし、そのお陰で海魔の召喚が止まった。

ジャンヌとマシュが攻め立てる。

そして、ジャンヌがジル・ド・レエを討ち取った。

それを見て、

俺は沖田とハイタッチを交わし、

立香たちの元へ走り出した。

## 17話 「オルレアン、終息」

「ごふうっ?!」

「沖田!」

立香たちの元へ向かっている途中。

城から出た時に沖田が吐血する。

倒れそうになった身体を支え、

何とか肩をかす。

「も、申し訳ありませんマスター……………」

沖田さん少し頑張りすぎた感じですよ……………」

「無理はしないでくれよ、大丈夫か?」

「少し疲れました……………」

「ちよいと失礼、急ごう」

「うあ!?!ちよ、マスター!?!」

沖田の肩へ右手が行っていたので、

左手を沖田の膝の裏へ引っかけて持ち上げる。

ちなみに肩だが、布を巻いて縛って止血した。

だいぶ楽になったので、十分力も入る。

そのままスピードを上げて立香たちの元へ。

そして、少し走ると立香たちと合流する。

ジャンヌの身体が、薄れていた。

「フオウ!」

「あ、真機先輩、お疲れ様です!」

「あれ、なんで沖田さん

お姫様抱っこされてるの?」

「血を吐いたからな、結構激しい戦いだっただし」  
「お疲れ様でした、真機さん、沖田さん」

立香を見ると、その手には黄金の杯、  
おそらく、聖杯だと思われるものがある。  
ジャンヌと向き合う。

——吹っ切れた顔だ。  
全部、終わったようだ。

と、マシユが不思議そうな顔をする。

「でも、あれは何だったんでしようか？」

「うん、謎だよね」

「結果的にこちらの勝因となりましたが

……これも因果なのでしようか？」

「……………あれ、マスターですよ？」

「「はっ？」」

『……………ええつと、レイシフト準備は終わった。

だけどそれについて説明するよ』

ドクターからの連絡が入る。

どうしたのだろうか。

『真機くん、だよ。彼がオルレアン城から

あのジル・ド・レエを狙撃したんだ』

「「えっ」」

見事にハモって呆然とする3人。

……………そんなに驚くことか？

ダヴィンチが通信機に映る。

「まあ、確かにやったが」

『……………真機くん、君が味方で良かったよ。

まさか2 km以上離れた位置からの  
頭部への正確なスナイプなんてね』

「そ、そんなことが!?ワイバーンの

影響で空は暴風もあつた筈ですよ!?!」

「それも考えたが。スコープで

見たところから5 mm程度ズレただけだぞ?」

なので最後はスコープを覗かなかつた。

風と重力の影響をも考慮するのが狙撃主だ。

揺れる車の上から3 km離れた相手を

撃ち抜いたこともあつたし。

慣れれば簡単なものだが。

「す、凄い……………」

「そうか? まあ、勝つたのはお前たちだ。

お互いに、お疲れ様、だよ」

みんなを見回す。

すると、立香が苦笑いを浮かべる。

「やっぱりさ……………(こ)で

あつたことも、無かつたことになるんだよね」

「先輩……………」

確かに、そうかもしれない。

俺たちの戦いは歴史に刻まれるわけではなく、  
英霊たちの奮闘も、無かつたこととなる。

だが――

「それは違いますよ」

「……………」

ジャンヌが、こちらを見る。  
……………成る程、お見通しか。  
すると、周囲には一部を  
除いたみんなが集まって来ていた。

「ジャンヌの言う通りよ。」

確かに、これは無かったことになる」

「報われないのは嫌いだけどき。それでも。  
実に、実にやりがいのある仕事だったよ」

マリーと、アマデウス。

囿の役割だったが、二人とも無事だ。

そう言っつて、二人は光となって消える。

「私はまだ子イヌに助けられた恩を

忘れちゃいけないわ。必ず返すからね」

「私もです。あと、私。執念深いタチでして、  
後程、そちらにお邪魔しますね」

エリザベートと、清姫。

こちらはボロボロだが、致命的ではない。

最後に清姫が不穏な台詞を吐いて、

二人は光となって消える。

ジークフリートと、ゲオルギウスもまた、  
このどこかで消えたのだろう。

残ったのは、俺たちと、ジャンヌ。

「決して、忘れませんよ。私たちも。」

そして願わくば、あなた方も忘れないで——」

笑顔でそう言ったジャンヌも、  
光となって、空に溶ける。

「——そっか、そうだよね」

「先輩？」

「私たちが忘れなければ、

無かったことになんて、ないんだよね」

「そう、だな。」

きつと、彼女も忘れないだろう」

思い描くのは、あの黒いジャンヌ。

彼女もきつとまた、会う時が来るような

そんな気がする。

世界が、光に包まれる。

俺たちはカルデアに帰還し、

——1つ目の特異点が、消失する。

## 第一特異点終了後 幕間の物語 幕間「縁」

オルレアンの旅を終えて翌日。

俺はドクターに左肩を見てもらっていた。

「いっづツ!？」

「我慢してくれ。」

全く、これは深い傷が残るぞ……………」

ドクターの配慮により、

俺は肩を診てもらっていた。

腹は傷が残った。深く抉られたので仕方ない。

肩にも深い凹みがあった。

「これで終わりだけど」

あまり無茶すると沖田さんが心配するよ?」

「ぐ……………沖田の隣にいたいんですよ、

後ろで見ているだけなのは性に合わないんで」

「本来は立香ちゃんみたいなのが

普通なんだけどねえ……………」

何故か帰ってきたら魔力回路が増えてるような

君がかなり普通じゃないとボクは思うよ?」

そのジトーと音が出そうな目で

見るのをやめてくれませんかね。

俺は立ち上がって出口へ向かう。

まあ、ギクツとすることもあったりするのだが。

アレは初めてやったが、かなりキツかったな。

言われるがままで試したことだった。



——だが、確かに彼女の力を感じる。

「一体何をしたのか知らないけど、あまり無理をしないこと、

そして、自己管理をしつかりすること、だ」

ドクターは医務室を出ようとする  
俺にそう言ったのだった。

「あれ、マスター？おはようございます。

どうしたんですか、朝早くから」

「沖田か、おはよう。」

少し傷をドクターに見せてたんだ」

「ああ………私に無理するな、

って言うのに説得力がないですよね、全く」

「そんな言わないでくれよ、

俺のは命に関わるような事じゃない」

不貞腐れる沖田を宥めながら廊下を歩く。

子供みたいで可愛らしいが、

ちゃんと機嫌を取っておきたい。

「あ、真機くん、沖田さん、おはよう」

「おはようございます、お二人とも」

途中で立香とマシユと会う。

時刻は7：30、か。

「おはよう」

「おはようございます、

お二方、聞いてくださいよー」

「あまり言い触らさないでくれよ……」

結局、沖田のお陰でカルデア内の職員全てにも俺の傷の内容が知られるようになった。解せぬ。沖田が俺に話かけてくれなくて寂しい。

「悪かったよ沖田………許してくれ」

「では今日の3時のお菓子を下さい。」

「そしたら許してあげます」

「わかったよ……」

「仲良しですね」

マシユと立香に笑われる。

すると、沖田が不思議そうな顔をする。

「どうした？」

「………あ、いえ、マスターとは

初めて会ったような気がしなくて」

「そりゃそうだろ」

「そうじゃなくて、冬木で、ですよ。」

「召喚される時も、何故か

応じないといけない気がしたんです」

「………実は、俺も同じだった。」

何故か、沖田とは初めて会った気がしない。

「サーヴァントを召喚するには

その英霊との縁がないといけないんだよね」

「必ずしもそうではありませんが、

もしかしたらお二人には

縁があるのかも知れませんね」

「??」

沖田と共に首を傾げる。

立香とマシユはそれを見て笑う。

「私に関係する家系、とかですかね？」

「新撰組、ではないだろうな」

「なんか違います」

「断言ですか」

「あはは、深く考えることもないんじゃない？」

二人とも仲良しなんだからさ」

まあそれもそうだな、と納得する。

俺の家系図は何となく見た気がするが、

確か、元々は医者の家系だった筈だし。

「まあそうですね。」

連携も取りやすくて助かってます」

「そうだな」

食堂へ着く。

そうか、二人は朝食を取りに来たのか。

俺と沖田も食べていないな。

食堂の弓兵こと、エミヤに朝食を頼もうとした時。

「あら、おはようございます

ますたあ、真機様。それとお二人」

「清姫、おはよう」

「おはよう、奇遇だな」

清姫だ。

オルレアンから帰還した時、  
コフィンから戻ってきた時に何故か  
カルデアの召喚室から出てきた。  
清姫は俺の言葉に「ふふっ」、と笑う。

「奇遇ではなく、これは運命ですよ？」  
「うわお、何故か背筋がゾクツとしました」  
「俺もなんだが」

ともかく、清姫が合流する。  
共に朝食を取ることに。  
立香が味噌汁を作っているエミヤへ  
台に乗り出して聞く。

「エミヤ、今日のデザート何？」  
「みたらし団子だ、楽しみにしていたまえ」  
「みたらし団子！」

俺と沖田の声が重なる。  
大好物なんだが。

「エミヤ、2つくれ」  
「駄目だ。1人一本までにしなさい」  
「何故ですか!？」  
「朝から糖分の摂りすぎは好ましくないからだ」

おかんかお前は。  
俺と沖田はむう、と唸る。  
すると沖田がこちらを向く。

「マスター」

「いやだ」

即答。

「言ったじゃないですか！」

「3時だろうが！」

みんなに笑われる。

結局、食事中まで争っている内に

立香に俺と沖田の二本を食べられた。解せぬ。

## 幕間「ある日の図書室」

とある日。

俺が暇潰しに図書室に行くと、

藤丸 立香が本と睨み合いを続けていた。

「むー……………」

俺はそれを見ながら熱心だな、と感心し、  
そつと後ろから本を覗き込む。

「魔術の本か」

「ひゃいつ!？」

「ん、びっくりさせたか？悪い」

「な、何でいるの!？」

「いちや駄目か？」

「ち、違うけどさ……………」

モジモジする立香。

魔術の本には魔術回路、魔力などの

魔術師の基本のことについて書かれていた。

「勉強してたのか？」

「……………うん。」

一応、私も本業じゃないけど魔術師だし」

「ほおー」

魔術の本を見ると、付箋が幾つも挟まっている。

同じ色と字体。

全て立香のものだろう。

「言ってくれたら教えたのに」

「……………うん。ごめんね」

「なんで謝る……………1人で

何でもやろうとするのは良くないぞ？」

「あはは……………でも、

みんなにあんまり迷惑かけたくないし……………

1人でやった方がいいのかなって……………」

……………まあ、そうだよな。

汚れ仕事が常だった俺と違って、

彼女はまだ20もいかない少女。

俺も人のことを言えた立場じゃないが、

まだ「自分」という存在を確立できていないのか。

そんな彼女に、『人類の未来』を託す、

ということが重くない訳がないのだ。

……………俺も、未だに事の大きさを理解できていない。

いや、脳が理解を拒んでいる。

今にも狂ってしまいそうだから。

「……………立香」

「う、うん」

「あまり自分を追い詰めるなよ、

お前は1人じゃない。

マシユ、ドクター、ダヴィンチ、沖田……………」

もちろん、俺だってお前の味方だ」

「……………」

1人で何でもしようとするのは良くないと言うが、

人のことを言えないのは分かっている。

人に迷惑をかけたくない、

そう思つて1人でやろうとするのだ。  
相談できない訳ではなく、相談したくない、  
というのが正しいのだろう。

「何か悩み事があればいつでも相談しろよ。」

「迷惑じゃないし、ありきたりなんだろうけど、  
………だつて、それが仲間なんだろう？」

「………うん。そうだね。」

「ありがとう、ちよつと楽になつたよ」

「ああ、魔術についてならダヴィンチ、

良ければ俺も少しなら力になれると思うから。

今日は少し休んだらどうだ？」

「うん、気分転換にお茶でも飲んでくるね」

「そうそう、楽に行こうじゃないか」

「ふふ、ありがとう」

立香が本を棚に直し、図書室から出ていく。

そして、俺はため息をつき、

後ろの本棚の方を向く。

「盗み聞きか、感心しないな。」

「観念して出てきたらどうだ？」

「「っ!」「」」

ビクツ、と驚いたような音が本棚の裏からする。  
出てきたのは、

ドクター、マシユ、ダヴィンチの3人だつた。



「……………3人とも、そこに正座」

「いやボクは「正座」はい」

苦笑いするドクターを笑顔で威圧して黙らせる。

3人は俺の前に正座する。

「弁明を聞こうか、ドクターから」

「……………レオナルドに無理矢理聞かされたんだ」

「なんとなく知ってた。」

ドクター立っていいですよ。はい次、マシユ」

ドクターがやれやれ、と言った顔で立ち上がる。  
次にマシユを見る。

「つい……………大切なお話をしていたようなので……………」

出ていこうにも出ていきませんでした。

申し訳ありません……………」

「許す。立って。」

ダヴィンチ、縛るから待ってろ」

「私に弁明の余地は!?」「ねえよ」

正座のまま室内の柱に縛った。

パラメータの筋力Eは伊達ではない。

~~~~~

「まあ、ともかく。立香ちゃんの話を

聞いてくれてありがとう、真機くん」

「はい、まさか先輩が悩んでいたとは……………」

「メンタルケアは一応出来るからな、

暗殺者だぞ、俺」

「そういえばそうだったね」

無論、狙撃ばかりではなく。

対象に直接言葉を交わして殺すこともあった。

心理術も軽くだが学んだな。

相手を安心させる会話術くらいは使える。

「だ、けど。」

マシユ、これはお前がやることだ」

「え、わ、私ですか!？」

「そう、立香のサーヴァントだろ？」

立香の身体はともかく、

精神も守れるようにならないとな」

「な、なるほど……………ご教授願えますか？」

「メンタルケアなら教える。ほら行くぞ？」

「お願いします！」

俺はマシユと共に部屋から出る。

「しかし……………あの子も

随分と人間らしくなったもんだね」

「二人の先輩のお陰、だろう。」

この中でも本当に人間らしい立香ちゃんど、
達観してるけどマシユと同じな真機くん、か」

「全く、良い先輩に恵まれたね、マシユ……」

「ああ、そして彼も。」

「きつといつか、分かる時が来るのだろうね」

第二特異点 永続狂気帝国 セプテム 第1話「第二の特異点」

早朝。

俺と沖田はドクターの呼び出しを受け、
管制室へ向かう。

既にそこには、立香、マシユ、
ドクター、ダヴィンチが待っていた。

「おはよう、遅くなったか」

「いえ、時間丁度です。」

「おはようございます。真機先輩」

「おはよ、真機くん」

「フオウフオウ!!」

「むごあ!?!」

マシユの肩から飛び出したフオウが、
顔に張り付いてくる。

いつものように引き剥がしてから

マシユ、立香と挨拶を交わし、

ドクターとダヴィンチにも挨拶をし、

内容を聞く。

「もうレイシフトの準備は整ってる。」

今回、君たちに向かってもらうのは、

一世紀のヨーロッパ、つまり、古代ローマだ」

「ローマ……………」

「ジャパンから西の方にあるイタリアから

始まって地中海、広い海を制した大帝国さ」

あまり外国の知識がなく眉を寄せる沖田に、
ダヴィンチが解説、もちろん俺と立香も
勉強になるので聞いておく。

「ローマの首都もローマと呼ばれていてね。

聖杯の位置、そしてローマの

変化もまだ分からないんだけど」

「済まないね、

まだ観測制度が安定していないようだ」

「どちらも俺たちで突きとめるのか。

……………また大変な旅になりそうだなあ」

「二」無茶だけはしないで（下さい）ね」「二」

「へいへい、わかったよ……………」

立香、マシユ、ドクター、沖田が俺を睨む。

そんなに言わなくてもいいじゃないか。

「前例がありますからね」

「次はどこを怪我してくるんだろうね」

「次は致命傷かも」

「先輩、注意を怠らないで下さいね」

「扱い酷くない？」

まあ腹と左肩に消えない傷が残ったのだから
仕方ないと言えば仕方ないのだろうが。

……………気を付けよう。

「あちらにも召喚された

サーヴァントがいるだろう。

可能であれば、彼らの力を借りてくれ」

「ドクター、一つ質問があるのですが……………」

中立、敵対しているサーヴァントを
反応感知した時点で見分けられませんか？」

「こちらの観測情報としては観測可能、か。」

確かに、出来るに越したことはない」

確かに、会う前から味方と分かっていたら
裏切りの可能性はないし、

コミュニケーションも楽だろう。

「現時点では無理、かなあ、

生体や魔力を読み取るのがせいぜいだし。

そこは精神的な面だろう。

数値で表すことはできない、かな。

力になれなくて済まない」

「いえ、こちらこそ無茶を言ってますいません」

「戦闘は極力避けたいからね………」

「避けられるものは避けたいですし、

危険なら不意打ちで一撃決殺したいですね」

「それが出来るのは

沖田さんと真機くんだけでしょ？」

「えっ？」

「私の盾ではそんなこと出来ませんよ!？」

出来ないの？

そんなことは置いておいて、

どうやら準備が出来たようだ。

俺たちはコフィンに入る。

『アンサモンプログラム スタート

霊子変換を開始 します』

『レイシフト開始まで あと3、2、1……………」

意識を手放す。
一瞬の浮遊感。

『全行程 クリア完了。』

グランドオーダー 実証を 開始 します』

落ちる。

これは、帝国を紡ぐ王の物語。

紅き剣を携えた暴君は、

その国の民と分かりあえることなく、

その生涯を終えた。

だが、果たしてその在り方は——

第2話 「夢幻」

意識がまだ成り立たず、
ぼんやりとした空間に俺は立っていた。
真つ暗なその空間の中心には、
一本の無骨な剣が突き刺さっている。

「……………」

俺はそれに吸い寄せられるように近づき、
柄に手を触れる。
瞬間、凄まじい光が周囲を満たす。
暗い空は夕刻を思わせる夕焼け空に、
地面は、水の上に立つような形になる。

「これは、俺の……………」

固有結界……………?

だが、そんなものを使つては——

「!」

突然、背後に何かを感じ、振り向く。
そこには、一人の男が立っていた。
くすんだ金色の髪、深い蒼の眼。
その左目の上には巨大な傷があった。
歳は……………40、くらいだろうか。
ボロボロのマントを着た男は、
俺をその双眸で値踏みするように見ている。

「あんたは——」

「名乗るのは貴様からであろう」

「——っ、悪かった」

威圧感に肌が震える。

たった一言で、ここまで人を威圧できるのか。

俺は剣から手を離し、男と向かい合う。

「橘 真機、だ」

「真機、ふむ……………」

「……………」

男は眼を閉じ、そしてボロボロのマントを取る。

その下には、鎖帷子のような鎧があった。

そして、眼を開けた男が口を開く。

「私の名はアルトリウス。」

ルキウス・アルトリウス・カストウス」

……………聞いたことがない。

だが、ただの人間ではない。

英霊、それすらも凌駕するような存在か。

英霊の枠に収まるとして、

この男は冠位と呼ばれるクラスでも何ら問題はないような力を有している筈だ。

そう思わせるほどの、力を彼から感じた。

「アルトリウス……………？」

あんた、一体何者——」

「こちらにも事情があつてな。

故に、対価として貴様に我が力の一端を貸す」

「は——？」

ちよつと待つてくれ、話が見えないぞ！」

「いずれ全てが分かる。」

これは貴様の為にもなろうよ」

全て、とは一体なんだ。

何もかも唐突すぎる。

俺はアルトリウスと名乗った男に困惑する。

英霊であることには違いないだろうが、

一体彼は何者だというのだ。

「言うべきことは言った。剣を抜くがいい。」

夢は覚め、お前を人理を救う旅へと帰すだろう」

「待て！お前の目的は何だ！」

力を貸すってどういうことだ!？」

アルトリウスが向きを変えたので

俺は慌てて呼び止めると、渋々と言ったように

彼は振り向く。

「二つ目の質問なら、そのままの意味よ。」

一つ目の質問の答えだが、

私が英霊として昇華されることだ」

「お前、英霊じゃないのか!？」

「私は英霊ではあるが、不安定な存在だ。」

故に現界することは出来ぬ。この世界で

特異な存在であるお前に夢を見せたのだよ」

「特異な存在——俺が!？」

「そうだ。じきに分かる」

そして、彼が再び向きを変えた。

「待て！まだ聞きたいことが——！」

「さらば、また会おう」

それだけ言って、彼は光となって消えた。
どうやら完全に取り残されたようだ。

「……………」

待っていても仕方がない、
俺は言われた通り、剣を取る。
ゆっくりと重いそれを持ち上げ、
そして、引き抜いた。

意識が朦朧として、消えた。

第3話 「風薫る丘」

「マスター？」

「——っ！」

沖田の呼び声で、俺は何とか意識を取り戻す。

そこは、広い丘陵地帯のようだった。

……どうやらレイシフトには成功したようだ。

横には立香とマシユ、フオウもいる。

上を見ているが……俺も上を見ると、

またしても、それはあつた。

『光の輪、か……』

やはりこちらからは観測できないね』

「確かフランスにもありましたよね」

「ここにもあつたのか」

一体、あれは何なのだろうか。

勿論、俺はあんなものを見たことないし、
知りもしない。

人類史が焼却したことで現れたのか……

もしくは、何者かが意図して起こしたのか。

「ところで……ここがローマなんですか？」

「絶対違う」

『違うからね。おかしいな……』

確かにそこは首都ローマじゃない』

沖田が困惑している。

ちなみに俺は世界中を飛び回っていたので

一度だけローマには来たことがある。
中世風の建築様式は好きだったな。

……………んん？

「……………あれ」

「どうしたんですか、先輩？」

「立香、聞こえたか？」

「うん」

「聞こえたって……………何も聞こえませんが」

声。人の声だ。

うつすらと、だが、確かに聞こえた。

よく思っていたことだが、

立香はかなり聴覚や嗅覚に優れている。

そして、人間らしい危機感知能力も。

「丘の向こうか」

「戦闘音だね……………みんな、行こう！」

『戦闘？バカな、有り得ない話だぞ？』

そんなことがあるとすれば——』

「歴史に異常が起きている。

そう言うこと、ですよね」

「とにかく、急ぎましょう！」

俺たちは丘へ走る。

丘の上から見下ろすと、確かに戦闘が起きていた。

「間違いありませんね」

「はい、片方は大部隊、

もう片方は極めて小規模です」

「フオウ！」

「え、フオウさん?」

フオウがマシユの肩から降り、
小規模の部隊の方へ吠える。

……………1人の少女が、

大規模部隊を蹴散らしていた。

「うっそだろ……………」

「戦闘指揮までやってますね、

戦闘慣れしてます、それもかなり」

「サーヴァントかな?」

『……………いや、違うみたいだ。』

あれはサーヴァントじゃない。

間違いなく、その時代にいた人間だよ』

……………薄くだが、

魔力を感じるのは気のせいだろうか。

まあ、魔力を持った人間もおかしくはないか。

「助けないと。あの大部隊、首都に向かってる」

「はい、都市を守りましょう!」

二人（とフオウ）が丘から飛び降りて

戦闘地帯へ向かう。

「マスター、行かないんですか?」

「俺は援護に回っていいか?」

「ここからなら場所がいいしな」

俺は背中から狙撃銃を取り出す。

銃弾を装填し、肩に乗せる。

「了解しました。」

では、私は立香さんたちと行きますね」

「気をつけてくれよ」

「沖田さんに、お任せあれ！」

沖田が丘から飛び降りる。

俺は銃を構え、標的の数を確認する。

こんな戦争系の戦闘ならば、

將軍を先に倒せば相手を撤退させられる。

雑兵どもは沖田たちに任せよう。

「よし、殺るか」

まずは重装のヤツを片っ端から潰していこう。

第4話 「赤の少女」

なんだろう、

前書き
上の方から憎悪の咆哮が聞こえたような。
気のせいかな？

……………まあともかく、

俺たちは何とか敵を撃退したのだった。
俺は丘を降りて立香たちと合流する。

「お疲れ様、3人とも」

「はい、援護ありがとうございます。先輩」

「沖田さん大勝rこふっ!」

「沖田さああん!」

「おっとと」

いつもの。

俺は吐血した沖田の肩を支える。

魔力を自ら供給して簡単な応急処置。

……………魔力供給の方法？

ただ沖田と軽くキスしたただけだが。

「……………あの、マスター」

……………やっぱり恥ずかしいんですが」

「そうかな？」

『あつ、真機くんは

そういう知識ないんだっけ』

「魔力供給は触れあうのが良いんじゃないのか？」

「あつ……………(察し)」

「？」

何故か立香とマシユが可哀想な目で見てくる。
フオウくん、キミもだよねその顔？

「フオーウフオウ、フオーウ……………」

(特別意識：そんな気がしてたよ、やれやれだぜ)
「……………」

すると、先ほどの部隊を蹴散らしていた
赤い少女がこちらへ近づいてくる。
俺たちは話を中断、彼女へ向き直る。

「見事であった。」

もしや貴公ら、首都からの援軍か？
すっかり首都は封鎖されたものだと思っただが……………」

金髪緑眼の赤いドレス服を纏う少女。
得物は真紅の独特な形状の剣だ。

「まあ良い、褒めてつかわずぞ。」

たとえ元は敵方の者であっても構わぬ。
余は寛大ゆえにな、過去の過ちは水に流そう」

傲慢不遜。だが華麗。

憎めない少女だ。犬に似ているか？
それが第一印象。

「ところでそなたら、異国の者か？」

見たことのない格好の者ばかりだが」

「お言葉を頂き、恐悦至極です」

「立香……………」

ノリ良いな……………

マシユも苦笑いを浮かべている。

俺は沖田を背負う。

「うむうむ、余の玉音に

浸れることを光榮に思うがいい」

「ははーっ」

「ともあれ、この勝利は余とお前たちのもの。

たっぷりと報奨を与えよう！」

「ありがたき幸せ、感謝します」

「……………あ、いや、済まぬ。」

今は剣しか持つておらぬ故な、

悪いが、報奨は今しばらく待つがいい」

彼女は少しバツの悪そうな顔をする。

どうやら悪い人間ではなさそうだ。

「全ては首都ローマに戻ってからのこと。

では、遠慮なく付いてくるがいい！」

首都ローマ……………そして、この口調。

更に、彼女は今を生きる人間。

まさか、この少女は——

「行きましよう、先輩。

沖田さんを休ませたいですし」

「かたじけないです……………」

「ああ、悪いな。

沖田、少し揺れるが我慢してくれ」

「慣れましたから大丈夫ですよ。

マスター、すみませんが、お願いします」

俺たちは少女の率いる部隊と共に、
一世紀の首都、ローマへと向かうのだった。

第5話 「V S カリギユラ」

「ギ……………っ!?頼むー!」

両手を組んで防御姿勢を取り、拳を受け止める。
重い……………!!

骨が軋むが、背後の赤い少女が飛び出す。

「任せよー!」

「グウウ……………オオオオオツ!!!」

あの後、第2波の攻撃があつた。

それを率いていたのは、

月に愛された男として知られる、

ローマ帝国第3代皇帝、カリギユラだった。

おそらくクラスはバーサーカー。

沖田が戦闘不能なのでカリギユラを避けながら

雑兵を全て蹴散らし、今はマシユに沖田を頼み、

俺と赤い少女のみが交戦している。

「はッ!」

「グ、オオオオオ!!」

「させるか!」

少女の攻撃を避け、

反撃を仕掛けるカリギユラに

短銃——（ダン・ウェツソン）を撃ち放つ。

当然の如く避けられるが、

その隙にセイバーが斬撃を放つ。

「素晴らしい援護だ、真機よ！」
「ナイス連携だ！」

互いを鼓舞し、カリギユラを追い詰める。
カリギユラは再び俺に狙いを定める。
どうやら、あの夢の契約の力か身体能力が
凄まじく強化されているようで、
サーヴァントのバーサーカーの攻撃も生身で
何とか受け止められるようになっていた。
カリギユラの蹴りをいなし、
脚を引いて体勢を崩す。
体勢を崩したカリギユラの腹へ拳を打ち込む。

「が——がアアアツ!!」

「ぐ——ぐあっ!?!」

なんと体勢を崩した状態から拳を受け止められ、
身体を捻られこちらの体勢を崩される。

そのまま地面へ叩きつけられる。

バーサーカーの癖に

……：戦闘技術は衰えねえのかよ!?

叩きつけられたことよって肺の空気が抜かれ、

息が詰まって動けなくなる。

視界の端のカリギユラの影が、

両手を組んで大きく腕を振り上げるのが見えた。

不味い、息が出来なければ詠唱も出来ない……!!

「ぐ、げほっ……!」

「させぬ!!」

「グ、ツ!?!」

少女が攻撃を弾き、カリギュラが距離を取る。
その隙に大きく息を吸って立ち上がり、
銃弾を込めて体勢を整える。

「ふ——っ、はあっ、はあっ、助かった……！」

「後で余を褒め称えるがよいぞ！」

息を整え、両手で頬を叩く。

そろそろ、本気で行かないと不味い。

特異点来て早々に死ぬわけにはいかない。

左手に銃を持ち直し、右手で腰のナイフを抜く。

口端から流れる血を舐めとり、

思考を文字通り、切り換える。

「……………真機よ、我を見失うでないぞ」

「わーってるよ……………皇帝さん、殺るぞ」

「早速見失っておるではないか……………」

身体中の血液に流れる魔力を意識、

その速度を血流ごと加速させ、魔力放出を行う。

身体能力を更に強化する。

少女が構えたのを見て

銃を撃ちながら高速でカリギュラへ接近する。

銃弾は腕で弾かれる。が。

「追い付けるか、

χρολοξ・break、Andant——！」

至近距離のみで極小の結界を張り巡らせ、

俺の時間加速を行う。

カリギュラの身体へ銃を3発撃ち込み、

そしてナイフで十字に斬りつける。
背後の魔力を確認し、結界を解除する。

「χροροο⊠・break、atempo」
「せええア！」

解除した瞬間、俺の上空から
少女が剣に炎を纏わせて振り下ろし、
カリギュラを一文字に斬った。

第6話「すべての道はローマに通ず」

「グ、ウウ……………！」

「何!？」

赤い少女に斬りつけられた

カリギュラの姿が消える。

霊体化……………サーヴァントの透明化能力か。

文字通り、幽霊のように見えなくなり透過する。

魔力は感じるが、

凄まじい速度で遠ざかって行った。

逃げたか。

「チツ、逃げられたか」

「思わぬ襲撃だったが、褒めてつかわそう。

よく余と共に戦ってくれたな、真機よ」

「光荣だな」

マシユと立香が駆け寄ってくる。

沖田も担がれている。

「どうやら無事なようだ。」

「敵勢力も撤退したようです、

お疲れ様です、先輩方、セイバー?さん」

「マスター、手伝えたら

良かったのですが、すみません……………」

「気にしないでいいさ。次、一緒に頑張ろう」

「……………はい!」

無理に連戦はさせない方がいいな。

まあ、俺もあまり長期戦には向かないタイプだし、まだ特異点の始まりだ。倒れたりしたら不味いし。

『おそらく彼はバーサーカーのクラスだろうけど、そうしたら自ら退避なんて考えにくいな……………』

「マスターがいるんじゃないの?」

「確かに……………マスターが指示を出したなら有り得ますね」

ドクターとの連絡をしていると、

皇帝さんが眉を寄せる。

あ、説明してなかったな。

「むむ、先程から声はすれども姿の見えぬ者がいるな。もしや魔術の類か?」

『魔術をお分かりとは話が早い。』

そう、ボクとその4名はカルデアという』

「まあよい。そこの4、いや5名!」

話を遮られたドクターの

ズーンという雰囲気伝わってくる。

……………ドクターって結構メンタル弱いよな。

今度お菓子の差し入れ持っていこう。

「姿なき1名はよく分からぬが皆のもの、

良くやった!改めて褒めてつかわそう!」

「素性を尋ねる前にまずは余からだ。

余こそ———」

古代1世紀、大帝国ローマ皇帝。

「真のローマを守護する者。

まさしく、ローマそのものである者」

カリギュラのことを伯父上と呼んだなら、
つまりはカリギュラの姪。

「必ずや帝国を再建してみせる。

そう、神々・神祖・民に誓った者！」

暴君として知られる者。

「余こそ、ローマ帝国第5代皇帝、

ネロ・クラウディウスである——!!」

知 っ て た

いやもう、振る舞いとか言動とか。

傲慢不遜というか、自信満々というか。

「む、リアクションが薄いぞ!?!」

「びっくり」

「驚きました……………!」

「……………驚いたなー(棒)」

「そうであろう、そうであろう。良いぞ。

存分に驚き、そして見惚れるがよいぞ!」

沖田がこちらへ耳打ちする。

あー、知らないよな。うん。

「あの一……………私、どういう反応すれば?」

「驚いたフリしといたらいと思う」

「了解です」

沖田がネロを見つめながら

「……………あ、大丈夫ですね、私の方が大きい」
とか言ってたが、一体何なのだろうか。

いや、色々と。

第7話 「帝国連合」

首都ローマについた俺たちは

ネロから話を聞く。

「今、ローマは帝国連合、という者たちからの襲撃を受けているらしい。」

先程のカリギュラも既に死亡しており、

今は連合の手先となってローマ兵を圧倒している。

ネロも全力を以て対抗しているが、

それでも押され気味だと言う。

死亡したカリギュラが現れたのは

サーヴァントとして。

ならば、連合の將軍などの者たちも。

「故に、命ずる……いや、頼む。」

余の客将となるがいい。その聖杯とやらの
搜索、このローマも全面的に協力しよう」

『願ってもない申し出だ。』

ボクらの目的は共通だからね』

「そうですね、先輩方、どうしますか？」

「勿論、受けるよ」

「同じく。沖田、いいか？」

「ええ、いいですとも」

満場一致、俺たちはネロへの頼みを引き受ける。

立香とマシユ、ドクターがいいなら。

「そうかそうか、助かる。」

貴公らの1人に総督の地位を与えるぞ。

それと、先刻の働きの報奨もな」

「いいの？」

「報奨、だ。遠慮せずに受けるがいいぞ。今夜はゆつくりと休むがいい、それぞれに私室を用意させよう」

早速、拠点が出来た。

本格的な戦争だな、こりゃあ。

また大変そうだ……………

それに、なんだろうか。嫌な予感がするよう……………
気のせいならいいんだが。

俺たちはレフを探すために前線へ配置してもらおう。

特異点のどこかにいる可能性もあるのだ。

奴にも気を付けなければいけない。

「さて、そうとなれば宴だな！

早速準備を——」

「恐れながら皇帝陛下に申し上げます！

中規模敵部隊が首都外壁、東門へ襲来、

先刻の連合の遠征部隊の残党と思われまます！」

「……………早速か。

皇帝さん、宴は後にしないか？」

「むう、仕方ない。

悪いが、出撃を頼めるか、4人とも」

「マスター、行きましょう！」

「ああ、立香、マッシュ」

「うん、行こう！」

今は3時頃だ。

夜になる前には片付けたいものだ。

ともかく、俺たちは東門へと向かう。

俺は沖田と共に外壁の上に登る。
敵を見回していると、ドクターからの連絡が来る。

『立香ちゃんにも言ったけど、

敵にサーヴァントがいる可能性もある。

立香ちゃんたちにも通信ができるように

レオナルドが改造してくれたから、頼むよ』

「了解です、つと。」

沖田、サーヴァント探すの手伝ってくれ」

「分かりました……………えーと……………」

ドクターからの連絡を切り、

沖田に小型双眼鏡の予備を渡す。

「サーヴァントはいない、っぽいな」

「そうですね、全員人間です。」

目立つのは何人かいましたが」

「敵将だな、何人いた？」

「5人ですね。お任せしても？」

「任せな、少ししたら俺も降りる。」

その間は立香たちと行動してくれ」

「分かりました、お気をつけて」

「こっちのセリフだ。」

気を付けて、無理しない程度にな」

沖田はニコリと笑い、外壁の壁を走って降りる。すげえなサーヴァントって………

まずは敵将を3人、気づかれぬよう

時間をかけて狙撃して撃破、

それからは立香たちの援護、

1時間経過したら外壁を降りて白兵戦に移行する。

「やて、やりますか」

立香たちが戦闘を始めたようだ。

俺も狙撃銃を構える。

かなりの数がいるが、まあ何とかなるだろう。

今回使う狙撃銃は持参したもの。

実はかなりの量の銃をカルデアに持ってきている。

持参したのは二丁。

スナイパーライフル、アサルトライフルだ。

スナイパーライフルはFPK。

ルーマニアの狙撃銃で、PSLとも呼ばれるな。

冷戦時代の代物だ。

入手方？ 依頼の時にターゲットから貰った。

どうせ使用者は殺したし使われない運命だ。

武器は使ってこそ輝くものだ。

という訳で貰った（盗んだ）。

俺の武器は大体が紛争地帯で拾ったか

そうやって依頼中に入手したものだ。

まあ何はともあれ、始めるとしよう。

戦闘開始だ。

第8話 「首都ローマ防衛戦 東門」

戦闘が始まる。

この血が騒ぐ気分も何時振りだろうか。

まずは1人目を探そうか。

体勢を低く、腹這いになって銃身を戦場へ。

「……………懐かしいな、戦場は何時になっても」

容赦なく、人を残酷にするものだ。

最後に紛争地域でやったのは……………確か8年前か。

双眼鏡を覗いて敵将の場所を確認、

距離は1、1・5〜2キロ、つてどこか？

まあ十分だな。

馬に乗っているが、問題なし。

銃を構えてスコープを覗き込み、頭を撃ち抜く。

銃から手を離して再び双眼鏡。

「はい沈黙、死亡確認つと」

馬の揺れよりワイバーンの

起こす風の方が厄介だったなあ、

などと考えながら弾倉を入れ換える。

いやあ、風が強くないって素晴らしい。

次の標的を撃つてもいいが、

今は不審がられるから今は止めておく。

この時代に狙撃銃があることがおかしいからな。

銃の始まりは8世紀だった、と思う。

「まあしかし、この時代でも槍やら剣やら

随分としつかりしたもん使ってるよな……………」

形状も、状態も。

これも人理焼却の影響かねえ……………

厄介、なんだよな。

その分、切れ味もいいから立香が危険になる。

「まあ俺も人間やめてるし」

自覚は一応ある。

サーヴァント、キャスター並みの魔力の量らしい。

ダヴィンチが驚いていたが。

アサシン向きなんだよな。

接近戦も十分にいけるけど。

オルレアンで本格的に人間やめたからなあ。

立香たちの戦闘をアサルトライフルで援護。

グッドサインを立香がこちらへ送ってくる。

サインを返して周囲を見渡すが、

……………こりや夜までかかるな。

時間をかけて敵を狙い撃っているのと夜になり、
するとドクターから連絡が入る。

『そろそろ立香ちゃんも疲労してる。』

真機くん、助太刀を頼んでもいいかい?』

「了解しました、立香とマッシュ、」

沖田を下がらせるよう伝えます」

『……………うん? 沖田さんまで下げるのかい!?!』

「頑張ってくれましたから。」

この数なら後は俺1人で十分かと」

ドクターの連絡を切り、

立香たちへ連絡を入れる。

『どうかしましたか、真機先輩!』

戦闘中なので連絡は控えて下さい!』

「悪いな、沖田、味方の連中と戦闘離脱を頼む。

後は俺1人で片付ける。お疲れ様だ。

5分以内に離脱しないと巻き添え食らうぞ。

離脱が完了したら全員耳を塞いでいてくれ」

『ちよっ!?! どういう——』

通信を切断。

今夜はゆっくり休むつもりなので

魔力を使っても大丈夫だろう。

手榴弾を5つ、生成する。

まあ字面を見れば分かると思うが、爆撃する。

立香たち、味方の兵士たちが

離れたのを確認して安全装置を外す。

そして手榴弾をバラまくと

爆発音が響き渡り、敵兵たちが宙を舞う。

ああ〜爽快だわこれ。

カルデアで無双系のビデオゲームを

立香たちとやったが、その感じに似ているな。
だが、やはりこの爆発の肌に響く熱があつてこそ。
死に損なつた兵を片付けよう。
壁に背をつけて滑り降り、爆発の土煙の中へ。

※

姿勢を低く、腰のナイフを抜いて

兵士たちの喉頭隆起（喉仏）、頸椎を裂いてゆく。

喉仏を裂いた場合は大量出血、呼吸困難。

頸椎を裂いた場合は即死。

どちらにせよ死ぬので回り込む必要もない。

呼吸困難と言つても声を上げれないし。

「ぎいっ!？」

あ……か、ひゅ……っ!？」

「戦場にいるなら死ぬ覚悟は出来てるだろ？」

兵士なら常勝が有り得るなどと思うなよ」

斬る場所がズレてしまい、

声を上げた兵士に忠告する。

一瞬で喉頭隆起を斬って気道を開けると、泡を吹いて事切れた。

残りは、付近にいるのは6人か。

兵士の倒れる音は爆発音による

耳鳴りで聞こえることはない。

だが、どうやら恐怖から

数人で集まり、固まっているようだ。

小刻みに震えているが、

戦場で怖気づくのは死ぬことと同義。

兵士の1人に音もなく接近し、

右手で口を塞いで他の5人から離れさせ、

頸椎を左手のナイフで切り裂く。

人肉を断つ感触。

ナイフ越しにそれが伝わる。

肉へ刃を入れ込み、

そこから痛むこともないよう一瞬で。

血が噴き出す瞬間に次の獲物へ移る。

同じように、他の兵士たちの首を裂いていく。

※

「さて、煙が晴れたか」

アサシンよりアサシンしてる気がするが。
取り敢えず土煙が晴れる。
ナイフで倒したのは28人。
俺から10メートルの範囲内で残ったのは3人か。
上出来、と言ったところか。

「ひいつ!? てっ、撤退、撤退だ!!」
「ば、化物だあああっ!!」

酷い言われようだ。
こんな戦場なら化物の1人や2人はいるだろう。
つーかお前らの將軍もだろうが。
まあ敵将をわざと残していたので、
撤退まで持つていくことが出来た。
立香たちの所に戻ろう。

「3人ともお疲れ様、戻ったぞー」
「……………ええ」
「そんなに引かなくてもいいじゃないか」
「フォーウ……………」

傷つくぞ。
つーか沖田とフォーウくんまで引いてるし。
俺泣くぞ、泣いちゃうぞぞ?

「あんなに早く片付くものなんですか……………?」
「まあ皆が頑張ってくれて疲弊してたからな。」

「というかマシユ、キミは急所を狙いたまえよ」

「なんですかその口調？」

「なんとなく」

土煙で見えないのはこつちも同じなのだ。

なんと言うか、仲間だし……………

俺の対人戦闘はあまり見せられたものではない。

殺すことだけに特化してるからな……………

「戻りましょうか、休める内に…こふっ!？」

「あっ」

「お疲れ、沖田。ゆっくり休もうな」

なんかもう慣れてしまった俺たちだった。

第9話 「シールド」

先日、無事戻り眠って一夜を明かした俺たちは、霊脈のある山を目指して歩いていた。皇帝さんにも許可を貰い、のんびり進んでいる。

「そう言えば、マシユ」

「はい、なんででしょうか」

「その盾の英霊、誰だか分からないんだっただよな」

「そうですね……………」

「私がまだ未熟だからでしょうか……………」

「あーいや、違うって。」

「それについて皆で考えないか？」

「もしかしたらマシユの新しい力とかあるかもだ」

その盾、マシユの能力。

デミ・サーヴァントとはいえ、

クラスも不明だとかは流石に気になることだ。

「クラスは……………エクストラクラスか？」

「エクストラクラス？」

「エクストラクラスは確か、

セイバーなどの7騎、

それ以外のクラスでしたよね」

「マシユの言う通り、ジャンヌがその例だよな」

「へえー」

立香はまだよく分かってない感じか。

まあイレギュラーばかりらしいし。

ドクターたちからの連絡も繋がる。

『ふああ…………おはよう、4人とも。』

マシユのクラスの話かい?』

「おはようございます、ドクター」

『マシユの話からはズレるけど、キミたち』

マスター2人も結構な耐魔力があるみたいだ。

どうしたんだいキミたち』

「えっ、私も?」

「俺もう人間やめたな」

特に立香の耐魔力が半端なく高いらしく

俺も立香よりはないが、

常人では有り得ないレベルだとか。

……………やっぱアレかな。オルレアンの。

「なんか凄いですね……………」

『脱線させて悪いけど話を戻そうか。』

マシユのクラスは盾のクラスだから……………うーん』

「そうですね……………シールド……………」

“シールド”なんてどうでしょうか?」

「『『それだ!』』」

「フォーウー!」

「えっ!?!」

なぜそんな簡単なことに気づかなかったんだ……………

シールド、か。

盾を使うクラスなんて聞いたこともないが、

エクストラクラスとしてシールドか。

『そうだね、どうやらバーサーカーの』

クラス相性すら無効にしているみたいだし、

エクストラクラス、

シールドでいいんじゃないか？」

「うん、カッコいいね」

「そ、そうですか……………」

そんな話をしながら山を登ると、

霊脈地に到着する。

『案外あっさり到着できたみたいだね』

「いや、ありやあ……………」

何か群がっている。

えー？なにあれー？

青白い光を纏ってるんだけど。

「どうやら死霊系の敵性生物のようです！」

『自然発生してるのだとしたら』

かなりの霊脈地だ、頑張ってくれ』

「……………あれ？どうしたんですかマスター」

「あー、えつとね？」

いやあ……………幽霊に銃って効くの？

先日のオルレアンの件でワイバーンの鱗だろうと

貫く魔弾に改造したんだけど、幽霊？

取り敢えず魔力で作ったのなら効くだろう。

気を取り直して銃を構える。

第10話 「ガリアへ」

幽霊たちを蹴散らし、サークルの設置を終えた俺たちはローマへ帰還する。すると、丁度皇帝さんと通路で会う。

「おお、戻ったか」

「ただいま戻りました。」

ネロさん、どうされたんですか？」

「うむ、戻ってすぐで悪いが、

これからガリアへ遠征へ行こうと思う。

4人には共に来てほしい、どうだ？」

『ガリアは連合との戦いの最前線だった筈だ、もしかしたらレフやサーヴァントと

出会すかも知れない。

危険は伴うけど……どうするんだい？』

「そっか、それじゃあ行こうか？」

「そうか。なら俺たちも同行させてくれ」

「決まりだな！」

少しの間だが、準備を頼むぞ！」

俺たちも準備に取り掛かり、

ローマを三時間足らずで再出発したのだった。

「というか、真機、マシユ」

「ん？」「はい？」

「そなたら、馬に乗ることが出来たのだな」

現在、森林地帯を馬に騎乗して進んでいる。

後ろから立香がしがみついているが、

横では馬に乗るマシユに

沖田がしがみついて乗っている。

「今乗れたって訳じゃないが、

首都を出る前に兵士の1人に教えてもらってな」

「私には騎乗スキルがありますから」

「私にも一応あるんですが……」

『沖田さんの騎乗スキルはランクがEだから……』

まあ多分、申し訳程度のクラス補正だろうね。

真機くんは単純に才能じゃないかな』

沖田が乗ろうとした時は馬が暴れて大変だった。

立香も振り落とされそうになっていたし。

俺の場合は一度落ちかけたが乗ることが出来た。

「あはは……でも何でこの組み合わせ？」

「私もおかしいと思うのですが」

「サーヴァントの二人は戦闘の時は降りるだろ？」

俺は馬から中距離銃撃、立香もここから

指示を出した方が安全だろう、ってドクターが」

『だから2人には互いのマスターが乗る馬を

守りながら戦ってもらうことになるけどね』

しかも長距離を進むのだ。
楽に進むに越したことはない。

『サーヴァントと人間の体力の違いは

かなりのものだからね。真機くんは例外として』

「俺は体力もだが魔力燃費も悪いからな。

俺がサーヴァントだったらとよく思うな」

「その場合もカルデアの電力がね。

まだ完全復旧とはいかないようですし」

『——と、前方に生態反応だ。』

サーヴァントはいないけど、どうやら敵だ』

その言葉を聞いて、一応銃を生成しておく。

コルト・ドラグーンと呼ばれる回転式拳銃。

少し古いものだが、

元々はアメリカ陸軍が使っていたものだ。

「ほーう、魔術師殿は便利だな。

良ければ宮廷魔術師に召し抱えたいところだぞ」

『お、王宮遣え……………?』

「オラ待たんかいドクター」

『いやだなあ、冗談だつて。』

そろそろ来るよ、右と左から挟撃だ』

「うむ、蹴散らしてくれる!」

4人とも、左の軍は任せたぞ!」

ネロが走り去る。

俺とマシユも馬を駆って戦闘体勢をとる。

と、耳栓を生成して立香に渡す。

「立香、耳栓しとけ」

「あ、ありがとう」

「飛ばすからしっかり掴まってるよ！」

「行きます！マスター、指示を！」

馬を駆り、敵陣へと躍り出る。

サーヴァントの2人が馬を降りて得物を構え、

馬上から俺は馬を駆りながら銃を撃ち、

立香が指示を飛ばすのだった。

第11話 「2人のサーヴァント」

「……………んう……………むにゃ」

あの後、俺たちは軍を一掃し、無事に夜営地にたどり着いた。

そして現在、手頃な岩に座って立香とマシユが

二人のサーヴァントと模擬戦をしているのを見る。

相手はブリタニアの女王、ライダーのブーディカ、

反逆の剣闘士、バーサーカーのスパルタクス。

二人はローマに召喚されており、

ネロ側についているらしい。

ちなみに沖田は疲れたのか、

俺の肩に頭を乗せて寝ている。

沖田に無理はさせられないからなあ。

先程の戦いで吐血しなかっただけマシだ。

「マシユの戦い方……………なんか違うんだよな」

俺の感想はこれ。

うん……………何かが違うが、何だろうか。

「なんであんな面倒な戦いを

……………ああ、成る程、そういうことか……………」

違和感に気づく。目的の違いだ。

マシユは、立香を守るために戦っている。

守るような立ち回りをしているから

違和感を感じたのか。

俺と沖田は敵を仕留めるために戦っている。

「……………マシユには、守る方がいいだろう。今は、だが。」

「おそらく、そのうちにマシユも殺すために戦わなければいけないようになる時がある。だから今はこれでいい。」

「……………む、真機は良いのか?」

「いや、いいって言われた。」

「……………大丈夫か皇帝さん、顔色が悪いけど」

「少し頭痛がな……………余は早めに休ませてもらうぞ」

「分かった、ゆっくり休んでくれ」

「うむ……………」

「皇帝ネロは頭痛持ちだったのか?」

「初耳だな……………と、ドクターから連絡が入る。」

『食器の鉛中毒だったとか、

生まれつきだとか言われているみたいだね。

まあ色んな説があるみたいで詳細は不明だ』

「へー……………そうか、沖田もだったな」

『沖田さんは肺結核だったかな?』

「スキルとして成立してるから

治らないのは残念だったね……………」

「一度、聖杯を使って治らないか試した。

英霊の身体に手術は不安だ。

「だから聖杯を使わせて貰ったのだが……………」

「効果はなかった。」

「立香も沖田もマシユも守りますよ、ちゃんと」

『……………そうだね。でも無理はしないでくれ。』

キミは無茶ばかりするからね」

「無茶で仲間が助かるなら安いもんですよ」

『そういう所だよ。』

とにかく、無理だけはしないように。

これは所長（代理）命令だからね』

「ははは、了解です、ドクター」

ドクターからの連絡を切り、

終わった立香たちの様子を見る。

模擬戦はマシユがなんとか勝利したようだ。

立香の采配がとても上手だからか、

二人を相手してもマシユがそこまで疲れていない。

「お疲れ様、 2人とも」

「戦闘終了……………先輩、お疲れ様です」

「うん、ありがとうマシユ」

「ふあ……………終わりました…………？」

ブーデイカたちがやって来る。

沖田も起きたようだ。

「凄い子たちね、マシユも立香も」

「素晴らしい者たちである。」

「この叛逆、負ける道理はない！」

「素直に誉めた……………」

「それだけ気に入ったってことですかね」

まあ俺たちは相手にされなかったのだが。

それもなんとなく分かる。

「血の匂いが染み付いてるからね、特にキミは」

「やっぱ分かるか」

「圧政の香りだ。」

故に我が愛の対象者なり」

「怖っ!?マスターこの人怖いです!」

「いやまあ……仕方ないというか」

「安心しなよ、私たちは敵対する気はないから。」

ただねえ………なんというか、仕方ないんだけど」

「殺しすぎた、ってどこか」

「……………」

結局、前の戦いで俺も近くまで来た兵士を

馬に蹴り殺してもらったり

銃を撃つたりしてたからだと思う。

立香はマシユたちの戦闘に集中してたから

気づかないようにさせてたが。

「ごめんね、悪意はないんだよ」

「いやまあ、こつちが悪いし」

「ちよつとやり過ぎた感がありますしね……」

「圧政しながら叛逆するお前たちもまた、

我らが同士である。気負うな、青年よ」

「お、おう」

相変わらず何を言ってるのか分からないが、
取り敢えず仲間として認めてくれたらしい。

こうして、一時を俺たちは夜営地で休むのだった。

第12話 「ガリア奪還作戦」

「露払いは私とスパルタクスがやる、

あんたたちはネロと本陣へ突っ切れ！」

「はははは、素晴らしい。此処には全てが在る。

圧制者の魔手と化した兵は幾百、幾千、幾万か」

「うむ、色々頼んだぞブーテイカ！」

ガリアへと俺たちは馬を駆る。

ガリアは連合軍の1人「皇帝」に占領されて

おり、奪還作戦の真つ最中。

しかし兵ではなく、

岩の怪物……ゴーレムが立ち塞がる。

仕方ない、降りるか。沖田と目を合わせる。

マシユへ立香を頼み、俺と沖田は馬を降りる。

「3人とも先に行け！」

「大丈夫なの!？」

「すぐに追い付く！」

「さっさと蹴散らすぞ沖田！」

「了解しました！」

岩の身体に銃弾は通らない。

勿体ないので銃生成はしない方がいいだろう。

そもそも、俺の魔力銃は1時間は持つが

これは長いわけではない。

ゴーレムの身体の薄い場所、腹へ

拳を避けて魔力放出でブーストさせた蹴りを放つ。

「硬っ………!」

「マスター、一体ずつ倒しましょう！」
「分かった！」

沖田が蹴りを放った場所を斬りつけて
ゴーレムを両断する。
狙うは腹、もしくはは頭部。

「人間以外だと楽じゃないな……！」
「ですね……」

手榴弾をゴーレムの口に突っ込み
周囲一帯を爆発させる。
沖田の剣閃で岩を剥がして突き蹴りで破壊する。
と、こんなものか。

「後は任せて！」
「おお圧制者！刮目せよ！」

ブーデイカとスパルタクスが兵を
蹴散らしながら進んできて合流する。
それを確認、沖田と共に乗馬。

「お願いします！」
「頼んだ！」

あの3人が進んだ方向へ、再び突き進む。

立香たちが見えてくる。

巨腕の剣を持ったDEV……ゲフンゲフン、
ふくよかな男と対峙しているようだ。

「私は来た！私は見た！」

ならば、次は勝つだけだ……!!」

あの言葉……

ガイウス・ユリウス・カサエルか！

「賽は投げられた」で有名なローマの軍人だ。

サーヴァントの強さは有名さ、高名さ。

ならば彼はこの地では凄まじい強さになる。

だが……ネロたちが奮闘している。

ここは手を出すべきではないだろう。

「沖田、周囲の兵士たちを倒す。

立香たちが危なくなったら助けるぞ」

「分かりました」

俺たちはカサエルの周囲の兵士たちと対峙。

ゴーレムも少ないがいる。

まずは雑兵から片付ける必要があるな。

「そらッ！」

ナイフで兵士たちの首を斬りつけていく。

数はかなり多い。

仕留めなければ攻撃を食らうので一撃。

と、何かおかしいことに気づく。

——なぜ、これだけの兵がいる？

敵の数が多すぎる。

100……いや、それ以上。

『真機くん、気をつけるんだ！』

そちらにもサーヴァント反応！

その兵士たちは宝具で呼び出されたものだ！』

「サーヴァント!？」

まだいやがったのか!」

斬り進んでいくと、奥に燃えるような男が現れる。

金の鎧、剣闘士のような兜、槍。

「これ以上の損害は守るため、

我がスパルタも参戦しよう。

攻撃よりも勇ましく、防御よりも遥かに硬く」

「スパルタ……そうか、スパルタの王か!」

「如何にも。サーヴァント、ランサー。」

我が真名はレオニダス!」

テルモピュライの戦いで有名なギリシヤ、

スパルタ王、レオニダス一世か。

また厄介そうなのが召喚されたな……!」

ナイフを構え直す。

「聞こえてました、マスター」

「ああ、行くぞ!」

「善なき戦いであれど、

私はお前たちを打ち砕くのみ!」

対、スパルタ王、ランサー、レオニダス。

相手にとって不足なし。

第13話 「V S レオニダス」

腰から抜いたりボルバー（コルト）を構える。
敵への切り札は2つ。
今使うべきかは見定める。

「マスター、前衛行かせてもらいます」

「頼んだ！」

「せええア！」

沖田が刀を構えて走る。

周囲からも兵士たちが殺到しているので
それを斬り進んでいく形となる。
それを銃弾で援護しながら前に進む。

「邪魔すんな！」

「ぐっ、はっ！」

兵士に至近距離まで接近される。
右足で顎を蹴りあげ、身体を捻って
腹へ左足で二発目の蹴りを撃ち込んで吹っ飛ばす。

「ぬああ！」

「マスター！」

「ぐ……………!?!」

なんとレオニダス本人が攻めてくる。
振り下ろされる槍を転がって回避。

「戦場において敵将を狙うのは常識だ！」

「敵将の強さを見定めるのも、常識、だろ！」

膝をついた状態から魔力放出。

予備動作無しに跳び突き蹴りを放つが回避される。

魔力放出で身体を捻って向きを変え、踵落とし。

が、盾で防がれる。

「く!?!」

「甘い！」

レオニダスの槍をギリギリで回避するが、

そのまま振り回されると回避できない。

「はあッ！」

「がつ!?!……………っ！」

沖田からの攻撃を背中に受けたレオニダスが

下がり、兵士たちが上がってくる。

何とか着地、沖田と背中合わせになる。

「助かった、ありがとう」

「いえ、ですがこの数……………厄介ですね」

「ああ、レオニダスに回復の隙を与えたくない。

……………沖田、レオニダスを任せていいか？」

「承知。……………ですが何をやる気ですか？」

「この数、あの爆弾でも無力化するの……………」

「切り札の1つ目を切る。距離を取ってくれ。

全方位に攻撃する、

そっちには向かないようにはするけど」

俺の言葉に背中越しに沖田の不安が伝わってくる。

そしてハツとしたようにこちらを向く。

「自爆とかじゃないですよね?!」

「しねえよ!?!」

「ちっと身体に負担がかかるだけだ!」

「……………むう、許容します。」

無理ばかりしないで下さいね……………」

「俺の無理は死ぬ時だ」

「じゃあ力入れないで下さい」

漫才のようなことをしてる

うちにも兵士は殺到してくる。

銃で牽制しながらヘッドショットを決めていく。

「詠唱がいる、それまで守ってもらっていいか?」

「そういうのですよ!」

「そういう指示を下さい!」

「はいはい、詠唱が終わったらお前にも分かる。

縮地で全力で俺から離れろ」

「承知しました」

沖田が離れる。

詠唱開始。

左腕を前に突きだし目を閉じる。

左腕の赤黒い魔力回路が起動、

燃え上がるような熱が身体を覆う。

「I l n, y a p a s d e D i e u」

喰らった魔力が血を沸騰させ、
熱、熱、熱が身体を、魂を燃やす。

「I l y a u n e f l a m m e d e v e n g e a n c e d a n s

炎が足元から噴き上がる。
炎の柱が空へ立ち昇る。

「黒き聖女の炎は今、

我に在り——燃えろ、焼き尽くせ、滅べ」

起動、接続、解放。

「死を以て、完成する」

詠唱終了。

~~~~~

あの時、ジャンヌオルタに呼び止められた時。

『最後に——提案があるわ』

俺は足を止める。

起き上がった消えかけのジャンヌオルタが  
こちらを見ていた。

『私を連れて行きなさい』

『……………どういうことだ?』

『私のスキル、『自己改造』。』

『アンタも使えるんでしょう?』

……………ええ、何で分かるのお?

完全に凶星だった。

俺の魔力量がおかしいのは生まれつきではない。

俺の家系に伝わる、もう1つの秘匿とされるもの。

それが、サーヴァントの持つスキル、

『自己改造』と類似したものなのだ。

魔術刻印、という魔術師の身体に刻むものがある。

魔術師が子に受け継がせる『固定化された神秘』

とでも言うべきもの。

それは普通、血の繋がりが

ないものには受け継がれない。

適合しない、と言った方がいいかもしれんが。

だが。

『……………そうだな、確かにできる』

とある魔術を通して、俺は完全に他人の

魔術刻印を無理矢理に適合させることが出来る。

我ながら最低な行為だとは分かっている。

だがまあ、暗殺者だし、俺。

『なんで分かった?』

『そりゃあ、ね。アンタの身体、人間だ』

なんて有り得ないほどボロボロなもの。

全身に魔術刻印が刻まれてるんでしょ?

あれだけ私との戦いで魔術を使ったら分かるわ』  
『……………気をつけないとな。』

『…っかお前元気じゃねえか』

『もう魔力切れよ、聖杯は私の元にはないし』

俺の魔術だが、先程の通り、

自己改造スキルと似ている。

自分の身体を改造して、それから

魔術刻印を刻む、というより吸収する。

ならば、サーヴァントであろうと吸収できる筈だ、

簡単に言えばそういうこと。

その過程にある、とある魔術と言うのが――

『魂喰い、覚悟は？』

『良いわよ、どうせ死ぬくらいなら』

魂になっても付きまといてやるわ』

『だから連れて行ってくれ、か。』

……………はは、面白い言い回しだな』

赤い魔法陣が展開される。

これは、あるサーヴァントの宝具を模倣したもの。

『精々、上手く私を使うことね』

『……じゃあな』

そして俺は、ジャンヌオルタを喰った。

~~~~~

「宝具、限定解錠——」

全ての邪悪を此処に、報復の時は来た！

これは憎悪によつて磨かれた黒き魂の咆哮！」

炎が拡散する。

「ラ・グロントメント・デユ・ヘイン
吼え立てよ、我が憤怒!!!」

爆炎が、周囲を焼き尽くす。

第14話 「帰還」

「う、うむ、2人ともご苦労であった」

「お疲れ様です……………」

沖田と声を合わせて言う。

俺……………というか、彼女の宝具をレオニダスも

宝具を発動して耐えており、そこにできた隙で

沖田が縮地で接近、倒した。

……………数十分前……………

『ぐ……………熱つ……………!?!』

『マスター大丈夫で——コフツ!?!』

『沖田ああ!?!』

……………

俺は左腕が魔術回路の熱に耐えきれず

焼け焦げて立っているのもやつと。

そして沖田は無理が祟ったのか吐血。

という訳で今は馬に腹這い、

俺の上に沖田が重ねて乗せられている。

歩く時の揺れで腹が結構キツイ。

『本当に何をしたんだい?』

霊器反応が突然現れたものだから驚いたよ……………

『これは私も興味あるねえ……………』

帰ってきたら解剖してみてもいいかい?』

「解剖!?!」

『流石に冗談さ。』

気になるのはホントだけどね。
身体をじっくり見せてもらおうよ?』

背筋がゾクツとするのでやめて下さい。

人道的じゃなさすぎるし……………

やだなー嫌われたくないなー。

人理のため人理のため人理のため…………… (自己暗示)

「それにしても……………先程の真機先輩が放った炎、

オルレアンの黒いジャンヌさんのものと

酷似していました。私も気になります」

「ギクツ!?!……………き、キノセイダヨー」

「真機くん口に出やすいタイプだね?」

人理のため人理のため人理のため……………

人理修復終わったら即逃げよう。

ホルマリン漬けどころか命狙われる……………

「真機先輩、私たちはジル・ド・レエとの

戦闘でしたが、黒いジャンヌさんと戦闘後に

何をしてらっしゃったんですか?」

「そういえば私も見てませんね。

話しをするって言ってましたけど」

「あっ (察し)」

「秘密だ秘密……………おい立香その

『言えないようなことしたの?うわあ……………』

みたいな顔やめる頼むからその考え違うから」

「えっ、マスター……………」

「違うっつってんだろが」

話変えよう、うん。

「そんなことより古き神だ。」

確か、小島に現れたんだろ?」

「神霊の類は召喚されないとのことでしたが……………」

「ふむ、地上の旅も飽きてきた。そこへ向かい、

そのまま海路でローマへ戻るとしよう!」

「じゃそこに行くか」

「『は?』」

えっ?」

「何言ってるの?馬鹿なの?」

『流石にそのままローマへ戻るのが普通だよね』

「あつ、もしかして

真機先輩渾身のジョークでしょうか?」

「滅多打ち!」

助けを求めて沖田の方を向く。

唯一の癒し……………!」

「流石の私もどうかと思いますマスター」

「死体蹴りやめてえ!」

こうして俺は沖田と共にローマへ

一足先に帰還することになったのだった。

第15話「歌」

ローマに帰還して2日。

「遅い」

立香たちが帰ってこない。

通信も繋がらず、カルデアも通信がダメ。

利手の左手が黒焦げのため俺は休養。

沖田が立香たちを兵と共に探しに行ったのが昨日。

俺は1人でベッド生活……だと思われたのだが。

「フオウー！」

「なんでさ」

なんでフオウくんこっちいるの？

昨日までいなかったよねフオウくん。

昼食を取り、部屋に戻ったら何故かいた。

「フオフオウ」

「んー？」

何だろうか。

フオウが珍しくベッドに座り、その壁に

もたれる俺の膝の上にちよこんと乗る。

「フオウフオウ、フオウ♪」

「……………」

「フオウ」

「んん？」

歌うように鳴き、
ビシッ、と俺を肉球で差すフオウくん。
聞き覚えのある歌だなー、と思っっていたら
俺の歌ってた鼻歌じゃねえか。
なんで知ってんのさフオウくん。

「えっ、歌えと?」

「フオウ」

「ええ……………」

でも人前で歌うの恥ずかしいんだよな……………
ん?人じゃなくてフオウくん?
まあそれもそうか。

「フオーウツ!」

「痛い痛いっ!」

分かったから!歌うからやめて!」

引っ搔かれた。

「いてて……………んじゃ、ご清聴下さいな」

「フオウフオーウ」

「ははは……………」

肉球を拍手のように動かすフオウ。

これは歌わざるを得ない。

唯一覚えてる、誰かの歌った歌を歌おう。

「1人になると、聞こえるの……………」

もう山に入るが、穏やかに。

普通なら盛り上がるのだがアレンジだ。

「♪」

良い歌詞だ、と、そう思う。

目を瞑り、フォウの毛並みを撫でながら。

「あなたがいる世界に私も生きてる……………」

一分ほど歌い手を止め、目を開ける。

「……………」
「清聴、ありがとうございました」

「……………」

「フォウくん、拍手。」

虚しくなるから無言やめて」

「フォウ」

と、部屋の外からカタリと不審な音がする。
瞬時に右手でナイフを抜いて構える。

「誰だ!!」

「うわっ!?!」「きゃあ!?!」「あいたあ!?!」

扉が開き、立香、マシユ、沖田が

ドサドサと入口に順に倒れる。

……………聞かれた?

「……………」

「フォーウ……………」

「あ、あははは、真機くん凄い歌上手だね!」

「お上手でした……………あはは」

「マスター素晴らしい歌声でしたよ……………」

問答無用。

「全員そこに、正座」

「「はいすいませんでした」」

盗み聞き犯の額が赤く染まった。

「「いったあ……………」」

全員にデコピンを食らわせた俺は顔を隠す。

聞かれた……………歌を聞かれた……………

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。

「凄い高音上手だったね真機くん」

「はい、とても穏やかで素敵でした」

「これは惚れますね」

「お前たち反省してないだろ？」

「反省しました」

反省の足りない全員に

もう一発デコピンをプレゼントした。

第16話「決戦へ」

現在、俺たちは馬を走らせている。

「ほー、ゴルゴン三姉妹のステンノ、ね。

そりや確かな情報なんだよな？」

「はい、私たちはそこへ

向かってるんですが……マスター、

そういうのは早く聞きましようよ」

呂布とスパルタクスが敵勢力を追って

戦線を離脱してしまい、ブーデイカが捕まった。

ブーデイカは立香とマシユ、ネロに任せ、

俺は沖田、荊軻と共に呂布とスパルタクスを

連れ帰っていた。

このまま進軍し、連合軍との決着をつける。

らしいのだが、そう簡単に行くとは思えない。

「アルトリウスも音沙汰なし、か」

というか、何がしたいんだろうか、コイツ。

切り札、とでも思えばいいのか？

かなり強い魔力を持っているようだったが。

「敵の魔術師も現れてませんしね。

戦況は分かりません、気を引き締めましょう」

「ああ、っと立香からか」

通信機を取り出し、映す。

『真機くん、ブーディカは助けたよ。』

色々あったけど………そっちはどう?』

「問題ないよ、2人も大丈夫だ」

『なら良かった、』

「じゃあもうすぐ合流して——っ!』

「どうした!?!おい!」

通信が切れる。

慌ててドクターに繋ぎ直す。

「ドクター、何かあったんですか!?!」

『………ローマ建国王だ。神祖、』

ロムルスが、立香ちゃんたちの前に現れた』

「神祖ロムルス………!?!」

『急いでくれ、こちらの軍の指揮が下がってる!』

「分かりました!」

通信を切る。

「沖田、速度上げるぞ!」

「はい!」

馬を駆って速度をあげていく。

距離ではおそらく10kmはある。

「間に合ってくれよ………!」

「……………おお、真機か！よくぞ呂布と
スパルタクスを連れ帰ってくれたな！」

「あ、あれ？」

なんとか連合本拠地の駐屯地に辿り着く。
そこで立香たちと合流するが……………
ネロ、元気じゃん。
落ち込んでると思ったが……………

「いつも通りだよ、ね」

「うむ、何の問題もないぞ」

「……………まあそういうことにしときましようか」
「そうだな。」

さて、これで合流できたな」

おそらく立香が励ましたのだろう。
何はともあれ、これで合流できた。

「うむ、潜入経路は既に荊軻が調べた。
少数精鋭、余たち5人で行くぞ」

「うん、急ごう」

「……………」

「マスター、どうかしましたか？」

「ん、いや……………レフが、

まだ出てきてないと思ってな」

少し喋ったが、奴なら俺たちに

しびれを切らして出てきてもおかしくはない筈だ。

だが、何故出てこない？

単純に面倒だから、と思われているのか。

「急ごう、まずは神祖ロムルスを倒さない」と

「ああ」

第17話 「ネロの覚悟、再びの悪辣」

俺たちは連合の居城へと突入、
荊軻たちに怪物たちを任せ、
先へと扉を開ける——そこには。

「来たか、愛し子」

巨大な1人の男が、そこにいた。
ただそこにあるだけで、
押し潰されるような威圧感を感じる。
ネロが前に進み出た。

「うむ、余は来たぞ、神祖ロムルスよ!!」

「……………良い輝きだ。ならば、

今一度呼び掛ける必要があるか、皇帝よ」

「いいや、必要ない。

今、そなたが口にした通りに、

過去も、現在も、未来も、

余こそがローマ帝国第5代皇帝に他ならぬ!」

ネロが言う。

彼女は、国を背負っているのだ。

自信を信じる国を、ローマの民を。

だから、立つのだろうか。

信じてくれる、ただの他人のために……………?

理解は今は出来ない。

だが、おそらくそうじゃないかと思う。

「故に、神祖ロムルスよ!」

余は、今のローマ皇帝としてそなたと相對する！
行くがいい、カルデアの者たち。
ここは余が引き受け——」

瞬間、立香がネロの肩を掴む。

「ううん、私もついてる。

ネロは一人じゃないよ、ね」

「立香……」

「……………立香、ネロを」

俺は沖田と目を合わせ、
そして立香と向き直る。

「分かった。気をつけて」

「そつちもな。」

あと——皇帝ネロ」

「む？」

ネロと顔を合わせる。

おそらく、だが。彼女は。

「……………あなたは、皇帝だ。」

自信を持って、自分の道を貫くんだ」

「……………ふっ、言われずとも。」

余は、このローマの皇帝であるぞ？」

笑い、拳を突き合わせ、握手を交わす。

そして沖田と再び目を合わせ、走り出す。

ロムルスの横を突っ切ったが、

特に何もしてはこなかった。

「マスター、良かったんですか？」

「多分だけど、大丈夫じゃね？」

「多分って……………」

沖田と通路を走りながら話す。

確かにロムルスは強敵だろうが、

何故か大丈夫だと言う確信に近いものもある。

ネロだが……………どこか、何か、親近感が沸くのだ。

彼女なら任せて大丈夫、だと思おうような。

「……………ここを進めば、あの男が」

「ああ、気をつけて行こう。」

何をしてくるか、分からないからな」

戦闘音が聞こえ始める。

レフ・ライノールはこの先だ。

このまま突っ切る。

が、もちろんそう易々とはいかないようだ。

通路を塞ぐようにゴーレムが出現する。

「邪魔をするなよ！」

「マスター、素早く片付けます！」

それぞれの得物を構える。
魔力は大分回復しているのでさっさと蹴散らす。

「image makeup……!!」

ランチャーを生成、即座に装填し

通路ごと現れたゴーレムを吹き飛ばす。

爆煙の中に沖田が突っ込み、

残ったゴーレムたちを斬っていく。

煙が晴れたと同時にダツシユを再開し、

現れるゴーレムたちを銃を使って

沖田と共に蹴散らしながら進む。

「見えました、あそこですマスター！」

「！」

沖田が指差す方向に扉があった。

ゴーレムたちを無視し、扉を蹴り開ける。

その中にいたのは――

「おや、まさか君たちとはね。

あの時に肩を撃った忌々しい人間と、その

サーヴァントとなった剣士じゃないか……!!」

「見つけたぞ、レフ!!」

「その命、貰い受ける!!」

得物を向け、叫ぶ。

第18話「魔神」

「ほう、少しは力をつけたようだな」

「元々、薄汚ねえ魔術師

1人くらいなら軽く殺せるがな」

レフに言い放つ。

奴が手にしているのは黄金の杯、

オルレアンで見たものと同じ、聖杯だ。

と、ドクターから連絡が入る。

『一端落ち着いてくれ、2人とも。

それにしてもレフ、王が危機だったのに、

君はこうしてここにいる。

裏切りが板についたのか知らないけど、

カルデアの時より生き生きしているね。

それが本性かい?』

「そうさ。私はあの方にだけしか遣えない。

あの方以外の誰かに遣えるなど有り得ない」

「あの方?」

「おっと、口が滑ったね。

それにしても君たちがフランスで

活躍してくれたお陰で、私は大目玉さ。

神殿から追い出され、聖杯を愚者に与えて

それを嘲笑する愉しみも全て台無しだよ、全く」

レフの言葉から情報を抜き取っていく。

まず、レフには遣える者がいる。

神殿と言う場所が本拠地、追い出される、

ということはあの方を守る別の誰かがいるのか?

今はまだ情報が少ない。
だがレフが聖杯を保有し、
各時代を狂わせる誰かに渡している張本人だ。

『そうか、神祖ロムルスは

人類の滅亡を良しとしていなかった』

「だから貴様が自ら動いた、ということか」

「残念だったなレフ、

全ての人間が愚者だと思ふなよ」

「ほぎけ、カス共。

人間なんぞに初めから期待などしていない。

人理、人類を救うう？

馬鹿め、抵抗は全て無駄、無意味だ!!」

レフが聖杯を掲げる。

魔力がレフを中心に渦を巻き始める。

「哀れに消え行く貴様らに！

今！私が！王の寵愛を見せてやろう!!」

聖杯の光がそれを覆い尽くした。

眩しさに俺たちは目を覆う。

そして、光が晴れたそこにあつたそれを見て、

俺と沖田は目を見開く。

「な、これは……………!？」

「……………っ!!」

『なんだ!？』

吐き気のするほどのその風貌。

この世界の何よりも醜い、そんな印象。

巨大な黒い肉塊の柱。
所々に無数の赤黒い目が点在している。

『この魔力に反応……………幻想種でもない、
これは……………伝説上の“悪魔”の反応か……………!!?』

「悪魔!」

「改めて自己紹介しよう、

私は、レフ・ライノール・フラウロス!

72柱の魔神が1柱、魔神フラウロス

——これが、王の寵愛そのもの!!」

72柱……………魔神……………フラウロス……………そして、王。
この単語の数々から予想されるのは、
……………考えたくもないが、まさか。

「ソロモン72柱の大悪魔……………!!?」

『そんな筈はない、

魔神なんて存在しやしないんだ!』

「ドクターさん……………?」

『詳細は不明、だがそれは危険すぎる!

来るぞ……………ここで完全に撃破してくれ!』

魔神、フラウロスをここで、倒す——!!

得物を構え、俺と沖田は魔神と対峙する。

「行くぞ!」

「承知!」

第19話 「V S 魔神フラウロス 1」

甲高い声のようなものをあげ、
魔神の目が光る。

「何だ………!?!」

「マスター!」

沖田に服を引かれ、それを回避する。

黒い波動のようなものが、爆発を起こした。

『魔力による爆発だ!』

それともかなりの広範囲、気を付けてくれ!』

「………チツ、マジか………!」

「し——ッ!」

沖田が縮地による高速接近で

斬りつけるが、肉の柱は怯みもしない。

その目が、沖田を“凝視”した。

「………っ!?!」

「させるか!」

何かを感じ、短銃で瞳の1つを撃つ。

それにより狙いが逸れたのか、

沖田の傍の石の地面が割れ、焼け焦げる。

何かのスキルか………!?!

ともかく、奴の目が攻撃の合図だ。

「沖田、倒れるまでゴリ押し!」

攪乱と援護は俺に任せて、倒せ!!」

「……………っ……………承知っ!」

今の銃撃で魔神の狙いが俺へと変わる。
だが、沖田の返答に迷いがあつた。
それは。

『君は人間だろ!?それともあの広範囲の

爆発を避ける手立てでもあるのかい!』

「……………ぶっちゃけ、ないです。」

でも今は、俺に出来ることをしないと」

『……………っ、帰って来たら傷を見せること!』

「了解です……………っ!」

帰れたらですけどね、と言おうとした瞬間、

“凝視”が来る。

ほとんど勘だったが、左へ跳んで直撃は避けた。

……………直撃は。

「づっ……………言わんこっちゃねえな……………!」

右手が焼け焦げる。

ビリビリと火傷が広がっていた。

着地と同時に爆発の合図、目が光る。

足に身体強化を施し、跳躍して回避。

銃に弾を込め、目を狙って撃ち放つ。

沖田が合わせてくれたようで、

命中した目を更に斬りつけた。

そして、少し怯む。

「確かに厄介だけど、弱点が丸出しなんだよッ!」

「せえア!!」

連続で沖田が追撃を仕掛ける。

その間にも他の目が

俺を狙って爆撃を放ってくるが、何とかする。

「つとー!」

どうやら連続の爆発はできないのか、

一呼吸ごとに襲ってくる。

その間での着地と跳躍の時間は十分なので、

魔神の目の攪乱を行いながら

銃撃も交えて回避を続ける。

追い詰めてきた、その時だった。

「ぐ、っ!?!」

目がまばたきをしたかと思うと、

突然放たれた爆風が近くにいた沖田を吹き飛ばす。

沖田に飛び付き、抱き止める。

そして魔神へ目を向けると、何かが聞こえた。

【覚醒の時来たれり】

おそらく、強化系統のスキルだろうか。

背筋が凍る感覚を味わう。

そして、詠唱も無しに、それは訪れた。

【焼却式・フラウロス】

逆転の一手。

サーヴァントで言えば、宝具レベルのもの。

考慮していなかった。

そして、地面から迸る紫の光の柱に吞まれ――

「……………何を、して」

その光が収まった時、

血で濡れた沖田の姿が、目に入った。

こちらを守るように、手を広げて、立っていた。

「無茶、ばかり……………するから、

私に、こう、させたんですよ……………」

「……………あ……………っ……………！」

言葉が出ない。

ダメだ、これは、こんなのは、絶対に、
サーヴァントを構成するエーテルが、
ほつれ、ほどけて……………

俺は無意識に落ちた。

第20話 「V S 魔神フラウロス 2」

「真機くん、正気に戻るんだ！」

サーヴァントは令呪で霊基を修復できる！」

膝をついた真機の意識が消失し、

カルデアの管制室でアラートが鳴り始める。

ロマンは連絡越しに叫ぶが、

真機の意識は完全に途絶える。

職員たちも慌て始め、

そしてロマンが立香に連絡しようとした、

その時だった。

人は、無意識でこそ真価を発揮するという。
それは、無の境地、とでも言うのだろうか。

「マス、ター……………!?!」

ゆらりと真機が立ち上がる。

その左手の令呪が輝き、沖田を光が包む。

霊基が修復されるが、沖田は驚くだけ。
真機の顔は虚ろで、
まるで魂が抜けたかのように、その目に光は無い。

「……………」

真機は銃を捨て、左手にナイフを構える。
いや、構えるというより、無造作に
床へナイフを手にした腕を垂らした。
そして――

ナイフを、魔神フラウロスの目玉に突き刺した。

「速っ……………!?!」

縮地と同格の速度。

まるで瞬間移動したかのような速度だった。
しかも距離は20mはあった筈だ。
その距離を、認識できない程の速度で詰め、
そしてナイフを振るった。

更に真機はナイフを上へ斬り抜き、
地を蹴って魔神の身体を蹴り、上空へと上がる。

「死ね」

ただの一言、それに乗せられた殺気。
言霊、に近いもので、
確実に獲物を仕留める、というその言葉に
乗せられた殺気が、空間を凍りつかせた。

何度も戦場で味わったことのある

沖田ですら背筋が凍り、

フラウロスも魔力爆発で撃ち落とそうとしたが、その凄まじい殺気に圧倒され動きを止める。

そして、魔神の身体にナイフを突き立てた。

重力による自由落下に入り、更に魔力放出により威力と速度が底上げされ、

魔神の体躯が縦に切り裂かれる。

甲高い断末魔を上げて、魔神が切り裂かれた場所から爆発するように光を放った。

「!!」

その光景に、カルデアの者たちを
含めた誰もが息を飲む。

それは恐怖か、その動きの華麗さか。
流れるような動作で、魔神を終わらせた。

トツ、と軽い音を立てて真機は地に降り立つ。

「……………マスター」

「……………」

それは、その声のした方に虚ろな目を向け、
全身の力が抜けたかのようにその場に倒れ込む。

「マスター、だ、大丈夫ですか!？」

沖田が駆け寄り、倒れた真機を抱き上げる。

意識はないが、どうやらそれだけのようだった。息もしており、命に別状はないようだ。足音が聞こえ、沖田は振り替える。マシユ、立香、ネロが走ってきていた。

「あ、いた！」

「沖田さん、真機先輩は無事ですか!？」

「な、何とか……………」

『みんな、気をつけてくれ！』

まだレフの反応が残ってる!』

ロマンの言葉に、真機以外の全員が

魔神のいた方向を向いた。

そこにいたのは、苦痛に顔を歪めたレフだった。

縦に切り傷のようなものが刻まれている。

先程の斬撃が原因だろう。

「ぐ……………ば、かな……………!？」

たかが英霊と人間如きに……………我が、御柱が……………っ」

「そこまでだ、魔術師よ。」

貴様の企みもここで終いだ」

「いいや、計算違いだ、そうだ。神殿から、

離れて久しい故に、壊死が、始まっていたのだ。

だが、ククク、私が、

保険を用意していない、とでも?カルデア……………」

『!』

聖杯の活性化を確認した、

まだ何かするつもりだ、気をつけてくれ!』

レフが聖杯を掲げる。

「来たれ！」

破壊の大英雄、 “アルテラ”!!!」

聖杯の光が周囲を照らした。

そして、光が晴れた時。

」

凄まじい魔力を纏って現れたのは、サーヴァント。
目を開いただけで、威圧が放たれる。

「あれは………！」

「ふっ、ふははははは!!」

終わった、終わったぞ、ロマニ・アーキマン！

このサーヴァントこそ究極の蹂躞者——」

「黙れ」

「え」

一閃。

レフが、真っ二つに割れる。

アルテラにより斬られたためだった。

そして、聖杯を拾い上げたアルテラは、

それを吸収し始める。

誰もがその状況についていけず、

言葉を失っている。

口を開いたのは、アルテラだった。

「私は——フンヌの戦士、そして大王である。

この西方世界を滅ぼす、破壊の大王」

そして、その手の剣を振り上げる。
全員が危機感を感じた。

「何か……嫌な感じが、するぞ!!」

余にも分かるぞ、4人とも!!」

『これは……この魔力は、対城宝具!?』

対城宝具クラスの真名解放が来るぞ!!』

「マシユー!」

「はい!宝具、展開します!!」

沖田はマスターである真機を見直す。

真機の身体が、光っていることに気づいた。

「これは——!?!」

沖田は目を見開く。

そして、宝具が解放された、その瞬間だった。

「やっと——我が出番のようだな……!!」

無骨ながら神秘的な剣を持った、
ボロボロのマントを羽織った金髪の男が、
真機の中から覚醒した。

第21話 「光穿つ閃光」

『な、なんだこの靈基!』

このレベルは……冠位クラスものだぞう!』

「ど、ドクター、どうしたの!」

『今の宝具の撃たれた瞬間に』

もう1人サーヴァントが目の前に出現した!

敵なら戦わずに逃げることをだけを考えるんだ!』

「そんなに……!」

カルデア一行はマシユ、そして駆けつけた

ブーディカの宝具で何とか防ぎきったが、

そこは荒野と化していた。

そして、直面するのは新たなサーヴァント。

煙が晴れると共に影が現れる。

「……カルデア一行、我が真名、

ルキウス・アルトリウス・カストウス」

『アルトリウス……?』

いや待て、どこかで聞いたことが……』

「話の途中だ、ロマニ・アーキマン」

『ひいつ!』

立香の通信機に写されるドクターを

アルトリウスが威圧する。

ネロたちもその圧迫感に凍りつく。

「私の剣、今は貴殿らに預けよう。

マスターは今、起き上がる。

詳細は真機が完全に目覚めてからだ」

「アルトリウスが立香たちの背後を指差す。
そこには、沖田が抱えている
目を覚ました真機の姿があった。」

「……………悪い、時間かかったな」

「マスター、大丈夫ですか……………？」

「ああ、大丈夫。」

「それで……………目覚めは最悪なんだが？」

立てるほどに回復した俺はアルトリウスを睨む。

ごっそり魔力を持っていかれた。

生成魔術が一回使えるか使えないくらいだ。

「顕現する際に身体を構成する魔力を貰った。

それとも、先の宝具で消し飛ばす方が良かったか」

「……………ちっ、まあいいか。」

立香たちもいるのか、魔神は……………？」

「倒したんですけど……………覚えてないんですか」

「……………？」

「ごめん、状況を確認させてくれ」

走りながら立香たちから状況を聞く。
レフは召喚したアルテラというサーヴァントに
殺され、その宝具は防いだが聖杯を吸収された、
ということらしい。
俺もアルトリウスとの契約の話を伝える。

『なるほど……ではアルトリウス、
あなたは我々の味方ということですか?』
「そうだ。今は力を貸そう」

その時、空から
聞き覚えのある鳴き声が聞こえた。
大量のワイバーンが、空を覆っていた。

『ワイバーン!?』
まさか、アルテラに引き寄せられたのか!』
「邪魔を……ただでさえ魔力が足りんというのに」
「仕方ない、ここは私がやるよ」
「私も残ろうか。先に行け」

ブーディカと荊軻がワイバーンたちを足止めする。
だが、アルトリウスが立ち止まる。

「必要ない、既に
奴もこちらに狙いを定めている」
『不味い、またアルテラが宝具を撃つてくる!』
「ならば私も宝具を放つまでよ。
マスター、魔力をあるだけ寄越せ」
「ちよ、マスターはまだ……!!」
「沖田、いい。」

てめえただでさえ魔力ごっそり持つて
行きやがったのにまだ必要ってんなら、
一撃で終わらせねえと令呪で自害させるからな」
アルトリウスを睨み付ける。
沖田に肩を貸してもらい、左手の令呪を
介して魔力を送りつける。
それに彼は凶悪に笑う。

「よかろう。我が剣撃、見せてくれる」

そして彼は、剣を振り上げる。
左足を後ろに下げ、大上段に構える。
その構えに、マシユと立香が戦慄する。
ネロも既視感があるような顔だ。

「も、もしかしてあの、構え」

『……………ああ!!?』

思い出した、思い出したぞ！
アルトリウス・ルキウス・カストウス！』

通信越しからドクターの驚愕の声が聞こえてくる。
そうだ、彼がローマに召喚された意味もある。
これを予期した世界の抑止力なのかは知らんが、
彼は明らかに、この世界には大きすぎる力だ。

『古代ローマ2世紀後半の軍人、
そして……………騎士王伝説の元になった人物だ!!』
「[!:]」

その言葉に俺以外の全員が言葉を失う。

アルトリウスが掲げる剣が、
眩しいほどの極光を纏う。

「是、我が剣にあらず。

しかして、我が勝利は確立するもの。

しかしてこれは、世界を救う戦いなりて——!!」

遠くでも巨大な虹色の光が渦を巻き、収束。

光が周囲に舞い上がり、

そして——

『揺るぎ無き勝利の剣』

『軍神の剣!!』

大きく振り下ろされた極光と、

回転し渦を巻く虹の光が衝突する。

回転によるものか、聖杯の魔力によるものか。

極光が穿たれていく。

虹色の光は極光を取り込み、

更にその勢いと巨大きを増していく。

押し負ける、と誰もが感じた。

だから。

「まだ………まだ終わってはおらぬぞ!!」

「沖田!!」「マシユ——!!」

「承知!!」「お任せください!!」

3人の英霊が、走り出す。

俺と立香は残った令呪を起動する。

「令呪を以て命ずる！」

立香の令呪が2つ、俺の令呪が1つ、同時に叫び、消滅する。

「宝具、解放!!」

令呪が赤く輝き、

サーヴァントに魔力が送られる。

……ヤバい、死にそう。

薄れる意識を唇を血が滲むほど強く噛んで保ち、令呪による宝具を解放させる。

マシユとネロが極光の傍に立ち、

沖田が高速で走り出す。

あの極光と虹の光にモロに吞まれては危険だ。残った魔力を絞り出し、沖田へ礼装防御を施す。

「大王よ、破壊しか知らぬのなら見るがいい！」

我が才を見よ！万雷の喝采を聞け！

しかして讚えるがよい、この黄金劇場を!!」

「真名、偽装登録……!!」

——宝具、展開します!!」

「一歩音越え、二歩無間——」

ネロが黄金劇場を投影し、剣を振り上げる。

マシユが盾を構え、魔力障壁を展開。

沖田が神速で極光の真下へと接近する。

「ラウス・セント・クラウディウス
童女謳う華の帝政!!」

「ロイド・カレル
仮想宝具 疑似展開／人理の礎!!」

ネロとマシユ、2人の宝具が展開する。

ネロが剣を振り下ろし、爆炎の斬撃を放ち、マシユが虹の光を抑える。

そして、沖田が礼装強化、

黄金劇場と魔力障壁の防護を受け、

『三步絶刀』。極光へと飛び込む。

「…馬鹿な……!!」

『無明三段突き』!!」

勝利の剣の極光を纏った3本の閃光が、

極光と虹の光の両方を撃ち抜き、空を穿った。

第22話 「セプテム、終幕」

空を、3本の閃光が走る。

「……………っは、見事よな」

目の前でアルトリウスが消滅する。
あれだけ巨大な斬撃を不安定な霊基で撃つたのだ。
サーヴァントのような光ではなく、
空間に溶けるように、
その言葉だけを残して消えた。

「……………全く、余は疲れたぞ」

「お疲れ様です、ネロ陛下。

戦闘終了。ありがとうございます、先輩」

「うん、みんなお疲れ。

沖田さん迎えに行こうか」

「沖田さん大勝利ー!!」

「見てましたかマスターー!!」

「うおっすと、元気だな」

沖田が助走をつけて飛び付いてくる。
珍しく大胆なので抱き止める。
雑に放つたらかきにされている聖杯は
立香が拾い上げた。

「ええ！今回はコフることもなく！」

「そりや良かった。」

あとそれフラグだから無理すんな？」

「あっはい」

沖田を降ろす。

するとネロが改めて、と言った様子でこちらへ
歩み寄ってくる。

「これにてローマの危機は去った。」

立香、マシユ、真機、沖田……………大義であった。
いや、ここは仲間として、だな。ありがとう！」

その言葉に俺たちは笑みを浮かべる。

ネロからの、共に戦った仲間としての礼だった。
瞬間、世界が光に包まれる。

「……………これから宴でも、と思ったが、

もう行ってしまうのだな」

「うん。こっちこそありがとうね」

「うむ。さよならは言わぬ、

きつとどこかでまた、共に戦う時が来るだろう」
「……………ん？」

ネロが、不意にこちらを見る。
なんだろう。

「真機、実を言うとな。」

余、そなたが嫌いだった」

「衝撃の告白」

「なんで？」

「なんというか、同族嫌悪というやつか？」

余にどこか似ているのだ、そなたは」

「え、どこが？」

全員が首を傾げる。

全く、というほどでもないが、

似ているような感覚はないというか。

「無理を進んでするところ、とかだな」

「あー、確かに」「本当ですね」「はあ……」

「全員でその目向けんのやめて？」

あと沖田溜め息つかないで」

なにこれ流行ってんの？

同じようなことを来る前にもされたような。

俺は苦い顔をする。

「余もそうだが……お前は仲間のためなら

命だろうと簡単に投げ捨てる。だろう？」

「そりゃそうだろう」

「そういうところですマスター」

「沖田が言いたいことを引き継ぐが、

もっと仲間を頼れ。

お前が思っているより、カルデアは強い」

皆がそうだそうだ、と首を縦に振る。

……そうかもしれない。意識してみよう。

「分かったよ、だから沖田、睨まないでくれ」

「分かったんならそれでいいです。」

で、す、け、ど！

今度無茶したらホントにぶった斬りますよ！」

「はいはい……」

「うむ、頼れる仲間がいるのはいいことだ」

「ん？」

ネロは、その顔に最大の笑みを浮かべていた。

自信に満ち溢れているその顔は、

まるで俺を鼓舞するかのよう。

薄れる意識と視界の中、彼女は言った。

「手を伸ばすのはそなただ。

人の声を聞け。世界を見よ。未来を取れ。

自分を、仲間を、命を、信じよ」

光が世界を呑み、消失する。

2つ目の特異点が、消える。

定礎復元
永続狂気帝国セプテム

第二特異点終了後 幕間の物語
幕間「橘 真機の悪い癖」

「そういえばさ、真機くんって
かなり軽装で戦ってるよね」

「そうか？」

立香が言う。

2人がいるのはカルデアのトレーニングルーム。
今までランニングマシンで走っており、
今は椅子に座り、水を飲みながら話していた。

「うん、危なくない？」

「重くなったら俺やってけないんだけど」

「それもそっか。」

はー疲れた、それじゃ帰るね。

真機くんはどうする？」

立香が立ち上がり、タオルで顔を拭って
言いながら出口へと歩いていく。

「俺もボトル捨てて帰るわ。」

汗かいたからな、先行っててくれ」

「おけ、それじゃお疲れ。おやすみー」

「お疲れさん」

真機は立香を見送り、

ゴミ箱にペットボトルを投げ入れる。

そして入ったのを見て小さくガッツポーズをとり、

トレーニングルームから出て自室へと向かう。
自室へ入り、そしてそのまま服を脱ぐ。
服を洗濯機へと投げ込み、風呂へ入る。

数分後、

シャワーを浴び終え、時計を確認する。

時計は23時を指していた。

そして髪を乾かし服を着ないまま

真機はベッドへと入り、音楽プレーヤーに

イヤフォンをセットし、耳につける。

そして枕の横に置いてある本を開く。

「♪」

音楽に合わせて鼻歌を歌いながら

真機は頁をめくる。

葉がある頁にたどり着き、葉を啜える。

「……………」

そして、数分後。

「きゃあああああああああ!!!?」

「うおっ、なんだなんだ!!!?」

「ぶはあッ!!」

そのGでも見つけたかのような凄まじい悲鳴に

真機の少し眠くなっていた意識は一気に

覚醒し飛び起きる。

悲鳴の方向を見ると、開いている入口で

鼻血を流して倒れている沖田を見つける。

「沖田ああああ!？」

「どうしたんですか真機先輩はあッ!？」

「マシユウ!？」

沖田と同じようにマシユが鼻血を
吹き出して倒れる。

「うわっ、真機くん何で裸なの!？」

「それより2人がヤバいだろ!!」

「それより服だから!!!」

「多分それが元凶だから!!!」

「うん。取り敢えず出血は大丈夫かな。

真機くんは服をちゃんと着ようね」

「すいませんでした」

「うっはっはははははは!!!」

裸見て鼻血吹き出すとか

……うははははははははははほげほげほっ!!!」

「ノッブうるさい」

爆笑して咳き込むノツブの頬を両手で挟む立香。

2人は治療室へと運び込まれ、

俺はドクターから厳しいお叱りを

受けることになったのだった。

治療室で詳しいことを聞かれる。

「げっほげほ……………それにしても、

まさかあのマシユまで鼻血吹くとは……………」

「あの子純粹だからなあ……………」

「まあ沖田さんは分かってたけど。

でも吐血じゃなくて鼻血だったかー」

「よくよく考えたら耐性なさそうじゃな」

服を着せられ、俺は苦い顔。

「沖田を部屋に入れて服を脱いでた……………」

……………あつ（察し）……………真機、残念じゃったな」

「ノツブその顔やめろ。」

その憐れんでんのか笑い堪えてんのか

分からねえ顔やめろ」

「えっ真機くんマジで?」

「違いますから。音楽聞いてたので

入って来たのが分からなかったんですよ……………」

服を脱ぐのは……………癖です。

寝れないんですよ、脱がないと」

「ええ……………」

これがカルデアの小さな事件として

カルデアにいるサーヴァントたちの中で

語り継がれることを俺たちはまだ知らない。

第三特異点 封鎖終局四海 オケアノス
第1話「第三の特異点」

早朝。

呼び出しが放送でかけられ、

俺は早足で管制室へと向かう。

自動ドアが開くと、そこには既に皆が揃っていた。

「おはよう、沖田、立香、マシユ。

おはようございます、ドクター。」

「……………ごめん、遅くなったか？」

「おはようございます、真機先輩。」

「私たちも今来た所ですので大丈夫ですよ」

「おはようございます、マスター」

「おはよー、後は……………」

「おっはー！皆、調子はどうかな？」

俺の後ろからダ・ヴィンチが現れる。

「どうやら最後は俺ではなく彼女(?)のようだ。」

前に出てダ・ヴィンチを先に行かせる。

そして、ドクターが俺たちの前に立った。

「さて、ダ・ヴィンチも来たね。」

「おはよう、みんな。昨日はよく眠れたかな？」

「ちなみにボクはちよつと不眠気味だ」

「ちゃんと寝てくださいドクター」

「うーん、気をつけてはいるんだけどね。」

とと、話が脱線しそうだから戻そうか」

ドクターは軽く咳払いし、
顔を真剣なものへと変える。
俺たちもそれを見て頬を引き締める。

「レフ・ライノールを倒して第二の聖杯を回収。

聞こえはいいけど疑問は増えるばかりだ」

「レフ・ライノール・フラウロス、だったかな。

魔神とか言ってたっけ？」

「ああ、あの肉の柱……………」

七十二柱の魔神を名乗るアレは何なのか」

確かに、それは疑問に残る。

魔神を名乗る肉の柱。

想像以上の強さと気持ち悪さを兼ね備えたモノ。

……………その辺、実は記憶が曖昧だ。

確か、光に吞まれて……………それを宝具と警戒して、
それからの記憶が途切れている。

——誰も、それを話してはくれない。

「解析するにも時間も設備も足りない、悪い」

「あの……………ドクター」

マシユが手をあげる。

誰もが言いたいことを理解していた。

ドクターも頷く。

「七十二柱の魔神と言えば、その……………」

「ああ、思い当たるのは一つ。

古代の王が使役したという使い魔……………」

「……………アレ使い魔だったの？」

……………立香の呆然とした顔と同じ感想を、俺も抱いていた。

あの化物が、使い魔程度の存在？

それを扱う古代の王とやらは——

「その通り。古代イスラエルの王にして

魔術世界・最大にして最高の召喚術士！

彼が使役する使い魔こそ、

名高き七十二柱の魔神たちってワケなのさ！」

「まあそんなもの空想上に過ぎないんだけどね。

実際には魔神なんて存在しないよ。

アレらはただ七十二の用途に分かれた

使い魔に過ぎない、つてのが最新の見解だろ？」

「まあねー、きっちりと役割が決まっているから

天使の起源では、とも言われている。

だけど実際に名乗った以上、

無関係ってことはじゃないんじゃない？」

ダ・ヴィンチ、ドクターの2人が言う。

……………まあ確かに、偽物である可能性は否めない。

だがダ・ヴィンチの言う通り、

本物である可能性がない訳ではないのだ。

「レフか、レフを操る黒幕が

例の王様を召喚した、って仮説は？」

「その可能性はなくもない……………けど、

七十二柱の魔神なんてのは考えられないな……………

真機くんが沖田さんが実際に戦ったからこそ、

データと存在そのものが伝説通りすぎる。

彼の王よりも後に誕生したものだからね」

「うーん、魔神に縁のあるサーヴァントにでも

話を聞ければ楽なんだけどねえ……」

「ああ、だから今は魔神については

ノーコメント。憶測の域を出ないからね」

俺も立香もちんぷんかんぷんである。

魔術使いとはいえ、魔術に詳しいわけではないし。

もっともまともな教育は受けていない。

世界史については英霊に興味があったから

カルデアのデータで粗方勉強しただけだし。

マシユと沖田も微妙そうな顔をしている。

「それより今は三つ目の聖杯だ。

真機くん、船酔いはするかい？

他の3人はローマで検証済みだけど」

「いや、ないですけど………船、ですか」

「ああ、それなら良いんだ。

いざとなれば中枢神経にも

効く酔い止めを用意する所だ」

「「??」「」「フォーウ！」

「うおわっ!?!」

俺たちは首を傾げる。

すると、フォウがマシユの腕から俺の頭へ

飛び移りピョンピョンと跳ねる。

どうやらまたフォウもついて来るようだ。

「フォ、フォウさん!?!」

失礼ですし、すぐに降りて——」

「いや、慣れたから良いけど………」

「ふむ、まあフォウがいるとマシユの

精神状態も安定するし、よろしく頼むよ。

レイシフトの先は新天地だ、
馴染みのものは多い方がいいしね」

「ごめんなさい、ピンチの時ほど

フオウさんがいると落ち着くというか……………」

マシユが少し恥ずかしそうに俯く。

まあ戦闘に支障はないらしいし、

別に俺たちも和むから構わないだろう。

フオウがいると俺も心なしか楽になるし。

「という訳で、今回は1573年。

場所は——見渡す限りの大海原だ」

これは、海を渡る者の物語。

星の開拓者として生きた大海賊。

そしてその仲間たち。

その誇りと力は荒れ狂う海を突き進む。

その海に生きる者たちの在り方は——

第2話 「大海、海賊船の上で」

「で……ドクター、海賊ども。」

何か言い残すことはあるか」

『ボクまで!』

ねえそこまでする必要ある!』

「まーまー、落ち着いてよ」

ビシヨビシヨに濡れた服と銃。

俺はその身体で海賊の船長と思われる男の首を
締め上げようと壁に押さえつけ、

立香に止められて腕を離す。

戦闘終了、と得物と戦気を納めるサーヴァント

2人を横目に見ながら俺も戦意を抑えた。

『悪かったよ、けど……おかしいなあ。』

真機くんだけ海にレイシフトしたんだろう?』

「溺れて死ぬかと思っただぞ」

「その憂さ晴らしで海賊の

皆さんを全滅させて貰えたのは助かりますが……」

「大丈夫ですか?」

マスター、風邪には気をつけないですよ」

「なんでだろう?」

そう、俺だけレイシフトに失敗。

“海上”ならまだしも、

俺はなんと“海中”でレイシフトされていた。

この中で泳いだ経験のある立香に

なんとか助けてもらい、

これまた不幸なことに俺たちは海賊船の上にいた。俺たちはそれを一度、戦闘不能まで追い込んで戦意を削ぐだけで戦闘を終えたのだった。

『うーん……何故か真機くんだけ』

座標が少しブレるんだよねえ?』

「フオーウ」

「フオーウさんはいつも通りですが……あ!

座標を固定されてる方と同じコフィンに入ればいいのでは?」

確かに、それならばマシユの盾の内側に入ってレイシフトしているフオーウと同じようにすれば座標のズレを直せるだろう。

ホログラムで映し出されるドクターとダヴィンチが頷く。

『そうだね、少し狭いけどそうするしかないか。』

じゃあ今度から真機くんは沖田さんと

一緒にコフィンに入ってもらおうことにしようか』

「えっ!?わ、私とですか!」

「私は盾がありますし……」

『別に立香ちゃんでも良いけど……』

今思えばかなりの女所帯だね。

今更だけど真機くん、頑張つて。色々』

「自然体じゃないとやってられないです」

ぶっちゃけると本音出してやっていかないと辛い。

また帰ったら厨房のアーチャーに

愚痴を聞いてもらおうとしよう。

海に落ちたと。

俺は濡れた上着を脱ぐ。

「ちよ、マスタあ、っ!？」

「まだ慣れないのか……普通だと思っただが」

「真機くんの普通は異常だと思っただが」

「先輩ちよつと辛辣です」

また赤い顔で鼻を抑える沖田に

俺は苦い顔で渋々服を着直す。

そして立香の鋭い一撃が心を抉る。

とにかく、武器はあるに越したことはない。

ナイフと火薬がダメになったので

海賊どものハンドガンとサーベルを拝借する。

そういえば銃の普及が始まった頃のものが

解体して弄ってみたい欲求を抑えて

腰のベルトに武器2つを固定する。

「通信機だけは落とさなくて良かった」

「どなたか、この海が何処で

どういう状況か説明して頂けますか？」

マシユが伸びている海賊たちに呼び掛けると

先程の船長と思われる男が手をあげる。

「いやあそれが俺たちにもさっぱりですよ……」

「気付いたらこの辺を漂流してたんでさ。」

「地図も羅針盤も役に立たねえ。」

「そんな時に急に目の前に獲物が現れたら

そりゃ襲うしかねえだろ？海賊として」

「まさかの様式美と状況理解も出来てないなんて
まったく、頭沸いてる海賊ですね。」

海援隊を見習ったらどうですか？」

「沖田も言い過ぎだと思うが」

お前たちに行くアテもないのか？」

海援隊といえは坂本竜馬や勝海舟だが、
彼らもサーヴァントとして英霊の座に登録されて
いるのだろうか。

俺はそんなことを考えながら聞くと

船長（？）の男は首を横に振った。

「同業に聞いた話なんすが海賊島を目指して。

もう水も食糧も乏しくなってきた

そこを目指そうと思っていた所だし」

『海賊島か……他に行くアテもない。』

まずはそこに行ってみてくれるかい？」

「了解。じゃあ皆、

勝者権限で私たちも海賊島に連れてって。

はい、面舵いっばい」

「一二アイ・アイ・サー！一二」

こうして、船を乗っ取った俺たちは
海賊島へと向かうのだった。